こんぺいとう

大平麻由理

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

こんぺいとう

【Ｎコード】

Ｎ８７７３Ｃ

【作者名】

大平麻由理

【あらすじ】

中学三年生の柊（ひいらぎ）は農家に住む一人娘。近所に住む同級生の遥（はるか）や、クラスメイトと織り成す日常生活を描く。そんな柊が好きになった人は、思いもよらなかったとっても身近な人。幼馴染同士の恋の行方は山あり谷あり。物語は中学から高校へ。１１／２９番外編最終話≪初恋は永遠に１７≫更新！続こんぺいとうへと物語りは続きます。

1．朝の祈り

石やコンクリートの塊がゴロゴロしているまだ舗装されていない道を、ゆっくりと下っていった。

道の脇にはタンポポが咲いている。その周りにはスギナ。

ゆらりと風になびくと葉っぱの香りがした。春の香りだ。

学校までの道のりは歩いて三十分くらい。距離にして二キロメートルくらいだろうか。

新しい住宅街が農村の一部にまで入り込んで来るのを、ずっとこの眼で見ながら育った。

ブルドーザーが小高い丘は切り崩していく。ダンプが運んだ土を池に埋め田畑に盛り、宅地造成が進んでゆく。

重機が木を切り倒し、地面をならす。基礎を築いてパネルを組み合わせるようにして家やマンションが出来上っていく。

何もないところにある日突然姿を現す建造物。

本当に人間が造ったの？　と思えるほど、魔法のように瞬く間に建物が完成する。

人はこれを自然破壊というのかもしれないが、人間が生命を繋いでいくために野山を切り開き住処を求めたのは、何も今に始まったこ

とではない。

太古の昔から人はそうやって村を作り、人間同士支え合って生きて来たのだ。

このあたりも昔は蔵城(くらしろ)家の土地だったと聞く。

今では他人の手に渡り、各地からやってきた人々がここに根を下ろし日々の生活を営んでいる。

その住宅街と新たな造成地の北側にわたしの家がある。

日本古来の農家の典型のようなそのたたずまいは、一見冷ややかで寂しそうにも見える。でも決してそうではない。

友達の家のようにおしゃれな門や、カラフルなガーデニングの庭はないけれど、朝一番に母さんが雨戸を開ける時の少し引き連れたようなぎいっという音や、畳の青い匂い、父さんが廊下を歩くとかすかに鳴る窓ガラスのカタカタと震えるような音に、ふと心の安堵を覚えるのだ。

家から数十メートルほど離れたところに同級生の遥(はるか)の家がある。

同じような農家だが、うちとは決定的な違いがある。

母屋の少し離れたところに建っている洋風のペンションみたいな小さな家に、遥の家族が住んでいるのだ。

広い母屋には彼のおばあちゃんが一人で暮らしている。

遥と妹の希美香（きみか）とおじさんおばさんの四人は、なぜかその小さな家に住んでいて、それはとても不思議な光景に思えた。

あんなに部屋が余っているのに、どうしてみんなで一緒に母屋に住まないのかと遥に訊いたことがあった。

さあ、俺は知らない……と気のない返事をもらって、ますます疑問が膨らむ。

母さんから、嫁姑の問題を避けるため別所帯にしているのでは、と聞いた時、子供ながらになぜか納得した記憶がある。

わたしの家の軒先と遥の家のとんがり屋根が見えなくなるところまで下りて来ると、急にあたりに住宅が増え始める。

初めての信号を渡って真っ直ぐ三百メートルほど行ったところにようやく通い慣れた中学校が姿を現した。

今日は始業式だ。中学校生活もあと一年を残すだけになった。

ついこの間に入学したばかりだと思っていたのに。月日のたつのはなんて早いんだろう。

昨日、父さんに同じことを言ったら、おまえそれでも中学生かとあ

きれた顔をされた。

わたしは少し、おばさんくさいところがあるらしい。

登校して来た生徒は体育館に集合して、クラス分けの発表を待つことになっている。

ここは中学校にしてはクラス数が少ないのかもしれない。

というのも、一学年、たったの四クラスしかないからだ。

でも、街の人口は確実に増加しているので、これから先は、生徒数も増えていくだろう。

同じ小学校からこの中学に進学してきた人が多いので、知らない人は別の小学校だった人とわずかな転校生くらいだ。

誰と同じクラスになってもお互いに良く知った仲だから、別段クラス替えに不安はない。

周りで心配そうな顔をしている同級生には悪いけど、仲のいい友達とクラスが分かれても、その時は新しい出会いに期待すればいいと思っている。

少しばかり、少女らしからぬ冷めた考えを持ったわたしは、やっぱりちょっと変わっているのかもしれない。

「ひいら！　おはよう。あ～ん。ひいらと同じクラスになれなかったら、あたし、どうしよう。この世の終わりだよ。絶対に耐えられない！　ねっねっ。ひいらもそう思うでしょ？」

朝の静寂を見事に破ってくれたのは、親友の夢ちゃんこと篠川夢美だった。

この世の終わりだなんて、大げさな……。

同じクラスにならなくても親友であることには変わりないのに、どうしてこんなに騒いでるのだろう。

わたしには彼女の悩みがさっぱりわからない。

こんな自分の性格は、とっくの昔に気付いている。

あちこちで親友同士が固まって同じような会話をしているのが、滑稽に思える。

あまり感情を表に出さない性格がそうさせるのだろうか。

でもわたしはわたし。それでもちっともかまわない。

そうは言っても、中学校生活の二年間でそれなりに人に合わせることも学んだ。

ここで少しばかりその成果が発揮できたかもしれない。

「そうだね。わたしも夢ちゃんと離れるのは寂しいよ。同じクラスになれるといいな」

表情まで寂しそうにできただろうか。

棒読みになったけど、気持ちは伝わったと思う。一緒のクラスの方がいいのは嘘ではない。

「ふふ。ひいらも同じ気持ちだったんだ。嬉しいな。それじゃあ二人で祈ろうよ！　こうやって手を握って目をつぶって、神様にひいらとあたしが一緒のクラスになれるようにって、お願いするの」

夢美は向かい合ったわたしの手を取って二人の間の顔の位置まで持ってくると、目を閉じてぶつぶつと何やらお願いを唱え始めたのだ。

ぎゅっと閉じたまつげを時々震わせ、あまりにも真剣にもにゃもにゃとつぶやいているので、おかしくてついつい笑ってしまいそうになった。

これ以上見ていたら本気で笑いのツボに嵌ってしまう。

いけない、いけない。そうなる前に目を閉じなければ、夢美を傷付けてしまうしね。

笑い出す前におまじないの儀式に参加できたわたしは、夢美と同じクラスになれますようにと、見よう見まねで心の中でそっとつぶやいてみた。

これくらい願えばもう十分だろうと目を開けると、まだ彼女はおお願いの真っ最中だった。

くせ毛のくるんとカールした長い髪をゆるく二つに結び、白い肌に

ほんのり薄く色付いたピンク色の頬は、女のわたしから見てもかわいらしいと思う。

わたしもこんな風に、ふわふわとした感じで、リボンやレースの似合う女の子になりたかったなと思いながら、目の前の夢美に見とれていた。

わたしはと言えば、肩の少し上で切りそろえられた何の変哲もないスクールカット風のヘアスタイルで、おまけに文化部なのに、なぜか肌がこんがりと日焼けしている。

今まであまり気にしなかった自分の外見に、最近はコンプレックスを感じ始めていた。

そして、そんな自分自身の心の変化に、私自身、少し戸惑ってもいた。

わたしがあれこれと思いをめぐらしている最中、耳元でクックックッと笑う声がした。

この声の主は。やはりあいつしかいない。

遥だ。

「おまえら気持ちわるっ。女同士で手なんかつなぎやがって、いったい何やってるんだよ。ははん、クラス分けのおまじないか？　今さらお願いしたって、間に合うわけないだろ。もうとっくにクラス

なんてものは決まってるんだからさ。春休みの間に確定済みなんだよ。はーい、残念っ！」

遥の言うことにも一理ある。まさしくその通りだ。

だが、しかし。乙女のささやかなお願いの儀式に口を出すのは、いくら彼であっても許せない。

「はる……いや、堂野君。この神聖な儀式に何か文句でも？　それとも、あんたも一緒にやりたかった？」

こう言っておけば、男としてのプライドが許さない遥は、今すぐにでもここから逃げ出すだろう。

目の前の夢美が目をまんまるにして、言葉を失くしている。

まかせて。ここは彼女の親友であるわたしの腕の見せ所なんだから。

中学生になってから、遥との会話は減る一方だった。

今、彼に話しかけられて、実のところは嬉しくて天にも昇りそうな気分なのだけれど、夢美に悟られないように冷静に彼とわたり合わなくてはいけない。

なのに、今日の遥は。いつもと、違った。

「それは光栄だな。じゃあ俺も仲間に入れてもらおっかなー？」

な、なんだって？　まだここにいると言うのだろうか。

まさか遥が、ここまで執拗に絡んでくるとは思わなかったので、たちまち返事に困る。

あきらかに、わたしたちをからかっているのだ。いや、わたしをからかっている。

でも自称オトナなわたしは、取り乱すことなくゆっくりと遥の手を取った。

いやだ。ドキドキするじゃない。

昔から、手くらい、いつも繋いでいたんだし。

今更驚くことでもなんでもない。

落ち着け、落ち着くんだ。

くれぐれも二人に心の内を気付かれないように、慎重にやらなければいけないのに。

心臓はありえないほど激しく、ドキドキと早鐘を打つ。

三人の手を重ね合わせようとしたその瞬間、夢美と遥が急に手を引っ込めた。

二人を見るとどことなく頬が紅い。

これって、もしかして……。

この二人は怪しいってこと？

お互いに意識し合っているってこと？

夢美が遥に恋をしているのは知っていたけど、遥も夢美のことを？

それが事実ならば、ここでわたしは顔面蒼白になって、この場から逃げ出さなければいけない状況のはず。

こんなところにいつまでもいて、二人の邪魔をしてはいけないのに。

でも身体が動かなくて。逃げ出したいのに、足が言うことをきかなくて。

何も気付かないふりをして、そこに立っている。

そう。まだ誰にも言ってないけれど。

わたしも遥のことが。

実は、好きだったり……するのだ。

2．クリスマスの出来事　その1

遥のことが好きかもしれないと自覚したのは、確か去年のクリスマスの頃だったと思う。

無駄に広い典型的な古民家であるわたしの家は、クラスの女子全員が集まるのにちょうど都合がいい。

仲良しグループだけで集まりたかった夢美からは、なんでクラスの女子全員を呼んだのかとちょっぴり反感を買ったりもしたけれど。

あとあと、人間関係がこじれるかもしれないと不安になることを考えると、人を選んで呼ぶなんて芸当はとてもじゃないができなかったのだ。

だからクラス全員の女子を招いたのは必然的ななりゆきだった。

二十人近くが続き間の和室に集まって、ゲームをしたりお菓子を食べたりして賑やかなひと時を過ごした。

わたしには姉妹がいない。もちろん、兄も弟もいない。

でも、隣の遥の家は共働きなので、日中は遥の妹の希美香がうちに来ていることが多い。

遥と希美香とわたしの三人は、まるで本当の姉妹のように育った。

なので自分が一人っ子だという自覚はあまりない。

それに希美香とは二つしか年が違わないこともあって、お互いにいい遊び相手になっている。

この日も希美香は違和感なくわたしのクラスメイトたちに溶け込んで、一緒にクリスマス会を楽しんでいた。

すると、突然、クラスメートの一人が希美香を指差して、驚きの叫び声をあげた。

と同時に、皆が一斉にそっちを見る。

「えええっ！　うっそー？　そんなの知らなかった。この子ひいらの妹じゃなかったの？　ど、ど、堂野の妹なの？　それならそうと早く言ってよ。ねえねえ希美香ちゃん。お兄さんもここに呼んで来て？　お、ね、が、い！」

希美香が困ったような顔をして、わたしに無言で助けを求めてくる。

二つ違いといっても、名前も知らない初めて会ったばかりの中学生のお姉さんに、突然至近距離で迫られるのは、小六の女の子にはショッキングな出来事だったのだろう。

「ちょっと、川田さん。希美ちゃんがびっくりしてるよ。それになんではる……いや、堂野をここに呼ばなきゃいけないのよ？」

わたしが堂野なんて苗字で彼のことを言ったものだから、希美香はまたもやびっくりして不思議そうにこっちを見る。

まさかみんなの前で、馴れ馴れしくはるかなどと呼ぶわけにもいかない。

間に挟まれたわたしは、身動きの取れない苦しさにめまいを起こしそうになった。

「だって、堂野だよ。このクラスにも彼にラブな人、何人かいるんじゃない？　もちろんあたしもその一人。ねえねえ、堅いこと言わないで連れてきてよ。希美香ちゃん、お願い！」

川田がさもあたりまえのようにラブと言ったけれど。

それって、あれだよね。遥が好きってことだ。

ありえない。

わたしは心の中で川田のことを思いっきり嘲り笑ってやった。

遥は最近、うちへの足が遠のいている。

わたしは希美香と遊ぶのをいいことに、今でも頻繁にあいつの部屋に出入りしているけど、何故かよそよそしくて冷たい。

どうせ声をかけても女子ばかりいるこの部屋には来ないだろう。

ここは、川田と目をきらきらさせて遥の登場を待ち望んでいる他のクラスメイトのために、誘うフリだけでもするべきなのかもしれない。

絶対にこないだろうと確信したわたしは、彼に誘いの電話をするため、しぶしぶ受話器を取った。

「もしもし、わたしだけど……」

『……なんだ、おまえか』

「わたしで悪かったわね」

『ああ、がっかりだ』

「それはこっちのセリフだし」

『それはどーも。それより、おめぇーんち、さっきからうるせーんだよな。ここまでギャーギャーと変な声が聞こえるし……』

こっちの内情がぜんぶ筒抜けなのだろうか。なら話は早い。

「何よ、その言い方。別にいいでしょ？　じゃあ言ってもしょうがないってわけだ。クラスの女子が、あんたに会いたがっているんだけどね……」

『はあ？』

「だ、か、ら。こっちに来ないかって言ってるの！」

しまった。突然大声を出したものだから、みんながわたしに注目している。

「あ、いや。無理にとは言わないから……」

今度は感情を抑えて、小さな声で訊ねた。

『……』

きっと返事に困っているのだろう。受話器の向こうで、気まずい沈黙が続く。

来たくないのなら、さっさとそう言えばいいのに。

こっちは川田の顔を立てて電話してるだけなんだから、遥が悩む必要など全くない。

「ねえ、聞いてるの？　わかった。来ないんだね？」

断りにくいのなら、こっちから切り出せばいい。

これで遥もわずらわしい誘いから逃れられるのだ。川田も納得するだろう。

「あっ、それと希美ちゃんだけど。今夜はこっちに泊まるから、綾子おばちゃんに言っといて。じゃあね、ばいばい」

そのまま有無を言わせずに電話を切ろうとしたのだが。

『柊！　ちょっと待て。わかったよ、そっちに行く。うめえもんもいっぱいあるんだろ？　それに俺って……。もしかして、モテモテ？』

わたしはあきれ返って力任せにガシャッと電話を切ると、皆に向って思いっきり低い声で伝えた。

「堂野が来るらしい」　と。

何が俺ってモテモテよ。

ああ、こんなことになるのなら電話なんかしなきゃよかった。

もう今更何を言ってみても遅い。後の祭りだ。

それから百も数えないうちに、遥がうちにやってきた。

わたしのことなどそ知らぬふりで、まるでこの家の主のようにみんなの中心になってはしゃいでいる。

みんなもみんなだ。

遥にばかり話しかけないでよ。ここは、わたしのうちだよ。

それなのに、それなのに……。

隣の堂野家はうちの親戚筋にあたるので、お互いにあまり遠慮がない。

わたしの曾おじいちゃんと遥の曾おじいちゃんは兄弟だ。

もちろんとっくの昔にその二人はこの世からいなくなっているので、仏間に飾ってあるしみがついた古い白黒写真でしか見たことないんだけどね。

それで、次男だった遥の曾おじいちゃんを分家として敷地内に家を

建てて独立させたのはいいけれど、とうとう子供に恵まれず、遠縁から養子を迎えることになったらしい。

今母屋に住んでいるおばあちゃんがその養子であるおじいさんのところにお嫁に来て、遥の父親である俊介おじさんが生まれたのだ。

ところが俊介おじさんが連れてきたお嫁さんは、ひとりっ子の綾子おばさん。

なのでまたいろいろともめて大変だったらしい。

俊介おじさんは綾子おばさんと別れたくない一心で、結局籍だけはおばさんの家の養子ということになっているけど、なんとか今は落ち着いている。

だからここに住んでいるけど、隣は堂野姓だ。

遥のおばあちゃんは、わたしと同じ蔵城姓。

俊介おじさんが養子になると決まった時、おばあちゃんのがっかりした様子といったらそれはなかったと、今でも時々父さんがお酒を飲みながら残念そうに話す。

わたしもひとりっ子だ。将来、よそへお嫁に行ったらどうなるのだろうと、ふと心配になる時がある。

だって、蔵城の名前が途絶えてしまうんだよ。

その時は遥に蔵城姓に戻ってもらって、希美香が堂野を名乗ればいいのかな？

いや、でも遥は長男だから、堂野家を継がないといけないし、だったら、希美香が養子をもらって蔵城を継いで。

いやいや、希美香だって長男と結婚することになるかもしれないし……。

考えれば考えるほどそれは答えの出ない迷宮のようで、子供のわたしは、たちまち理解不能に陥る。

つまり、わたしと遥は親戚筋というだけで、血のつながりはない。

小さい頃はそんなことを深く考えもしなかったけど、今はそれがとても重要なポイントなんだよね。

血縁関係がないことが、のちのちわたしの未来への希望へとつながっていくのだ。

2．クリスマスの出来事　その2

悔しいけれど遥のおかげでどんどんクリスマス会が盛り上がり、彼のおもしろおかしい話にみんなが笑い転げる。

わたしは希美香と目配せをして、いやそうに首を振り、大仰に肩をすぼめた。

遥の言うことなんて、全然おもしろくもなんともないよねって。

ところがみんなが帰宅したあと、わたしにとって天地がひっくり返るようなとんでもない事件が起きるのだ。

いや、事件というより、本当の自分の心の内を知る記念すべき日になったと言った方がいいのかもしれない。

誰もいなくなった散らかった和室を片付けて、自分の部屋にもどり、何気なく窓の外の遥の家に続く細い道に目をやった時だった。

ただならぬ事態を感じ取ったわたしは、曇っている窓ガラスを引っ張ったトレーナーの袖で拭って、顔を近づけた。

さっきまでうちにいたクラスメイト二人と遥が向かい合って立っているのが見えた。

何の話しをしているのだろうか。

今ここで窓を開けると外の三人に気付かれる。

話の内容はわからないけど、漂う雰囲気から察するに、ちょっと深刻そうにも見える。

少し時間をおいて部屋に入ってきた希美香が、わたしと同じように窓の水滴を拭って外を見た。

「ああ、また女の人が、お兄ちゃんに何か言ってる……」

希美香がぼそっと言った。

「また？　またってどういうこと？　ねえねえ希美ちゃん。遥っていつもあんな風に女の人に何か言われてるの？」

わたしは気になって、希美香に問いただした。

「うん。まあね。電話もいろんな人からかかってくるんだ。あんなののどこがいいのか知らないけど、お兄ちゃんってモテるみたい。お姉ちゃん、知らなかったの？」

「遥がモテるだって？　ええっ？　そんなの初めて聞いた。冗談言わないでよ」

「冗談じゃないってば。ホントなんだ」

「ホント？　でも……。さっき川田さんもそんなこと言ってたよね。わたしは何も知らないんだけど、ホントならびっくりだね。それにしても、あんなののどこがいいんだろうね？」

「うん。お姉ちゃんの友だちも他の中学生も、お兄ちゃんの本性を

知らないんだよ。意地悪で、乱暴者なのにね」

「そうそう。みんな騙されてるだけだよね」

希美香と顔を見合わせてフフフと笑ったその時だった。

どかどかと廊下を踏み鳴らす足音が聞こえて、誰かがやってきたかと思うと、ノックもせずに中に入ってくる。

「ちょっといいか？」

遥だった。つい今の今まで外で立ち話をしていた遥が、ここにいる。なんという素早さだろう。

その慌てぶりからして何かあっただろうことは予測できるけど、それよりも何よりも。二年ぶりにわたしの部屋に入って来てくれたのが嬉しくて、自然と頬が緩んでしまう。

あっ、そうそう。あくまでもこの時は、まだ遥のことを好きともなんとも思ってなかったから、単純に遊びに来てくれてうきうきと心が弾んでいただけのことだけどね。

「柊、何へらへらしてんの？　こっちは一大事だっていうのに。おい、希美香。おめえ、あることないこと柊にベラベラしゃべってるんじゃねえぞ！」

隣で今にも笑い出しそうになりながら希美香が肩を震わせて堪えている。

悪いけど。あることないこと、もう全部聞いてしまったあとだ。

六年生の妹の方が、こいつより一枚上手だね。

「遥こそ、何慌ててるのよ。何かあったの？　さっきそこで誰かとしゃべってたけど。そのこと？」

せっかくだから、軽く質問をしてみた。

「なんだ、見てたのかよ。なら先にそう言えよ。実はな、川田と細村がめんどくせーこといろいろ訊いてきあがって。俺に好きな人がいるのか、とか、付き合っている人はいるのか、ってね。それを訊いてどうするんだって聞いても何も答えないし……。マジでわけわかんねえよ、あいつら」

本当に遥が困っている様子は伝わってくる。

でもそんな話、別に困ることでもないと思うんだけど。

「俺にどうしろって言うんだ？　なんでそんなプライベートなことを全く関係ないやつらに教えなきゃなんねーんだよ」

それもそうだ。彼女たちに教える必要はこれっぽっちもない。

「さっき川田さんが、遥のこと、ラブとか言ってたけど。細村さんも遥のファンだったりして。あんたのこといろいろ知りたかっただけだと思うけどね。そのうち告白でもされるんじゃない？　モテモテで良かったじゃん、ねっ？」

少しばかり皮肉を込めて、遥にそう言ってやった。

「おまえさあ、それでいいと思うのか？　俺、１１月の文化祭が終わった後にも何人かに告白されてて、まだ誰にも返事してないんだ」

こ、こいつ。いったい何が言いたいのか……。

黙って話を聞いてあげたからって、そこまで調子に乗らなくてもいいのに。

久しぶりにわたしの部屋に来てくれて、ちょぴり嬉しいだなんて思ったこと、即取り消す！

「あんた、ここに何しに来たの？　それって自分がモテるからって自慢しに来ただけじゃない。その気がないのなら断ればいいだけでしょ？　そんなこと、いちいちわたしに報告しなくていいから！」

何故かムキになって言葉を荒げてしまった。

そもそも、最近会話すらまともにしていなかったのに、たまに話すとこんな過激な内容なわけで。

遥の恋愛事情なんて、わたしには全く関係のないこと。

もともと争いはエネルギーの無駄使いだと思っているので、今まで遥に対してあまり言い返したりすることはなかった。

それだけに、いまだかつてないわたしの激昂ぶりに、さすがに遥も驚いたのだろう。

少し間をおくと、今度はわたしの機嫌を窺うようにして、懇願のまなざしを向けてくる。

「柊。まあ、落ち着けよ。俺、もうあいつらとかかわりたくないから、おまえの口から適当に返事しておいてくれ。頼んだぞ」

それだけ言うと遥は部屋を出て行こうとして立ち上がった。

ちょ、ちょっと。待ちなさい！　いくらなんでもそれはない。

遥の腕をグイッと掴み、引き止めた。

「適当にって、どう言えばいいのよ。遥には彼女がいます。だから放っておいて下さいって、嘘でもついておけばいいの？」

「ああ、そのとおり。嘘でも何でもいいから、もう二度と俺に纏わりつかないように適当に言っといて。よろしく頼む！」

よろしくって……。遥はまたどかどかと廊下を走りながら嵐のように去っていく。

するとその後を小鍋を抱えた母さんが追いかけるのだ。

昔よく見たような気がする。いつだっただろう。このなつかしい光景は……。

さっきから家中に漂っていた醤油の香りは、確か、里芋とイカの煮物の匂いだ。

「はるくうーん。待って！　おばあちゃんにこの煮物持ってってちょうだ〜〜い」

多分母さんは追いつかない。

そのまま隣のおばあちゃんちまで、小鍋を抱えたまま走っていくんだろうな、などとぼんやりとそんなことを考えていた。

3．深層心理

その夜、布団の中にもぐりこみ、今日あったことを思い出して、順番に整理してみた。

クリスマス会そのものはとても楽しかった。

普段、あまりしゃべらないクラスメイトとも仲良くなれたし、みんなで持ち寄ったお菓子もおいしくて、プレゼント交換も盛り上がった。

――もちろんそれもこれも、遥がうちに来るまでという期間限定で。

皆が帰った後、遥に、川田と細村に適当に返事をしておいてくれと頼まれた。

――が、なぜわたしがあいつの尻拭いをしないといけないのか？

今日一日で二度も遥がうちに来てくれた。

最近なかったことなので、ちょっぴり嬉しかった。

――でも、モテ自慢を聞かされてイライラして腹が立った。そして、道であいつと立ち話をしている二人のクラスメイトにも心がざわついた……。

順を追って思い返しているうちに、無性に腹立たしくなってくる。

どうしてわたしが遥に腹を立てなきゃいけないんだろう。

まず第一に、遥がモテるなんてちっとも知らなかったし、彼がそんな対象として同級生から見られているなんてことも、今までこれっぽっちも想像できなかったから。

だから何も知らなかった自分に腹が立つのだろうか？

みんなが遥に注目している。それに腹を立てるわたし……。

これって、もしかして。

嫉妬？

「ねえねえ希美ちゃん。遥って、いつからそんなにモテるようになったの？」

隣に布団を並べて寝ている希美香にそれとなく訊いてみた。

「う――ん。中二になってからかな？　夏休みくらいから電話が多くなって、あたしが出たら何も言わずに切られたこともあったよ」

「無言電話か……。夏休みくらいからなんだね？」

「うん、そうだよ。ねえ、お姉ちゃん。学校でお兄ちゃんって、どんな様子なの？」

「どうなんだろ……。今、一緒のクラスじゃないし、正直あまり遥のことわかんなくて。今日、クラスのみんなの話を聞いて、初めて遥がモテるって気付いたくらいだから。信じられなくて、本当にびっくりしたんだ」

「お姉ちゃんでも知らないことがあるんだ。お兄ちゃんのことなら何でも知ってるって思ってた」

「そんなわけないよ。どっちかって言えば、今はあまり仲がいいとはいえないし」

「そっか、そうだよね。お兄ちゃんの意地悪はどんどんひどくなってるもんね。でもね、お兄ちゃんは女の人のこと面倒くさくていやみたい。だって、電話がかかってきたら居留守使うんだよ？　あたしに、お兄ちゃんは家にいないって言えって言うの」

「へぇ……。希美ちゃんも苦労するね。わたし、思うんだけどさ。いっそのこと、遥が誰かと付き合っちゃえば、その方が気が楽になるんじゃないかなって。誰か一人に決めちゃえば、すっきりすると思うけど」

遥の本心がわかるはずもなく、一般的な解決法しか思い浮かばない。もちろん、わたし自身の本当の気持ちにもまだ気付いていないから、そんなのん気なことが言えたのだけど……。

「あたしもお姉ちゃんの意見に賛成！　ここだけの話しだけど、お兄ちゃんったらさ、誰か好きな人がいるみたいなんだ。前に電話で、好きな人がいるから誰とも付き合えないって断ってたもん」

遥に好きな人？

いったい誰？

そんなの初めて聞いた。ずっと女嫌いだと思ってたわたしには衝撃的な内容だった。

同じクラスの人だろうか。それとも、部活の後輩とか……。

ど、どうしたんだろう。涙が出てくる。

胸がじんじんして、ぎゅうっと締め付けられるようで。

のどの奥が熱くなって、何かがこみ上げてくるような感じだ。

希美香に悟られないように反対側を向いて、寝たフリをしながら息を潜めて泣き続けていた。

次から次へと溢れる涙。瞼の裏に焼きついて離れない遥の姿。

憎たらしくて、悔しくて。

そして心臓がトクトクと音を立てて脈打つ。

どうしたというのだろう。

今すぐ遥のところに行って、真実を確かめたい。

好きな人なんていないと言って欲しい……。

その時初めて、遥が自分にとって特別な男の子だったと気付いたのだと思う。

誰にも取られたくない。わたしだけの遥でいて欲しいと心の底からそう思った。

記念すべきわたしの初恋第一号は、ドラマチックでもロマンチックでもない、超お手軽な、隣に住む親戚の男の子だったのだ。

わたしは今まで誰も好きになったことはないし、告白されたりしたことも、もちろんない。

そういう話は自分とは全く関係ない世界のことだと信じて疑わなかった。

おかげで遥の周りで起こっている華々しい出来事にも、全く関心もわかないし、気付きようがなかったのだ。

遥の好きな人のことも気になるけど、それより何より、遥が誰かと付き合うなんてことは、もっともっと嫌だ。

誰が何と言おうと嫌なものは嫌なのだ。

ついさっき、誰かと付き合った方が気が楽になるのに、なんて言ったけど。

と、とんでもないっ！

よし。そうと決まったら、明日の二学期の終業式は、川田にガツンととどめを刺しておこう。

さて、何て言えばいい？

「堂野はあんたなんか嫌いだって。だからこれ以上、あれこれ詮索しないでくれる？」

これはちょっとストレートすぎるよね。

わたしがすごい悪者になってしまいそうだ。

ならば……。

「今は勉強のことしか考えられないんだって。だから、もうこん輪際、堂野に近づかないで！」

確かに遥は勉強が出来るみたいだけど、そういうキャラじゃない。

それに、そこまで言ってしまうと、わたしがでしゃばり過ぎると思われないだろうか。

じゃあ……。

「女の子は苦手で、誰とも関わり合いたくないんだって。今はそっとしておいてくれる？」

ってのはどうだろう。

でも、苦手なわりに、今日は女子に囲まれて非常に嬉しそうだった。
超ご機嫌で、鼻の下がびよ～んと伸びていたではないか。
なのでこれも却下。だとすると……。
「実は堂野には好きな人がいて、他の人のことは考えられないんだって。だからもう話しかけないで欲しいって、そう言ってた」
これならどうだろう。一番わかりやすい答えだ。
でもその相手は誰なのって詮索されると、もっと困る。
それは、知りたいような知りたくないような、とってもデリケートな問題だから。
と言うことは……。
「部活に集中したいから、今は例え誰かを好きになっても、誰とも付き合う気はないって言ってた」
よし、これだ！　これしかないでしょ。
これならば川田は手も足も出ないはずだ。
いつの間にか涙も止まっていた。

打倒川田に燃えて、必殺とどめの一言を考え続けたおかげで、心の平安を取り戻す。

頭の中が遥のことでいっぱいなわたしは、とうとう明け方まで眠れなかった。

隣では希美香が何も知らずに、すやすやと寝息を立てている。

これが去年のクリスマス会の日の出来事。

ふとそんなことを思い出しながら、わたしは夢美としっかり手を取り合い、体育館で三年のクラス発表を今か今かと待っていた。

4．煎餅（せんべい）　その1

クラス分けの発表があり、夢美と見事に引き離されてしまったことを知る。

それも一組と四組。体育の授業すら別々になる。

案の定、夢美が泣きまねをしながら近寄ってきた。

「うえ～ん！　ひいらと離れ離れになっちゃったね。だって効き目絶大って本に書いてあったんだよ？　なのにひどくない？　あんなに一生懸命お願いしたのに、もう何も信じられないよ。あたし、ひいらに毎日手紙書くから……。ひいらも書いてね。ああ……。でも、でも、ホントに最悪っ！」

夢美は新しい上靴を履いた足で、床をドンドンと踏み鳴らした。

「何が最悪なの？」

口をへの字に曲げて、精一杯不機嫌な顔をする夢美に訊いてみた。

「だって川田と同じクラスだよ！　あ～ん、またもや恋のライバルと同じクラスなんだから、いやになっちゃう」

「そっか、よりによって川田さんか……。でも、放課後はわたしと一緒に帰れるし、今までどおり、塾のない日はうちに来て一緒に勉強すればいいし。そうすれば中二の時と何も変わらないと思うんだけど」

鼻息の荒い夢美をなだめるため、あれこれ思いつくままに言ってみるのだが、彼女の眉は八の字に下がったまま一向に好転する兆しは見えない。

「そうだよね。ひいらの言うとおりだと思う。それはわかってるんだけど……。でも、でも、やっぱこのクラス分け、納得いかない！　ひいらと同じクラスがよかったのに！」

夢美のカールした毛先が、怒りに合わせてさわさわっと揺れる。

「夢ちゃん、落ち着いて！　たった一年だよ。一年我慢すればここを卒業して、高校生になるんだし。だからね、お願い。元気だしてよ」

「うん。わかってる、わかってるって。文句言っても仕方ないよね。どうにもならないってわかっててもこの気持が収まらなくて……。ひいら、あたしのこと、こんなにも心配してくれてありがと。ひいらはいつだって優しいね」

「そ、そんなこと、ないけど。夢ちゃんの方が、わたしなんかよりずっと優しいし……」

胸がちくりと痛んだ。

さっき、同じクラスになるためのおまじないをする彼女を疎ましく思ったことが悔やまれる。

「でもいいなあ、ひいらは一組で。堂野くんも同じクラスでしょ？　ひいらにとってはどうでもいい相手かもしれないけど、もしもあたしが一組なら、嬉しすぎて今ごろ飛び跳ねてるだろうな。せめて

この最後の三年だけでも、彼と同じクラスになりたかったなあ……」

「夢ちゃん。出来ることならクラスを変わってあげたいよ。でも、そんな勝手なこと、出来ないしね」

これは本心だった。

別に遥と同じクラスにならなくても、わたしの場合、家に帰ればいつでも彼に会えるのだから。

夢美の望みを叶えてあげられない自分がもどかしい。

「ひいらはホントに優しいね。あたし、ひいらのためならなんでもする。だから、ひいらも何か困ったことがあったらあたしに言ってね。力になるからね」

「ありがと、夢ちゃん。その時は夢ちゃんに助けてもらうから。そうだ！　休み時間、一組に遊びにくればいいよ。そうすれば堂野にも会えるでしょ？　わたしも四組に遊びに行くからさ」

堂野くんのことが好き……と春休みに教えてくれた夢美だけど、もう遥のモテっぷりに慣れっこになってしまっていたわたしは、そのことに関して別段驚きもしなかった。

文化祭以降、遥が告白されたのは五人。

夢美みたいに想いを寄せてるだけのあこがれ組を入れると、その数は何人になるのやら。

他にも男子はいっぱいいるのに、どうしてみんな遥なんだろ。

フツフツと理不尽な怒りがこみ上げてくる。

だがしかし。わたしもそのうちの一人なのだから、人のことが言える立場ではない。

遥はおもしろくてひょうきんなくせに、勉強もできるという器用な奴だったりする。

ところがスポーツ万能とは言い難いところが、逆に人間味を感じて親しみやすく思える要因なのだと思う。

物語に出てくる王子様のように完璧ではないけれど、二年生の後半になって、やっと部活のバスケでレギュラーの座をゲットしたと言って喜んでいたっけ。

背の足りない分、日々の努力と持ち前の俊敏さで勝ち取ったポジションらしい。

遥は小さい頃から野球やサッカーは人並みにやってたけど、残念ながらどれもモノにならなかった。

落ち着きのなさが災いしたのか、せっかくの俊足を活かせず、補欠の座席をいつも暖めているばかりだったのだ。

くすぶっていたあの頃が嘘のように、最近の遥の活躍には目覚しいものがある。

バスケの春の中学校地区大会では、念願の優勝杯を手にして県大会まで出場した。

夢美に誘われて本人に内緒で地区大会の応援に行き、その勇姿に再び惚れ直したのは言うまでもない。

けれどなんといっても、おもしろいキャラクターというのは、今モテるためには一番の必要条件らしい。

あいつはおもしろい奴という評価は、勉強が出来ると言われるより高配当が付く。

わたしに言わせれば、そんな高配当は別にどうでもいいんだけどね。

だって、遥がおもしろいのは学校の中だけのことで、家に帰ったらちっともおもしろくなんかないんだもの。

皆は遥が二つの顔を使い分けていることを知らないだけなのだ。

あいつの顔の作りはどうかと訊ねられれば……。

いたって普通だと答えるだろう。

多分。おそらく……。

きっと、ありきたりな顔の持ち主じゃないかと思っている。

ただし、テレビに出ている美形アイドル……と称される人物を見て

も、一切ときめいたりしないわたしのことだ。

遥がイケメンかどうかなんて、わかるわけがない。

夢美や希美香にも、美的感覚がごっそり抜け落ちているといつも指摘されているので、彼を客観視することは非常に難しい。

わたしの審美眼は、まだまだ発展途上なのかもしれない。

いつの日か、遥の顔が誰よりも素敵に見える日が来るのだろうか。

夢美は遥の端正な顔がたまらなく好きだと言っていた。

ええ？　あの顔のどこがいいの？　と言いそうになったのを慌てて飲み込んで、彼女の反感を買うのだけはぎりぎり避けられたのだけど。

しいて言うならば、目は大きめで、口を閉じている時はそれなりにキリっと見える……ような気がしないでもない。

身長は、これまたわたしと同じか、心持ち遥の方が低いくらいで、すらーっとしてスタイル抜群とは言い難い。

でも顔が小さめで全体のバランスがいい……というか、これも実は夢美の受け売りなのだが、背が高く見えるのは得だと思う。

わたしも細さだけはあいつに負けないつもりだけど、本来出てしかるべきところもいたって控えめなので、最近ではそれも悩みの種だったりする。

つまり、幼児体型のまま手足だけ伸びてしまったと言えばわかるだろうか。

女らしい体つきの夢美には、到底、足元にも及ばない。

遥の父親である俊介おじさんは、かなり背が高い。

母屋の梁（はり）に頭をぶつけて、さすっているところをよく目にする。

昔、肩車をしてもらった時、富士山のてっぺんって、きっとこんな感じなんだろうなと思ったくらいにおじさんは背が高いのだ。

だから息子の遥も、きっと背が伸びるに違いないと、うちの父さんが常日頃から口癖のように言っている。

靴のサイズも二十七センチがきついと言っていたので、本当にまだ伸びるのかもしれない。

でもね、身長なんて本当はどうでもいいんだ。

実際問題、わたしより小さくても気にしない。

今の遥のままでいてくれたら、それでいいと思ってる。

4．煎餅（せんべい）　その2

教室に入って名簿順に座席に着く。

遥はわたしの二つ斜め後ろの席に座っていた。

チャイムが鳴ってからも周りを巻き込んで、夕べのお笑い番組についておもしろおかしく話しているのが背中越しに聞こえてくる。

時々、隣の席の白石史絵（ふみえ）がポツンと座っているわたしに気を遣って、遥たちの仲間に入れようと話を振ってくれるのだが、あいまいな返事をして、適当に頷くくらいにとどめておいた。

彼女の親切はありがたいけど、所詮、話の中心は遥だ。

あまり彼に深入りしたくない。

だってわたしは、さっきから虫の居所が悪いんだもの。

クラス発表の前、体育館で真っ赤になったあの二人……。

もしかしたら夢美と遥が両想いかもしれないのだ。

この最低最悪の状態で、ドロドロした嫉妬心が、ぞわぞわと胸の中に渦巻いてくる。

いざ遥を目の前にすると、理性を失って、何をしでかすかわからないような危険な状況なのだ。

あいつと関わらない限りは、なんとか平然を保っていられる。

この自制心の効いた大人な態度を見て。

我ながらあっぱれと、自分で自分を褒めて、ニヤリと笑みすら浮かべでしまう。

その時だった。不覚にもその不気味な一人笑いを遥に見られてしまったのは。

「なあ、柊。おまえ一人で、何笑ってるんだ？　あたま、大丈夫かあ？」

後ろからわざわざそばまでやってきて、腰をかがめてわたしを覗き込む。

「べ、別に……。そ、その、あれよ！　あれ！　今あんたが話してたその番組、昨日、わたしも見てたから。思い出して、笑ってただけ！」

苦し紛れに咄嗟に思いついた言い訳を口にする。

ところが敵は情け容赦なく攻め込んで来た。

「うそばっか……。おまえその時間、ばあちゃんとこで、せんべいバリバリ食ってたじゃないか。見てた番組は、時代劇だったんじゃねえの？　確か、暴れん坊……しょう……」

遥が憎たらしい笑みを浮かべ、わたしをからかう。

「そういうあんただって、おばあちゃんの部屋でおせんべい食べてたんだから。そのお笑い番組、見てないはずだけど？　何か、文句ある？」

そういえば途中から遥がおばあちゃんの部屋にやってきて、しょうゆ味のわたしのお気に入りのおせんべいを全部食べてしまったんだっけ。

その場に一緒に居たのだから、当然遥もお笑い番組を見てないはずだ。

この大嘘つき！

「へへへ……。残念でした。俺はちゃんとビデオ録画して、おまえが帰ってから全部しっかり見ましたけど。ナニカ？」

「ああ言いえば、こう言う……。ほんっと、いやな奴。遥は意地悪だって、おばあちゃんに言いつけてやる！」

「どうぞ、どうぞ。ご自由に。俺の意地悪は、何も今に始まったわけじゃない。それより柊。昨日のビデオ貸してやるから、おまえも見て感想言えよ。めちゃくちゃおもしろいぞ！」

もうわたしは、これ以上こいつと会話をするのに疲れ果ててしまった。

口から生まれてきたようなこの憎たらしい奴が、本当にわたしの初恋のキミなのだろうか？

さっき夢美と手を取り合って、嬉しさのあまり、おかしくなってし

まったんじゃないかと疑いたくなる。

でもね……。こうやって言い合いをしている間も、実は胸がドキドキしていたりする。

やっぱり遥のことが、好きなんだろうなあ。

ふと隣の席の白石さんを見ると、何か言いたげな顔をしてじっとこっちを見ているのがわかった。

今の遥との言い合いで気を悪くしたのかな？

ちょっぴり、いや、たっぷりけんか腰だったし、うるさくて迷惑だったのかもしれない。

ここはちょいと謝っておいた方がいいのかも。

「あの……。白石さん、騒々しくてごめんね。堂野はいつもあんな風に口が悪いから、ついムキになっちゃって……」

初めて同じクラスになった白石さんに、ぺこっと頭を下げた。

「ううん。別にいいんだけど……。あなた堂野くんと親しいの？昨日一緒におせんべい食べたってことは、堂野くんの家に遊びに行ったってこと？」

こ、こわい……。白石さん、怖いよう。

おもいっきり鋭い視線をわたしに向けながら、とげのある冷たい声で話しかけてくる。

「そ、それは……。堂野の家じゃなくて。おばあちゃんの……」

「おばあちゃん？」

もしかしたら、彼女は、わたしと遥の関係を何も知らないのかもしれない。

中一の時の転校生だから知らなくて当然なんだけど、遥がわたしの親戚だってことは、ごく一部の人しか話してないし、昔からの友人でも、遥の家がわたしの家の隣だってことすら知らない人もいる。

わたしたちの家は古くからの村地域にあって、クラスのほとんどが、最近開発された新しい町に住んでいるからだ。

そのお蔭で、家のことあれこれ詮索されずに今日までこれたわけだ。

でも内緒にしておく理由もないし、訊ねられれば真実を語るのがわたしのポリシーでもあるので、後ろの席にもどった遥に一応軽く目配せをして、隣の白石さんにおおまかな関係を知らせた。

「……というわけで、堂野とは親戚同士なんだ。お母さんのお使いで、堂野のおばあちゃんちに届け物をした後、入り浸ってることも多いからね」

「なあなあ、白石。こいつさあ、ついでに俺の部屋にも勝手に入ってきて、ＣＤとか持って行ってしまうんだ。柊ちゃん、早くミスチルのアルバム、返してね」

な、なんで遥がここにいるの？　今、自分の席に戻ったはずじゃあ

……。

何も白石さんの前で、ＣＤの話なんか持ち出さなくてもいいのに。

白石さんはよりいっそう怖い目をして、わたしをぎろっと睨んだのは言うまでもない。

「蔵城さんったら、堂野君を困らせちゃ、だめじゃない。まだまだ子どもね。ところで、堂野君の部屋ってどんな感じなの？　あとで教えてくれる？」

遥が再び自分の席に戻ったのを確認してから、そんなことを訊ねる白石さんの目は、もちろん、全く笑ってなどいなくて。

わたしは及び腰で、引き攣り笑いしか返せない。

白石さん。まさかとは思うけど。

あなたも遥のことが、好きなの？

わたしは、今後の身の振り方を真剣に考えなければいけないと、この時本気でそう思った。

5．青い帯

1学期も無事終了して、夏休みの宿題のワークブックと通知表を手に、家路を急ぐ。

今夜は村の夏祭りだ。大人も子どもも、旧役場の跡地広場に集まって夜店や花火を楽しむ。

新町地区の子供たちも大勢やってくるこの祭りは、今では雑誌にも載るくらい大規模な催しになって、花火大会を目指して、遠方から人々がこぞってやってくる。

昼ごはんもそこそこにシャワーをあび、おばあちゃんの家に飛んで行った。

するともうすでに希美香がそこにいて、おばあちゃんと一緒に箪笥を覗き込んで何やら騒いでいる。

「おばあちゃん、希美ちゃん。何してるの？　なんだか嫌だな……」

この季節、家の中にいろいろな虫がやってくる。

わたしは反射的に、廊下に並んでいるスリッパの位置を確かめた。

「おや、柊も来たのかい。それがねぇ……」

おばちゃんの困惑顔に緊張が走り、ごくりと唾を飲み込んだ。

「浴衣の帯が、ひとつどこかにいってしまったみたいなんだよ。さ

っきから探してるんだけどね。見つからなくてね」

「へえ？」

わたしは気の抜けた返事をして、その場にへなへなと座り込んだ。

なんだ、そういうことか。スリッパの出番がないとわかるや否や、ほっと息をつく。

おばあちゃんは、着物が入っている畳紙（たとうし）を、上に向けた手のひらの上にまっすぐたいらになるように持って、次々と畳の上に並べ広げる。

ようやく黄色い布地が見えた時、あったあったと顔をくしゃくしゃにして、取り出して見せてくれた。

それは去年の夏祭りに、わたしが締めてもらった黄色の帯だ。

「これこれ。去年は柊が使っていたけど、今年は希美香にどうかね？」

去年まで小学生だった希美香は、白地に花柄模様の浴衣に合せて、赤い帯だった。

でも今年は紺地に幾何学模様の浴衣なので、黄色の帯が映える。

わたしは去年と同じ黒地に薄紫や白い花が染めてある大人っぽい柄の浴衣だ。

今年の帯は明るめの青で、おばあちゃんが娘の頃使っていた物を大

事そうに出してくれた。

「柊も、もう十五だろ？　十五と言えば数えの十六。大人の女性に仲間入りする年だからね。この帯でも、ちっともおかしくないんだよ……」

おばあちゃんはそう言うと、一瞬はにかんだように笑みを浮かべ、優しい目をわたしに向けた。

「この帯を締めて夏祭りでおじいさんと出会ったのは、確か私が十七の時だったかしらねえ。私の帯の色と、おじいさんがいつも使っている風呂敷の色がよく似ているって言ってくれてね。それからこの帯を事あるごとに使って、袷（あわせ）になってからも締めようとしたら、母親に笑われたんだよ……ふふふ」

おばあちゃんがおじいちゃんの話をする時は、いつも少し恥ずかしそうにする。

そんなおばあちゃんの気持ちなんかまるで無関心とでも言うように、希美香が口を挟む。

「風呂敷と一緒だなんて、超ダサいよぉ！　ねえねえ、お姉ちゃん。それやめて、違う帯にしてもらったら？」

希美香は、おばあちゃんの昔話が始まると、いつも横槍を入れておもしろがる。

わたしも数年前までは一緒になって笑っていたけど、今はちっともおかしくなんかなかった。

今日の思い出話は、どういうわけか胸にググっと来てしまったのだ。

そんなおばあちゃんの想いがいっぱいつまったこの帯を締めてもらえるのは嬉しいけど、まだ大人になりきれないわたしなんかが似合うわけが無いと思い、身体中がこそばゆくて照れくさくなる。

でも、せっかくおばあちゃんが出してくれたのだ。

わたしは少し考えた後、決断した。

「希美ちゃん。わたしはこの帯がいい」

「なんで？　変だよ、そんな色」

希美香がさも不服そうに口を尖らせる。

「わたしの浴衣に、きっと合うんじゃないかな。だからわたし、この帯にする」

おばあちゃんがわたしの肩を抱き、柊、ありがとねと言って、目を細めた。

わたしと希美香は大急ぎでおばあちゃんに浴衣の着付けをしてもらうと、庭で待ち構えていた父さんに急かされるようにして希美香とポーズを取る。

恒例の写真撮影大会だ。

「さあ、二人とも早く並んで。希美香、もっと柊に寄って。そうそう……。ハイ、チーズ」
希美香の頬に自分の頬をくっつけてニッコリ笑った。
毎年アルバムに増えていく浴衣姿の写真はわたしの宝物だ。
よちよち歩きの頃からの思い出の写真。そこには当然のように遥も一緒に写っている。
「遥はどこ行った？　おばちゃん、遥は？」
父さんは、おばあちゃんのことを、いつもおばちゃんと呼んでいる。
キョロキョロしながら遥を探している父さんは、おばあちゃんの前では、いくつになっても子供みたいだ。
「そういえば今日は見ないね……。柊は遥と一緒に帰ってこなかったのかい？」
「やだ、おばあちゃん。なんでわたしが遥と一緒に帰って来なきゃならないのよ。あっ！　そういえば……。部活じゃないかな？　バスケの最後の試合が近いから、二時間だけ練習があるって言ってたような気がする」
わたしはおばあちゃんと父さんの両方に聞こえるように言った。
「そうか。じゃあ夕方、もう一度撮り直すことにしよう。それじゃあ父さんは村の寄り合いに行ってくるからな。遥を捕まえておけよ」
そう言って自転車にまたがると、祭り会場にある集会所に向って走っていった。今出て行ったばかりの父さんと入れ替わるようにして、坂を上がってくる人影が見える。遥かな？
昼下がりの夏の陽射しはきつい。
汗だくになって制服のシャツを背中にはりつけながら、遥がわたしたちの横を通り過ぎていく。
一瞬だけわたしの方をチラッと見たけど、疲れているのだろうか。何もしゃべらずにとんがり屋根の自分の家に消えていった。
わたしと希美香はしばらくの間、母屋でアイスを食べながらおしゃべりをしていたが、四時を過ぎた頃、庭の方が騒々しいのに気付

く。何かあったのだろうか。
「おーい、写真を撮るぞ。みんな集まれ！」
おばあちゃんに帯を締めなおしてもらいあわてて庭に出ると、父さんがなにやら剣幕の様子だ。
そこには綾子おばさんもいて、困ったような顔をしていた。
「おばちゃん。父さん。……どうしたの？」
わたしは二人を交互に見ながら訊ねた。
「柊ちゃん……。あのね、遥がエスケープしてるのよ」
「エスケープ？」
聞いたことのあるコトバだけど、どういう意味だっけ？　遥がどうしたっていうの？
わたしが首をかしげていると、綾子おばさんが苦笑いを浮かべながら離れの二階にある遥の部屋の窓を見上げて言った。
「あの子ね、写真も撮らないし、祭りも行かないって言ってるの。困った子でしょ？　毎年あんなに楽しみにしてたのに、いったいどうしたのかしらって、お兄さんと話していたところなのよ」
綾子おばさんは、ほとほと参ったという顔をして、どっこいしょと縁側に腰を下ろした。
「あいつ、何が気に入らないんだ？　写真はともかく、祭りまで行かないとはね。会場にいる俊介を呼び戻して、あいつを部屋から引きずり出そうか？」
父さんが声を荒げる。俊介というのは、遥のお父さんのこと。うちの父さんと二つ違いで、二人は本当の兄弟のように仲がいい。学校ではいつもと変わらないように見えた遥だけど、そう言われれば、口数が減っていたかもしれない。
「お兄ちゃんさ、この頃、我がままばかり言ってるから放っておけば？」
わたしがあれこれ想いを巡らせていると、希美香の容赦ない苦言が飛ぶ。
希美香の言うことも一理ある。でも……。

「わたし、遥のところに行ってみる」
次の瞬間わたしの身体は、浴衣を着ているのも忘れて、全速力で駆け出していた。
「ひ、柊ちゃん！　行っても無駄よ」
綾子おばさんが止めるのも聞かず、気付いた時にはすでに遥の部屋のまん前まで来ていた。

＊袷（あわせ）とは、十月一日から五月三十一日まで着る裏地のついた着物の事です。
冬物の着物に夏物の帯はちょっと合いませんね。

6．逃亡計画

ドアの前で一度大きく深呼吸をして、コンコンとノックする。
「……」
返事はない。でもいるはずなのだ。
ドアに耳をくっつけて中の様子を窺う。何も音がしない。寝てしまったのだろうか。
「遥、いるんでしょ？　ここ開けて」
出来るだけ優しく、今まで遥に聞かせたことのないような高い声で呼びかけてみた。
きっと、何か面白くないことがあったんだ。それで機嫌が悪いのだろう。
一学期の成績が思わしくなかったのかな？　いや、それはありえない。
定期テストの結果をこっそり覗き見した限りでは、成績が下がっている可能性はゼロだ。
となると、友人とのもめごとか失恋？　よし。ここは、三ヶ月だけ年上であるわたしの出番だ。
年下の手のかかる男の子の世話くらい、簡単簡単。
ドアノブに手をかけた瞬間、突然ドアが開き、中からぬっと伸びてきた手がわたしの腕を掴まえたかと思うと、そのまま部屋にひきずりこまれた。
「ちょ、ちょっと、何すんの！」
「いいから、黙って中に入って……」
そして遥の部屋の中を見て再び驚くことになる。
床には大きめのスポーツバックが広げられ、中に無造作にTシャツやズボンが放り込まれていた。
何なの？　この荷造りは。
「俺、今夜、逃亡するから……」

「と、逃亡？」
どういうこと？　遥をじっと眺めてみても、答えは見つからない。
「お、おい。そんなに怖い顔すんなよ。ちょっと、考えてることがあるだけなんだ。今夜。夜行バスで東京に行くことにした。だから、俺がバスに乗り込んでから、みんなにそのことを言って欲しいんだけど……」
「へ？　何それ。おじちゃんとおばちゃんには黙ってここを出て行くの？　意味わかんないよ。ちゃんとワケを話してから行けば？」
「そうはいかないよ。だって今日は祭りだろ。絶対に村から出してもらえないに決まってる。どうしても今夜発ちたいから、おまえに協力して欲しいんだ。帰ったら理由を全部話すから……」
いったいどうしたと言うんだろう……。東京に行くって、あまりにも急すぎる。
ここから電車で一時間ほどのところにある駅から、夜十一時ごろ発って早朝に東京に着く人気の高速バス路線がある。
それに乗るってことだよね？　東京に行ってどうするんだろ……。
「俺はこのあと、ますます気分が悪くなって、祭りに行かないことにするからな。九時ごろこっそり家を出るつもりだから、家の者を祭りの会場に留めておいてくれ。特に希美香が忘れ物をうちに取りに帰ったりしないように、しっかり見張っておけよ！」
そ、そんな……。逃亡の片棒をかつげっていうの？　このわたしが？
「わけも訊かないで、遥を逃亡させるわけにいかないよ！　いったい何があったの？　どうして東京なの？」
「今は言えない……。そんな簡単なことじゃないんだ。そうだ。じゃあ……。おまえも一緒に行く？　行けばわかるよ」
「そんなあ……。理由もわからないのに行けないよ。……わかった。あんたがそれほどまで言うのなら協力する。みんなになんて言われようとも、バスの出る十一時までは何も知らないふりしてる」
これが彼を好きになった弱みとでもいうのだろうか……。

遥のわけのわからない突然の暴挙にも、結局は同意してしまうのだから。
「ねえ、遥。ひとつだけお願いがあるんだけど」
切羽詰った状況の彼に取引なんて卑怯かもしれないけど。でも、これだけは譲れない。
「東京に着いたら、うちに電話して。どんなに朝早くてもいいから……」
「うち？　それってどっち？　おまえんち？　それとも俺の家？」
わたしの家に電話するに決まってるじゃない。
でも何でおまえのうちにかけるんだって訊かれたら何て答えればいいのだろう。
勘ぐられるのも恥ずかしいので、ここは彼に委ねるのが得策だ。
「どっちでもいいから。とにかく連絡すること！　いい？　わかったら早く寝る！　気分悪くてお祭りに行けないんでしょ？　夏バテってことにしておいてあげるから」
しぶしぶベッドに横になった遥にタオルケットを掛けてあげる。
小学生の頃、一緒にくるまったことのある、ブルーのストライプのタオルケット。
角がほつれているけれど、まだ現役バリバリのタオルケットだ。
「柊、恩に着る……。そ、その……。一緒に夏祭りに行けなくて、ごめん……」
「はあ？　別にいいよ、そんなこと。中学生になってからは、いつも別行動だったじゃない。何よ、いまさら……」
「あはは。そうだよな。でも、今日のおまえちょっとイケてるぞ。馬子にも衣装とはホントよく言ったもの……」
「ど、どの口がそんなことを言うの！　病人は黙って寝る！」
わたしは部屋に転がっていたバスケットボールを拾い上げると憎まれ口をたたく彼に投げつけた。
そして、きっと赤くなっているに違いない顔を隠すようにして、急いで遥の部屋を飛び出した。

……イケてる？　これって、浴衣姿のわたしを褒めてくれたのかな？　おばあちゃんの帯の力はやっぱりすごいよ。
それに、もし遥が東京に行かなかったら、わたしと一緒に祭り会場を回ってくれたってことだよね。
やだ。嬉しすぎて胸がどきどきするじゃない。
でも、今夜の祭りはクラスメイトもほとんどみんな来るはずだ。遥と二人で並んで歩いたりなんかしたら、すぐに噂になって、わたしの命が危なくなるのは目に見えているからね。
なんてったって遥はモテモテなんだもの。
それにしても、最後のひとことは余計だよ。わたしは馬子なんかじゃないんだからね。全く！

6．逃亡計画（後書き）

未成年の夜行バス乗車については≪9．修行≫の後書きで見解を述べていますので、そちらを参照してください。（ネタバレを含みますので、9話の後に説明しています。）

7. 鼻緒

綾子おばさんも父さんも、わたしの報告を理解してくれたのか、あれから何も言わない。

蒸し暑い体育館で部活をやったせいでバテ気味だから、今日はこのまま寝かせておいた方がいいと言ったのをそのまま信じてくれたのだ。

家族のみんなに対して、ひどく後ろめたい気持ちになる。いたたまれないことこの上ない。

もしあのことがばれてしまったらどうしようと思うと、そればかりが気になる。

夏祭りの会場を希美香と歩きながらついつい上の空になり、お姉ちゃん、どうしたのと何度も声を掛けられる始末だ。

おばあちゃんにもらった千円札を握り締めたまま、大好きな綿菓子すら食べる気になれない。

クラスメイトにも何人かすれ違った。夢美は歳の離れた妹の面倒をみているので今日は別行動だ。

希美香とあちこち歩き回りながらも、おじさんやおばさんの居所のチェックも忘れない。

今年はわたしの住んでいる村が会場担当に当たってるので、みんな総出で様々な役割を担っている。

おばあちゃんまで借り出されているので、きっと遥の計画はうまくいくと思っていた……のだが。

隣で落ち着きをなくした希美香がもぞもぞしながら何か言いたそうにわたしを見た。

「どうしたの？　希美ちゃん。気分でも悪い？」

希美香がわたしの肩に手を載せて、足を引きずる。

「ううん。足が痛いの……。下駄の鼻緒がこすれて歩きにくいよ……。それに帯も苦しいし。ねえねえ、お姉ちゃんも一緒に着替えに

帰ろうよ。別におばあちゃんがいなくても、脱ぐのはあたしたちだけでできるもん。ねえ、そうしようよ」
そういえば昼過ぎからずっと浴衣を着たまんまだったっけ。
わたしはここ数年同じのを履いているから痛みはなかったけど、希美香の下駄は今年おろしたてのものだ。なんだかとても辛そうに見える。
でも……。帰るわけにはいかない。
今はまだ八時過ぎなので、遥は逃亡のための最後の詰めにかかっている頃だと思う。
このタイミングで家に帰ったら、怪しげに荷物をまとめた遥と鉢合わせしてしまう。
何かいい方法はないのか。気持ばかり焦って、何も考え付かない。
こうなったら、まずは電話で危機を知らせるべきなのかもしれない。
電話ボックスを探してキョロキョロしている時だった。前方から神が君臨したのは……。
「うわーーっ！　希美ちゃん、かっわいいっ！」
それは普段はうるさい子スズメの軍団でしかない希美香の仲良しグループの到来だった。
彼女らは、ありがたくも希美香の浴衣姿を褒め倒し、あんばい良くわたしの元から連れ去ってくれようとしているのだった。
「ねえねえ、一緒に写真撮ろうよ」
友達が希美香の浴衣のたもとを引っ張る。
「お姉ちゃん、あたし、みんなのところに行ってもいいかな？」
希美香が遠慮がちにわたしに訊く。
「あっ、うん。いいよ。行っておいでよ」
「お姉ちゃん、一人で大丈夫？」
「もちろん。大丈夫に決まってるよ。さっき金魚すくいのところにわたしのクラスメイトがいたからそこに戻ってみる。希美ちゃんはわたしのことなんて気にしなくてもいいんだからね。それじゃあ、

遅くならないように！」
　さっきまでの足の痛みはどこへやら。
　意気揚々と仲間たちに加わり人の波に消えて行った希美香を見届けると、急に力がぬけて、へなへなと近くのベンチに座り込んだ。
　やれやれ、こんなに疲れる夏祭りは生まれて初めてだ。それもこれも、突然東京行きを宣言したあの遥のせいなんだから。
　みんなを騙してまで東京に行きたいだなんて、いったいどんな理由があるというのだろう。
　バス代もどうやって工面したのか。まるで遥の姉か母親のようにあれこれ心配しているわたしがいる。
　一難去ってまた一難。ホッとしたのもつかの間、心配の火だねが再度わたしの脳裏に点火する。
　本当にこのまま遥の作戦はうまくいくのだろうかと。

　時計を見るともうすぐ九時だ。川べりの花火大会も佳境に入る。遥の逃亡のいい隠れ蓑になってくれることを祈るばかりだ。
　わたしは立ち上がると、人の流れに逆らうようにして中学校の近くにある駅に向った。
　いくら履き慣れた下駄だといっても、速くは走れない。つまづかないように注意を払いながら小走りで駅を目指す。
　途中の三叉路で、祭り会場からの道とわたしの家に続く道が出合う形になっている。
　そこにいれば、遥に会えるはず。わたしは暗がりの中、目を凝らしながら遥の姿をさがした。
　……あれかな？　ジーンズにTシャツ姿の見慣れた人影がこっちに近づいてくる。
　スポーツバックを肩に担ぎ上げるようにして持ってリズム良く下ってくるのは、間違いなく遥だ。
　立っているわたしに気付いた遥は、少し驚いたような顔をしてそ

ばに寄ってきた。
「なんでおまえ、こんなところに居るんだよ」
「やっぱり、遥かだった」
「希美香は？　どこにいったんだ？」
遥が心配そうな目をして訊ねる。
「さっきまで一緒にいたんだけど……。今は友達のところに行ったよ。でもね一時はどうなるかと思って」
「どうしたんだ？　何かあったのか？」
「希美ちゃんがね、足が痛いから家に帰ろうって言い出して……。ホント、どうしようかと思った。でも助かった。希美ちゃんの友達と出会ったおかげで、帰らずに済んだんだ」
「そうか。……心配かけて悪かったな」
「それより、遥。あんたお金とかあるの？」
「金？　それなら心配ないよ。今年のお年玉や貯金をかき集めたから。往復の旅費くらいはなんとかなる。それに俺、中学生には見えないだろ？　この前なんか高二に間違えられたくらいだから、別に何も心配いらないさ」
高二？　それはないよ。どう見てもあんたは中学生だって……。
わたしはずっと握ったままだった皺の寄った千円札を、遥の手の中にねじこんだ。
「これでジュースでも買って。……じゃあ気をつけてね。こっちのことはわたしにまかせて。みんなにはうまく言っとくから」
遥に向かってそれだけ言うと、来た道を再び駆け上がって行く。
少し上がったところで後ろを振り返ると、まだ同じところに遥が立っているのが見えた。
両手を大きく振りあげて、きっと電話してよと叫ぶと、おおっという心地いい返事が返ってきた。
それと同時に、遥の右肩越しに今夜最後の打ち上げ花火が大輪の花を咲かせ、地の底から湧き上がるようなドーンという音をあたり一面に響かせていた。

8．うそ

十時を回った頃、家にもどると、やはりというべきか、当然というべきか……。騒動が巻き起こっていた。

わたしより少し前に戻っていた母さんのところに綾子おばさんが、遥を知らないかと尋ねに来たらしい。

寝ているはずの遥が部屋に居ないというのだ。

もちろん居ないに決まっている。わたしが遥を見送った張本人なのだから。

今ごろはもう、電車の中だ。もしかしたら駅についているかもしれない。

時計を見ると十一時までにはまだ間がある。今バレると、きっと遥は連れ戻されてしまう。

くれぐれも誰にも悟られないようにしなくてはいけない。

「ねえ、柊。はるくん、具合が悪かったの？」

夕方の騒動を知らない母さんは、当然遥も元気に祭りに参加しているものと思っていたみたいだ。

「う、うん。夏バテだった……みたい」

本日限定の遥の嘘の病状を、ためらいがちに告げた。

「いったい、どこに行っちゃったのかしらね？」

「き、きっと、体調が良くなって、お祭りに行ってるんだと……思う。さっき見かけたし……」

これは本当だ。確かに見かけた。

「そう。じゃあ綾子さんにそう伝えてきて。綾子さんこの頃体調が悪いから。これ以上心配させるとまずいわ。さあ、早く行ってきなさい」

わたしは母さんに追い出されるようにして、浴衣姿のまま遥の家に向った。

母さんに嘘をつき、そして今度は綾子おばさんにも嘘を言いに行

く。
遥のことをおばさんに知らせると、そう……とだけ言って考え込んでいる。もちろんおばさんに笑顔はなかった。
すでに何か感付いているのだろうか？　わたしはどこかすっきりしない気持ちのまま、おばあちゃんのいる母屋に向った。

希美香はとっくに浴衣を脱いで、自分の部屋に戻っていた。
わたしはまるでネジの切れかけたゼンマイ仕掛けのおもちゃのように、ゆっくりとした動作で帯を外し、のらりくらりと腰紐をほどいた。
おばあちゃんが不思議そうな面持ちでわたしに訊ねる。
「どうしたんだい、柊。帯が苦しかったのかい？　なんだか顔色が悪いね」
違うよ、おばあちゃん。帯のせいなんかじゃないんだ。わたしはふるふると首を横に振ることしかできない。
おばあちゃん、お願いだから、これ以上話しかけないで。それでないと、わたしはもっともっと嘘を重ねなくちゃならなくなる。
「柊。これでも飲んでゆっくりしていきなさい。なんなら今夜はここに泊まっていくかい？」
おばあちゃんはガラスのコップに入った良く冷えた麦茶をわたしの前に差し出す。
ありがとうと言って受け取り、少しずつ冷んやりした麦茶を口に含む。
傷や落書きがいっぱいある柱の横の壁に掛かった時計に目をやった。あと二十分で十一時だ。
おばあちゃんは着物用の横棒の長いハンガーを取り出して、わたしと希美香の着た浴衣を、しわをのばすようにしてそれにかけ、鴨居にぶらさげる。
帯も同じように小さなハンガーにかけて吊るす。

「お盆にもう一度着るだろ？　こうやっておくと汗と匂いが抜けるからね」
おばあちゃんは、本当に手際がいい。
今日もいろいろと村の頼まれごとをこなしていたのに、家に帰ってからも休む間もなくこうやって動き回っている。
浴衣はもちろんおばあちゃんのお手製だし、料理の腕前も村一番だと聞いたことがある。
何でも出来るおばあちゃんは、わたしや希美香にとって自慢のおばあちゃんだ。でも……。
もうこれ以上黙っているのは無理。遥。ゴメン。
まだ十一時になってない時計をぼんやりと見上げ、忙しそうにしているおばあちゃんに聞こえるように話しかけた。
「おばあちゃん、遥のことだけど……」
おばあちゃんは別に驚く様子もなく、まるでそうなるのがわかっていたかのようにゆっくりと振り返る。そしていつもの優しい笑顔を向けてくれた。
「遥がどうかしたのかい？　さっき綾子さんが遥がいないと言ってたけどね……。まあ、あの子は男の子だし、もう大きいんだからそんなに心配しなくても大丈夫だと思うけどね。それで。柊は何か知ってるのかい？」
「うん……。遥、行っちゃった」
「行った？　どこへ？」
おばあちゃんがその場にかがみこみ、わたしにも座るようにと、腕をゆっくりと引っ張る。
「東京……」
わたしはおばあちゃんの目と同じ高さになるように膝をついた。
「東京？」
おばあちゃんはしばし何かを考えているように天井を見上げ、しばらくすると、わかったというように大きく頷いた。
「それで、さっきから柊の様子がおかしかったんだね。で、そのこ

とを、遥に口止めでもされてるのかい？」
「そう……。わたし、心配してる綾子おばちゃんにも母さんにも嘘ついちゃった……」
さすがおばあちゃんだ。何もかもお見通しだったみたいだね。もうこれで何も隠していることはない。
きっと今から、みんなに本当のことを言いに行くんだろうな……。
「遥も何か思うところがあったんだろ？　東京か。綾子さんの実家にでも行くのかね。ねえ、柊。あの子のしたいようにさせてやろうか？」
「お、おばあちゃん！　何言ってるの？　早くおじちゃんやおばちゃんたちに言わないと、遥、本当に行っちゃうよ。十一時発の夜行バスに乗るって言ってた。今なら駅に電話すれば引き止めてもらえるかも！」
「十一時か……。あと十分だね。十一時を過ぎたら、離れに行って……。綾子さんも心配だろうから、柊の口から本当のことを話してやりなさい。いいね」
お、おばあちゃん。ホントにそれでいいの？　このまま遥の好きなようにさせてもいいんだね？　ありがとう、おばあちゃん。
まるで自分のことのように嬉しくなる。
この後綾子おばさんに本当のことを話すと、別段驚きもせずに黙って頷いてくれた。
きっとあの子、実家に行ったんだとおばあちゃんと同じことを言う。
昨日の夜、おじさんとおばさんが話をしているのを、遥に聞かれたのかもしれないとも言っていた。
詳しくは教えてもらえなかったけど、遥の将来にかかわることを二人は話していたらしい。
せっかくおばあちゃんが泊まるように言ってくれたのだけど、今

夜は自分の部屋で眠ろうと決めた。
だって、明日の朝、遥から電話がかかってくるかもしれないんだもの。
自分の部屋に戻り、押入れから布団を出していつものように寝る準備をする。
そして電話の子機を枕元に置いて朝の連絡に備える。
遥は今ごろどうしているのだろう。ちゃんと眠れているのかな。一人でさびしくないのかな……。
目をつぶっても思い浮かぶのは遥のことばかりだ。
どうか無事に東京に着きますように。わたしは祈りながら、そっと眠りについた。

9．修行

遥が東京から帰ってきたのは祭りの日から二日後の昼前だった。帰ってくるなりジャージに着替えると、部活にまだ間に合うと言って家を飛び出していった。だから彼とはまだ何も話していない。

昨日の朝、正確には早朝の六時前ごろに、わたしの枕元の電話が鳴った。

両親が起き出す前にあわてて子機の通話ボタンを押すと、前夜別れたばかりの遥の声が、妙になつかしくわたしの耳に響く。

わたしの不安をよそに、結構快適なバスの旅だったと明るく元気な声が返ってくる。

今から堂野のおじいさんの家に行くと堂々と宣言した遥は、とてもきっぱりとしていて、迷いなど少しも感じられなかった。

姿は見えないけど、男らしくて頼もしく思えた。そして今夜また、夜行バスでトンボ返りするとだけ言って電話は切れたのだ。

ところがさっきの綾子おばさんの話ではバスではなく、新幹線に乗って帰って来たと言う。

ということは……。東京のおじいさんの家に一泊したということなのだろうか。

遥の東京のおじいさんの家というのは、綾子おばさんの実家のことだ。

昔から和菓子屋さんを営んでいて、都内では結構有名な老舗だ。大手デパートにも一部出店していて、売上が徐々に伸びてきているらしい。

わたしも六年生の夏休みに、一緒に連れて行ってもらったことがある。

本店や、銀座のデパート内の店舗にも案内してもらったけど、前

日に行ったテーマパークの印象が強烈すぎて、あまり店のことは覚えていないというのが正直な感想だ。
遥のおばあさんは、とても若くて上品な感じの人だった。おじいさんは大きな身体をしているのに、静かな優しそうな目をした人だったのを覚えている。
わたしはともかく、遥も和菓子に関しては、食べることも店の経営のことも何も興味がないようで、広いお屋敷のような家の廊下を走り回ったり、土蔵の中を探検したり、大人が知ったら腰を抜かすようなとんでもないイタズラまで、思いつく限りの悪行を満喫した夏休みだった。
反面、希美香は和菓子を見るのも食べるのも大好きで、おばあさんにくっついて工場の方まで見学に行ったり、おじいさんと家でケーキを焼いたりして、遥とは興味の矛先が全く違っていた。
店舗ではカステラ類も販売しているので、店にはおいていない洋風のケーキも、おじいさんはとても器用においしく作ってくれた。

遥が東京に行ったのには、きっと何かわけがあるにちがいない。
ひょっとしたら、一昨日、綾子おばさんが言っていた遥の将来にかかわることが関連しているのではないかと思う。
難しいことはわからないが、遥がその和菓子屋の跡取りであることは、おぼろげながらにわたしにも理解できる。
まさか中学を卒業したら和菓子屋の跡取りになるために修行をしなくてはならない、なんてことはないよね？
親方にののしられ、番頭になじられ。涙を見せまいと必死に歯を食いしばって修行に耐える少年……遥。
これって、少し昔の時代が舞台の連続テレビドラマの見過ぎだってことはわかっている。
でもわたしの乏しい人生経験では、これくらいしか想像できない。だって遥に他の選択肢があるなんて、考えられないんだもの。
おじさんとおばさんはそろそろ遥を上京させて、修行させようと

密談していたにちがいない。
現実とも空想ともとれる目の前に迫る遥の試練に、暑さも忘れて思わず身震いをしてしまった。

日も暮れかかったころ、表の戸が開く音が聞こえた。
誰が来たのだろう。おばあちゃんかな？　わたしの部屋の前で誰かの足音が止まった。
「おれ……。入ってもいい？」
遥の声だ。
「……いいよ」
待ち構えていたと思われないように、少し間を空けて返事をする。
出来るだけ普段どおりの態度で接しようと、たった今まで勉強してましたと言わんばかりの顔をして、しぶしぶ遥を部屋に招き入れるフリをする。
「さっき、おまえのおばちゃんがうちに来てた……。今夜は、ばあちゃんのところで夕食だとさ……」
「ふ～ん。そうなんだ。で、何か用？」
あくまでもそっけなく訊ねる。
「ちょっとな……」
そう言って、畳の上に寝転がり、天井を見ている。いったいどう言うつもりだろう。用があるならさっさと言えばいいのに。
わたしは何を話していいのかわからず、思いついたことを口にする。
「そうそう。ねえ、遥。なんか綾子おばちゃん元気ないけど、大丈夫？」
本当はこんな話がしたいわけじゃない。東京であったことを聞きたくてたまらないのに……。
そんなことなどおくびにも出さない遥に対抗するように、わたしもノートに単語を書き続けながら、おばさんのことを訊く。
「今年の夏は暑いから、おばちゃんも大変だよね」

「うん、まあな。最近、辛そうなのは確かだな。来週、病院に行くってさ」
「そう……」
話が続かない。遥。あんた、逃亡の結果報告に来たんじゃないの？　言いたいことがあるなら早く言ってよ。
それに……。しゅ、修行はいつから始まるの？
ああ……。なんで教えてくれないんだろう。
知りたい。遥が東京のおじいさんやおばあさんに何を言われたのか、知りたくてたまらないのに。
こうなったらこっちから訊ねるしかないか……。椅子から立ち上がり、遥の方に身を翻したその時だった。
「柊……」
遥がおもむろに口火を切る。
「一昨日はごめんな。おまえに嘘つかせてしまって……」
むくっと起き上がった遥が、向かい合って座るわたしに向かって謝った。
「ああ、いいよ。そんなこと……」
いいわけないけど。遥のためなら、わたし……。もうなんでもするよ。
だって好きになってしまったんだもの。遥に頼まれれば、嫌だなんて言えるわけないじゃない。
「さっきここに来る前にばあちゃんに言われた。柊に謝って来いって」
「おばあちゃんったら、そんなこと言わなくてもいいのに……。遥こそみんなに叱られて辛いんじゃないの？」
きっと、こっぴどくやられたに違いない。
「それなんだけど。あれから誰も何も言わないんだ。俺、覚悟してこっちに帰ってきたつもりなんだけどな。昨日の朝おまえに電話した後うちにもかけたんだ。その時も俺がじいさんのところに行くって知ってる感じで、気をつけて行って来いとしか言わなかった」

「う、うそ……。信じられない。いったいどうしたんだろうね？　かえって不気味っていうか……。遥の家族は結局すべてお見通しだったってわけなのかな？　でも良かったよね。これで、心置きなく……その……。東京で、しゅ、しゅ、しゅ……」

ようやく本題に差し掛かったところで、言葉に詰まってしまう。

これを言ってしまうと、すぐにでもそれが現実になって、遥がわたしの前からいなくなってしまいそうな気がして……怖いのだ。

「しゅって何だ？　シュークリームか？」

もう冗談はやめてよ。遥ったら、人の気も知らないで。

「シュークリームなわけ……ないよ。修行よ。しゅ、ぎょ、う！」

「修行？　なんじゃそりゃ」

「なんじゃそりゃって。あんたはれっきとした堂野家の跡取り息子なんだから、この先おじいさんの和菓子屋を継ぐために修行するんでしょ？」

遥は困ったようなあきれたような顔をして、床の後方に両手を付きながら首を振る。そしてわたしの方を見た。

「ば～か。そんなわけないだろ。なんで俺が修行しなきゃいけないんだよ！　まあ将来的には全くないとも言い切れないけど。とにかく俺は、じいさんとばあさんに俺の今の気持ちをぶちまけて来たんだからな」

「今の気持ち？」

「ああ……。俺聞いてしまったんだ。祭りの前の晩に、父さんと母さんが話をしているのを。俺を東京の高校に入れて、徐々に和菓子の仕事に慣れさせていくのはどうかってね。ちょっと前にもそんな話、しててさ。俺には何も言わずに二人だけでどんどん話を進めていくもんだから……。俺、居ても立ってもいられなくなって」

東京の高校？　確かに修行ではないけれど、離れ離れになるのは同じだ。

やだ。鼻の奥がツンとして今にも涙がこみ上げそうになる。必死にこらえて、遥の話の続きに耳を傾ける。

「俺、今はまだ、店のことも和菓子のことも何もわからないし、興味もない。それに今後も親の期待に副えるかどうか自信ないし。こっちの高校に入って、大学にも進学したい……。とにかく思ってることを全部吐き出して、じいさんの返事を待ったんだ」

一瞬、遥の目がキラリと光った気がした。

「そしたらじいさん、なんて言ったと思う？　おまえの好きなようにしたらいい。店は職人もたくさんいるし、じいさんの兄弟も役員として協力してくれているからどうにでもなるって。店のことは心配せんでいいって言ってくれたんだ」

「じゃ、じゃあ、まだ東京には行かないってことだよね？　ホントに？」

まだ不安な私は、決定的な言葉が欲しくて遥に詰め寄った。

「あたりまえだろ！　俺は堂野だけど、ここ蔵城家の一員でもあるんだ。こっちのばあちゃんの気持ちも考えないといけないだろ？　おまえと二人でここを守れっていつもうるさく言われてるしな。まあ、俺には、和菓子屋を継ぐ気はさらさらないってことで。さあ、メシメシ！　メシ食いに行こう！」

遥がすくっと立ち上がる。そうだよね。まだわたしたちは将来どうしたらいいかなんて何もわからない。

今できることをひとつずつこなして行って、大人になった時、また考えればいいんだ。

それにしても安心したよ……。修行じゃなくて良かった。

親元を離れた少年が、井戸の水を汲んで、流れる汗と涙を隠すように頭からバシャバシャと水を掻ける場面は、ドラマの中だけで十分だと思った。

9．修行（後書き）

夜行バスの乗車ですが、本来未成年は保護者の同乗及び同意書が必要となります。この場面設定が十年以上前であることと、理由が夏休みの帰省（家出ではない）だということ、そして祖父の同意はあったということで遥の一人での乗車設定をご了承いただけますようお願い申し上げます。

10．こたつ

学校の宿題と塾の高校受験対策夏期講習に追われて、瞬く間に夏休みは終わり、二学期もすでに十月半ばを迎えていた。

体育大会に修学旅行。合唱コンクールに文化祭。中学校生活最後の華々しい行事が目白押しだ。

わたしは何かにつき動かされるように、どの行事にも一生懸命取り組んだ。

去年まではいやいややっていたことも、これが最後だと思うとなぜか前向きになれる。

ところが周りの皆が受験勉強にスパートをかけ始めるのも、悲しいかなこの時期ときている。

係りの分担を決めるのも一苦労になってきた。

毎日のように塾に通う子、家庭教師が家で待ち構えている子、通信教育の教材がたまってしまった子……。

みんないろいろな理由で役割を放棄しようとする。

合唱コンクールの指揮者とピアノ伴奏の正式担当がなかなか決まらないのだ。

この停滞した状況を早くどうにかしなければと思うのだが、いい解決策が思いつかない。

そうだ、こうなったらわたしがピアノ伴奏を引き受けることにしよう。練習の時にたまに弾いているので、出来ると思う。

指揮はわたしの後ろの席の藤村直輝が同じように痺れを切らせたのか、自ら名乗りを上げた。

クラスのみんなの安堵のため息と共に、延長していた学級会議がようやく終わりを告げた。

会議を進行していたのはクラス委員長の堂野遥。

もしこのまま担当が決まらなければ、ピアノ伴奏は強引にわたしに押し付けて、指揮は自分がやるしかないと、内心はひどくあせっ

ていたらしい。
委員長はそれでなくてもその後の文化祭の重要な担当を受け持っているので、超が付くほど多忙を極める。
できるだけみんなで分担して役割を担って欲しかったとその日の夜、おばあちゃんの部屋のこたつで、まだ少し青いミカンを食べながら遥がぼやいていた。

まだ十月なのに、おばあちゃんはもうこたつを出している。
黄色い水玉模様のカバーで覆われたこたつ布団が、少し冷え込む秋の夜に、罪なことにわたしを至上の楽園にこまねいてくれるのだ。
一応勉強道具を抱えてここに来るんだけど、三十分もしないうちに、温もった足元に誘われるように夢の中をさまよってしまう。
すると決まって遥がこたつの中のわたしの足に蹴りを入れて起きろと怒鳴る。
至福の時を奪われたわたしは、たちまち不機嫌になり、仕返しの蹴りを入れた瞬間、こたつ内での格闘技決戦が幕開けとなるのだ。
同じこたつで編み物をしながらわたしたちの様子を見守っているおばあちゃんに、やめなさいと一喝されてまた勉強を再開させるというのが、最近のわたしたちのおおまかな日課になっている。
中二まであれほど疎遠になっていた遥なのに、最近はこうやって一緒にいることが多くなった。
というのも遥の母親である綾子おばさんが、体調が悪いのを理由に夏に仕事を辞めて以来ずっと家にいるようになったせいだという。
おばさんがいろいろうるさくてうざいから母屋に入り浸っているというのがあいつの弁だ。
でも、おばさんが仕事を辞めた本当の理由は赤ちゃんが出来たからなのだ。
切迫流産という症状が出て、夏休みの後半からひと月入院した後、今は家で様子を見ながら療養している。

おばさんに赤ちゃんができたって聞いた時、まるで自分の妹が生まれてくるような気がして、その場で小躍りをしてしまうほど嬉しかった。

性別はまだわからないけれど、なぜかわたしはその子が女の子であると決め付けて、名前まであれこれ考えている。

楓(かえで)ちゃんとか椛(もみじ)ちゃん。桜ちゃんもいいな。わたしの本当の妹みたいに聞こえるでしょ？

ここはやはり男女の違いなのだろうか。思春期真っ只中の遥にとっては、あまり触れて欲しくない話題のようで、クラスメイトはまだ誰もそのことは知らない。

「母さんの妊娠のことをバラしてみろ、ただではおかないからな！絶対に誰にも言うな！」　というのが遥の言い分で、中三にもなって弟や妹が産まれるのはとても恥ずかしいんだそうだ。

そんなことないのにと言っても全く聞く耳を持たない。そのうちおばさんのお腹もふくらんでくるから隠し通せないのにね。

そんな風に恥ずかしがる遥をからかうのも、ちょっぴりおもしろかったりする。

かと思えば、いつの間に勉強しているのだろう。遥は驚くほど成績がいい。

小学生の頃はわたしの方が良かったのに、今は完敗だ。

一学期の通知表をおばあちゃんに頼んでこっそり見せてもらったら、五ばっかり並んでた。

英語と音楽だけ四であとはみんな五。その英語もきっと今学期は五になると思う。だって、先週の中間テストで満点だったからね。

わたしは英語が大好きなので、自信満々に臨んだテストだったのに、九十二点だった。がっかりだ。

一度でいいから遥の頭の中を覗いて、細胞をひとつ分けて欲しいものだ。

わたしの成績はあまり言いたくないけど、三、四、五、が彩りよく並んでいる。

母さんに遥の成績のことを言ったら、おばあちゃんの家で勉強するついでに、彼の必殺勉強隠し技を盗んで来いと鼻息も荒くスパイ指令を出された。
もちろんわたしもその命令は喜んで遂行するつもりだ。
ところが遥ときたら、別段変わった勉強法を隠し持ってるわけでもなく、時折教科書を見て何かブツブツ言って空中を見上げておしまい、といった感じのシンプルなやり方しか見せない。
これでは隠し技でも何でもない。きっと誰も見ていない夜中に秘策を講じているに違いないと、結論を導き出した。
にもかかわらず、彼のお気に入りのテレビ番組のビデオ予約は完璧で、おばあちゃんのビデオまで我が物顔で予約ランプを点灯させる有様だ。
いつそれを見るのか……。はたまたどこにそんな時間があるのかは、今もって謎だ。
「ねえ、遥。あんたさあ、その録画したビデオ、いつ見てんの？」
謎が知りたくて、ことの真相に迫ってみることにした。
「夜中に宿題やりながら見てる。金、土の晩に、みんなが寝静まってから、離れのリビングでＣＭぶっとばしながら見るのがいいんだよな。そうだ。今夜、おまえも見に来ないか？　今週の特番二つほどたまってるんだ。うちの父さんも母さんもノリ悪すぎなんだよな。希美香は料理番組にしか興味ないし……。　俺あの家ですんごい疎外感、味わってる。ねえ、お願い、ひいらぎさま。一緒に見ようよ、ね？」
両手をこすり合わせて拝んでくれても困るんだけど。もちろん、丁重にお断りした。
どうも遥の好きなお笑い系の特番はあまり好みじゃないのよね。
どちらかと言えば音楽番組か、ドロドロ愛憎系のラブロマンス、もしくはサスペンスドラマがいい。
などと考えていたものの、わたしはその時、自分のおかれているすごいスペシャルな状況に、突如気付いたのだ。

世間一般でいう所のあこがれの君は、わたしにとっては、今、目の前にいる堂野遥があてはまる訳だ。
彼はクラスの人気者で、女の子達のあこがれナンバースリーにも選ばれている。
彼と付き合ってみたいとか、一度でいいからデートしてみたいと、目をハートマークにさせながら噂話をしているライバル達に何度も遭遇した。
つまりわたしはそのみんなの望みをいつしか知らない間に、全部経験させてもらってるってことになる。
もちろんおばあちゃん付きだけど、こうやって毎日遥と会って、一緒に晩御飯を食べたり、勉強したりしている。
今夜もビデオ鑑賞会に誘われた。
前向きに考えると、これってすごい贅沢で幸せな状況ではないのだろうか……と思うのだ。
いつしかひとりでに笑みが浮かび、せっかくのこのチャンスに甘んじてもいいのではないかと思い直す。
「ねえねえ遥。やっぱりさっきの返事、取り消すよ。今夜、一緒にビデオを見る。その代わり、今度はわたしのお気に入りのドラマも一緒に見てよ。うちの両親ったらドラマ嫌いでさ、いつもバラエティーばっかりなんだ。ほんと、ノリ悪すぎ！　あんたの両親と入れ替わってたらよかったのにね……」
危ない危ない……。せっかくの願っても無いチャンスをもう少しでフイにするところだった。
夜中のビデオ鑑賞デートなんて普通ならそう簡単に出来るもんじゃないからね。こういう時、親戚って助かるなと思う。
全く他人の男子同級生の家に、それも夜中、娘をホイホイ行かせる親がどこにいる？
遥の家ならわたしがそのまま一生入り浸っても、誰も何も言わないだろう。ノープロブレムだ。
おばあちゃんの部屋からうちに電話をかけて、今夜はこっちに泊

まると知らせた。それなら少々夜更かししても叱られないしね。
ところがいつもなら二つ返事でオッケーなのに、今夜に限ってなんだかんだ言ってくる。
『おばあちゃんに迷惑だよ。今夜は帰っておいで』
「ええっ！　なんでだめなの？　おばあちゃんに絶対迷惑かけないから……。それに遥と夜中にビデオを見る約束したのに。母さん、お願い！」
『それがダメだっていうの！　あんたもそろそろ遠慮というものを学ばなきゃダメよ。それにいつまでも二人とも子供じゃないんだから……。ケジメは大事だからね。今夜は帰っておいで！』
わたしは、思ってもみない母さんの返答に言葉を失った。恨めしそうに遥に目を向ける。
ピンチを汲み取った遥は、わたしから受話器を奪い、いまだかつて聞いたこともないようなバカ丁寧な敬語を使って、うちの母親と話し始めた。
「すみません。俺が強引にひいらぎを誘ったんです。合唱コンクールや文化祭の打ち合わせもしたいんで、ビデオを見ながら話を進めていこうと思って……。心配しないで下さい。……離れのリビングです。両親もいるので大丈夫です……」
わたしは横でこっそりと、お腹を抱えて笑っていた。遥の不自然なそのしゃべり方……。きっと母さんは仰天して言葉も出ないんじゃないのかな。
今まで電話でうちの母さんと話しても、ああとかうんしか言わなかった遥が、よそ行きの言葉を使っているんだよ。
それに打ち合わせって、何？　そんな話、ちっとも聞いていない。
さすが委員長だね。お笑い番組を見るだけなのに、大人を納得させるツボを知ってるこいつは、ほんとにただ者じゃない。
「……というわけで、おばちゃん、いいって言ってくれたぜ。おまえ、言い方へたくそだもんな。ふっふっふっふ……。今夜は楽しみだなあ。俺のお笑いの原点を、よーくおまえに伝授するからな。絶

対に途中で寝るなよ！」
はいはい、あんたにはかないませんとも。おばあちゃんがお風呂に行ってる間で助かったよ。
だってこんな嘘つき遥の実態を知ったら、おばあちゃんの寿命が、五年は縮まるに違いないからね。

11．テレビごっこ

お馴染みのプロダクションに所属している人気お笑いタレントがこぞって出演しているこの番組は、一般視聴者の投稿はがきを再現して笑いを誘う構成の、二時間特別番組だった。

お笑いタレントの中にも、何を言っても全くウケない若手から、そこにいるだけでおもしろい味をかもし出すベテランまで、様々なタイプの人がいる。

聞きなれたギャグが飛び出すと連鎖反応のように笑ってしまうが、こうやってじっくり見てみると、結構おもしろいことに気付く。

わたしとしたことが、もうすでに遥に感化されてしまったようだ。でも遥は、わたしとは別のところで、笑ったり感心したりしているそぶりを見せる。

あっ、この人のコントは、次でお決まりのギャグとポーズがあるはず。そう思っていても遥はそこでは笑わずに腕を組んで思案顔になっている。

いったいどこ見ているのだろう……。わたしはそれとなく遥の目線をチェックしてみた。

ギャグとギャグの合間や、司会進行のベテランタレントの動き、カメラワークが引いて全体が映った時などを真剣に見ている。

ひな壇上の座席から突っ込みを入れるお笑いタレントの見事な間合いにもひどく共感している。

何、それ……。お笑いそのものは、あまり見てないじゃない。

わたしは在籍している文芸読書部で、放送劇用の脚本を書いたことがある。

その時にいろいろ調べて、テレビやラジオ番組の成り立ちを学んだ。

どんな番組にも脚本を手がける人がいて、それを表現するために集団をまとめて形にしていく監督や演出家、プロデューサーがいる。
もしかしたら遥は制作方面に興味があるってこと？　わたしは食い入るように画面を見つめる遥に疑問をぶつけた。
「遥ってもしかして……。番組作りに興味あるの？」
突然の質問に何故か驚いたようにわたしを見て、そして固まった。
「……」
やっぱり……。図星だったみたいだ。
「ふ～ん。そうなんだ。だって、あんたの笑うところ、わたしと全然違うんだもん。だから、放送作家とかプロデューサーになりたいんじゃないのかなって思って」
「はん。放送作家はおまえだろ？　去年の文化祭の放送部との合同発表、あれはよかったもんな。俺はどっちかといえば……。そうだな、プロデューサーかな。以前からテレビ局の仕事に興味はあるよ。うまいもんの食べ歩きの番組作って、じいさんの和菓子を紹介するのもいいかもな？」
冗談とも本気とも取れるようなことを言う。
「それって、職権乱用っていうんでしょ？　第一、あんたは和菓子に興味ないんじゃなかったっけ？」
「だからおまえがうまいこと脚本作って、希美香にレポートさせればいいだろ？　あっ……。もちろん、モテモテ、イケメンの俺様だけど、間違っても俳優・タレント志望ではないですから、ご安心を」
誰もそんなこと言ってないですから……。
一歩間違えたら、今の遥の言い方は、世の中の全部の人を敵に回しかねない。
けれども、ぎりぎりコードで迫ってくる遥のその鼻持ちならないセリフですら、恋愛重症患者のわたしは完全に否定することができないのだ。
だってこのごろ本当に彼がカッコよく素敵に見えちゃうんだもの……。

ふと気付けば見とれてるなんてことはしょっちゅうだ。くれぐれも遥にバレないように気をつけないとね。
「あっ、そうだ。実はさあ、俺、ホームビデオでちょっとだけドキュメンタリー風の映像、作ったことがあるんだ。持ってくるから見てくれる？」
そういえば親戚の集まりの時や希美香と遊んでいる時に、遥にカメラを向けられていることがあったような気がする。
遥は立ち上がり、ビデオを取りに母屋に向かった。
リビングにある裏戸を開けて部屋を出て行くその姿を見てると、どこかいつもと違うような気がする。
でもどこがどう違うのかわからない。勘違いだろうか。
わたしったら本当に重症な恋の病に罹ってしまったのかな？　どんなに小さな行動であっても、遥から目が離せないのだ。
でも裏戸を開けて外に出る時、遥が少しかがんだように見えたのは気のせいなんかじゃない。
そこは少し天井が低くなっているので、表玄関のドアよりも、戸口が小さくて狭い。
けれども俊介おじさん以外はみんな楽々通れるはずなのだ。なんで遥が腰を曲げる必要があるんだろう……。
わたしは１６５センチだけど、余裕で通れる。
遥はわたしより高くて２センチほどの違いだったはずだから、どう考えても彼の行動は不可解だ。

わたしは首をかしげながら遥が戻ってくるのを待っていた。そして、お待たせと言って入ってくる彼を見て目を疑った。
頭の上が……。ギリギリっぽい。戸枠の上部に頭をこすったように見えた。
「ちょっと、遥！　あんたさあ、背が伸びたんじゃない？」
「急に何言い出すんだよ、うるせえやつだな……。いつと比べて伸

びたって言えばいいんだ？」
「いつって……。この前。そう四月の測定のあと、１６７センチって言ってなかった？」
「随分前の話だなあ。夏休み前に１７０越して、今は多分１７５くらいだと思うけど……」
「ええっ？」
わたしとしたことが、今の今まで遥の背がそんなに伸びていることに全く気がつかなかったのだ。
「もしかしておまえ、俺の身長、まだ１６７だと思ってたのか？ がっははははっ！ 先生にもみんなにも、すれ違うたびに伸びたなって言われてるの、知らないってか？ ほんっと、おまえってやつは……。どこ見て暮らしてるんだよ。俺って、かわいそう。おまえ鈍すぎ……」
遥がさも残念そうに、大げさに首を振る。
「ちょっとちょっと、こっちに来て」
わたしは廊下にある姿見のところまで遥をひっぱってきた。横に並んで鏡をみると、あきらかに１０センチ以上の差がある。
「ほんとだあ……。遥、大きくなったねえ」
鏡の中の遥をしみじみ眺めて、わたしは大胆にも遥の腕に自分の腕を絡めてカップルのように腕を組んでみた。
「うわあーっ。釣り合ってる。ねえねえ、似合うよね？ わたしたちって、結構絵になると思わない？」
目の前にいる二人は誰がどう見てもきっとお似合いの二人。
今だけのかりそめの姿であったとしても、こうやって並んでいるのが死ぬほど嬉しくて、絡めた腕に力を入れてしまう。
ひとりでにやけてしまうのを止められなくて、隣にいる本物の遥を見上げたその瞬間、彼の左手が、パコンとわたしの頭を直撃した。
「調子こいてるんじゃねえっ！」 と言いながら。
イタタタ……とわたしが頭をさすっている間に、遥が腕をスルリ

と振りほどくと、あっという間にそこから逃げるようにしてさっきと同じようにテレビの前に座る。
「柊っ！　俺はまだまだデカくなる予定だからな。そうだ！　１８０越したら腕組んで町中をおまえと一緒に歩いてやる。みんながうらやましがるぞ！」
う、うそ……。ホントにそんな日が来るのかな？　胸の辺りがキュッと締め付けられるような気持ちになる。
でも、嬉しがってるなんて思われたくない。
あくまでも遥は、わたしの本当の気持なんて知らないんだから。冗談で言ってるだけなんだもの。
「何、その高慢な態度。いっとくけど、あんたがみんなからうらやましがられるんだからね。高嶺の花の、このひいらぎちゃんが、背が高くなったご褒美に遥とデートしてあげるんだから！」
さりげなくデートという言葉を会話に織り交ぜながら、わざとえらそうに答えてみた。
その瞬間、遥の眉がピクッと上がったのを見逃さなかった。
そりゃあわたしは高嶺の花でもなんでもありませんから。あたしと歩いたって、誰もうらやましがったりしないよね……。
でもこうやってののしり合っていると、自然に本音が言えたりする。
あいつは冗談だと思ってるかもしれないけど、わたしは結構本気なのだ。
でもね、もしみんなみたいに、マジで遥に告白とかしたらどうなると思う？
うまくいく可能性はゼロだし、その後も延々と親戚付き合いを続けなくちゃいけないから気まずいことこの上ない。
親戚なんかじゃなくて、もう少し離れたところに住んでいるただのクラスメイトだったら、告白してたのかな……。
でも、やっぱ、恥ずかしい。そんなこと、できるわけない。
ついさっきまで親戚のメリットで浮かれてたけど、今はそれがネ

ックになって落ち込んでいる。
結局どっちみち、遥には振り回されるって運命なんだね。
「おい、そんなとこに立ってないで。早くこっちに来て俺様の力作を見るっ！」
遥が自分の横のフローリングの床をポンポンと叩きながら座れと言う。
わたしは言われたとおりに彼の隣に膝を抱えて座った。
遥の自慢の自作ビデオは、お世辞にも見やすい画像とはいえなかったけど、やたらわたしが登場してたのには何か意味があるんですか？
撮るなら前もって言ってくれればいいのに。
髪とかもきちんとセットして、お気に入りのスカートはいて。ポーズくらい、取ったのにな。
それにあんなに大口開けて、お寿司を食べたりもしないよ。
わたしってもう少しかわいいと思うんだけど、どれもこれも変な顔ばっか。嫌な感じ。
こんなんでテレビの仕事をしたって、視聴率はボロボロに決まってるよ。辞めるなら今のうちだ。
わたしは遥におもいっきり文句を言ってやった。
「あ……。そんなこと別にいいんだ。人の動きや背景のはまり具合をチェックしてる段階だからね。……おまえの顔とかはどうだっていいから」
ひどい、いくらなんでもひどすぎる。
もう二度とこいつのカメラの前に立つものか！
わたしは決意も新たに、いまいましいこいつの顔を睨み返してやった。

１１．テレビごっこ（後書き）

当時はＤＶＤもありましたが、まだビデオが中心の時代です。

１２．大河内大輔

円と三角形が、とてもチョークで描いたとは思えないほど几帳面に黒板に描かれている。

三角形の頂点が円の中を動くって……。何度やっても苦手な単元だ。

二十代の若くて元気いっぱいの女性数学教師、梅谷彩加（うめたにさやか）先生は、わたし達のクラス担任でもある。

何が嬉しくて数学の教師になんかなったのだろうなどと、授業そっちのけで梅谷先生への疑問を思いをめぐらせていると、後ろからペンのような物でツンツンと背中を突かれた。

梅谷先生が黒板に向った隙に後ろを振り返ると、藤村がノートの一部を黙ったまま指し示す。

今日のほーかご空いてる？　指揮の練習に付き合って欲しいんだけど。

と、やや斜めを向いた濃くて太い字を大胆にも披露してくれる。

これぞまさしく、男子の文字という感じだ。

わたしはすかさず、声に出さず口の形だけでオッケーと言うとあわてて前に向き直った。

幸い、先生はまだ黒板を見ながら説明を続けている。後ろを向いたことはバレなかったみたいだ。

今日は月曜日。わたしの入っている文芸読書部は休みの日だ。

藤村の所属していたバスケ部も、三年生はもうすでに引退しているので、指揮の練習に差し支えはない。

後ろの席の藤村とは近いうちに、合唱コンクールのピアノ伴奏と指揮を合せる練習をしようと思っていた。

でも、放課後はそれぞれの委員の仕事で忙しく、合唱コンクール

を目前に、なかなか時間の都合がつかなかったのだ。

さて、どこで練習しようかな？

音楽室は吹奏楽部や合唱部の練習で使えない。

体育館のグランドピアノは、バスケと卓球部がいるから、これまた無理そうだ。

いろいろ思案した挙句、ノートの切れ端に、うちに来てと書いて小さく折りたたむと、前を向いたままそっと後ろに手をのばして、藤村の机の上にそれをのせた。

藤村は遥の一番の親友で、小学校の時からよく知っている間柄だ。

彼に音楽のセンスがあるかどうかは未知数だけど、持ち前の体育会系のノリでクラスをまとめてその気にさせるのは、お得意の分野だろう。

ただわたしは、藤村にひとつだけ弱みをにぎられている。

もちろんわたしも藤村の弱みをにぎっているのでおあいこなんだけどね。

修学旅行に行く少し前のことだけど、一時間だけ自習になった日があった。

立ち歩くのは禁止なので、近くの席の人と小声で話すくらいしか自由にならない。

その時わたしは後ろを向いて、藤村と修学旅行の班のメンバーについて情報交換をしていた。

女子四人男子四人がひと組の、八人グループになるのだけど、藤村と遥以外の二人の男子は初めて同じクラスになったメンバーだったから少し不安もあった。

藤村の話だと、どの人もいい人そうだったので一安心したところ

に、彼から唐突な質問が舞い込んだのだ。
「なあなあ、おまえ。堂野と付き合ってるんだろ？　いいなあ、好きな奴と一緒の班で……」
と、急に声のトーンを抑えてぼそぼそとそんなことをのたまうのだ。
「ええっ？　何言ってるんだか……。そんなことあるわけないでしょ。藤村こそ、中野由美に気があるんじゃないの？　一緒の班で良かったじゃん」
わたしも負けずに小さな声で言い返す。
中野由美はうちのクラスの副委員長で、美人でとっても優しい女の子。
休み時間に藤村と楽しそうにおしゃべりしているのを目撃した時、ピンときたのだ。
「ナカノ？　別にあいつのことはなんとも思ってないけど……。っておまえ、堂野のこと好きなんだろ？　だってこの前、あいつの家に泊まってただろ？」
ちょ、ちょっと。藤村ったら声が大きいよ。泊まったとか言わないで。誤解されるじゃない。
「あ、あれはたまたま遥と一緒にビデオ見てて、気がついたら朝になってたってだけだよ。だーかーらー。遥は親戚だって、いつも言ってるでしょ！　特別な相手じゃないって……」
興奮のあまり、ついついわたしまで大声で叫びそうになるのを必死で抑える。

実はあの日、明け方までビデオを見てたんだよね。
気がついたらそのまま毛布だけ被って、遥んちのリビングで二人並んで、ゴロ寝してたんだった。
毛布は綾子おばさんが掛けてくれたんだと思う。多分……。
目が覚めたら隣のキッチンからハムの焼けるいい匂いがして、玄

関のチャイムが鳴って……。
遥の脇腹辺りに頭を押し込むような形で寝ていたわたしは、音のするほうに、よっこらしょっと身を起こした。
続いて、遥がおばさんにたたき起こされると、借りていた本を返しに来たという藤村が、リビングの中を覗きながら戸口に立っていたのだ。
ぼーっとした起きぬけの顔で、テレビの前にのっそりと起き上がっているわたしたちを見て、藤村がニタニタしていたのを鮮明に思い出す。
いくら遥と仲がいいからって、どうして藤村をリビングに通してしまったのと、おばさんを恨むのもお門違いだとわかっている。
わかっているけど……。
要は、わたしがちゃんと、おばあちゃんの部屋に戻らなかったのが悪いのだ。
でも。だからと言って、なんで藤村にわたしの好きな人を教えないといけないのだろうか？
そんな義務も必要性も全くないのだから、ここはわざと曖昧な答えを出して、うやむやにしておこうと思ったのもつかの間、藤村が先に爆弾宣言を始めてしまった。
「じゃあ俺の好きな奴、先に教えるからな。そ、その……。よ、四組の……。おまえも良く知ってる六年のとき同じクラスだった……。夢美……なんだ」
わたしは驚きで声もでないまま、藤村を穴が開くほど見つめてしまった。
「蔵城〜。夢美の奴、誰か好きな人とかいるのかな？　俺のこと、どう思ってるんだろ」
そういうことだったのか。わたしが夢美と仲がいいのを知っている藤村は、夢美との仲を取り持って欲しいのだ。
でもそれは無理な相談。夢美は藤村の親友である遥が好きなのだから。

ってなわけで、藤村くん。あんた、脈なんてこれっぽっちもないですから。残念でした。

返事に困って黙り込んでいるわたしに、藤村は追い討ちをかける。

「ところで、蔵城は誰が好きなの？　俺も教えたんだからおまえも教えろよ。堂野でないとなると……俺か？」

なんでそうなる。遥といい、藤村といい。ちょっと自分がモテるからって、そんな風に決め付けないの！

「残念でした。ハズレ。……誰にも言わない？　ホントに？」

藤村の好きな人を知ってしまった以上、わたしも誰かの名を挙げないとそれは不公平というもの。

わたしはあれこれ考えた挙句、隣のクラスのスポーツ万能、そして甘いマスクの人気者、大河内大輔を思い浮かべると、彼の名をそっと告げた。

彼だったら、罪はないだろう。去年同じクラスだったけど、あまりにも人気者すぎて、少々名が挙がったところで誰も本気にしないし、カモフラージュには最適だと思ったから。

それに、大河内はとてもいい奴なんだ。

朝の読書タイムで読む本の交換をしたり、恋愛物のハリウッド映画の話をしたり……。

意外にも趣味が似ていたので、そこそこ仲の良かった相手だったから、全くの嘘でもない。

まさか、わたしの好きな人はやっぱり遥なんだよなんて、今さら恥ずかしくて口が裂けても言えないしね。

それからというもの、わたしと藤村は、秘密を共有している者同士ならではの、奇妙な連帯感を持ちつつ、お互いを監視し合うという間柄になっていたのだった。

13．栗ごはん

今日は藤村も加わって賑やかに帰路につく。夢美と一緒なのが嬉しいのか、藤村が始終ニコニコ笑顔で、わたしたちの後を少し離れてついてくる。

住宅街を真ん中くらいまで行ったところで夢美とはお別れだ。

いつもなら、ここの桜の木の下で三十分くらい立ち話をして別れるのだけれど、今日は藤村と合唱コンクールの練習をする予定になっているのでそうもいかない。

かといって藤村と二人っきりでうちに帰るのもなんとなく気が引けて、夢美にも一緒に来るように誘ってみた。

ところが、今日はお母さんが出かけていて留守なので、家で妹の面倒を見ないといけないらしい。

妹も連れてくればいいよと言ってみたが、やっぱりやめとく、ゴメンねと言って、そのまま駆け出して帰ってしまったのだ。

夢美がいなくなると急に会話もなくなり、無言のまま藤村がわたしの後ろをとぼとぼとついて来る。

藤村も、夢美があまりにもあっさりと帰ってしまったのがショックだったのか、顔色も冴えないし覇気もない。

わたしが何かしたわけでもないのに、藤村に対して、申し訳ない気持になる。

でも藤村とは、小学生の頃からの付き合いだ。そのうち、いつものペースを取り戻して、普通に話せるようになるだろうと思い、無理に話しかけるのはやめた。

家に着くと、ちょうど母さんが玄関を出てどこかに行こうとしているところだった。

「あら、柊。今日は早かったのね。今からおばあちゃんちに行くから、何かあったら隣に電話してきてね。……あらまあ、直輝君じゃ

ない？　久しぶりね。ゆっくりしていってね。うふふふ……」
母さんは意味ありげに笑うと、食材をいっぱい押し込んだスーパーの袋を提げて、おばあちゃんちに向って走って行ってしまった。
すると突然立ち止まったかと思うと、くるりとわたしたちの方に向きを変えて叫ぶ。
「台所のテーブルの上に栗ご飯があるから食べていいわよーーっ！」
そこまで大声で怒鳴らなくたって、ちゃんと聞こえてますから。
わかったから、どうぞ、さっさと行ってください……。
わたしがこくこくと二度頷いたのを見て、母さんは再び駆け出していった。

この時期、うちの裏山で採れる栗は絶品で、こうやって毎日のように栗ご飯や渋皮煮になって食卓に上る。
裏山には、栗や柿、ミカンにイチジクなどの木がいっぱいあって、木の実から季節の果物までなんでも採れるのだ。
昔は果樹の生産もやっていたそうだけど、今は人手不足もあって家で食べる分くらいしか作っていない。
この裏山から一キロほど離れた隣街の境界線のあたりまでが蔵城家の山と土地だと聞かされている。
あまりピンと来ないけど、将来は遥と仲良く管理するようにと、ことあるごとにおばあちゃんから言われているのだ。
一応、登記簿上では、遥の家の土地とはきちんと線引きがされてるらしいけれど。
どっちかが宅地になると、一方も山のままでは放っておけなくなるので、両方とも今のまま維持するためには、業者や行政の口車に乗らないようにと、きつく言われている。
つまり、土地長者になるのではなく、先祖代々の土地を守りながら、慎ましく生きていくのがおばあちゃんのポリシーということなのだ。

わたしも少々家が古くても、雨露がしのげればそれでいいと思っているし、別段今の生活に不満があるわけでもない。
父さんの給料で、細々と暮らしていければそれでいいと思う。
遥の家も離れこそ現代風の建物だけど、暮らしぶりはうちと一緒で地味だ。
綾子おばさんはお嬢様育ちなのに、至って質素で堅実な人なのだ。

藤村をピアノのある居間に案内すると、わたしは制服のまま台所に入り、栗ご飯を大き目の器に盛ってごま塩の入った小瓶とぬるめの麦茶をお盆に載せて、居間に運んだ。
「ねえねえ、練習の前に腹ごしらえしようよ。藤村も栗ご飯好きだよね？　いっぱい食べて」
「サンキュー。堂野んちでもよく食べさせてもらったからなあ。いただきま～す」
藤村は畳の上にあぐらをかいて座り、両手を合わすと、箸を大きく動かして、口の中にごはんをかき込む。
「……う、うめぇ。めっちゃ、栗が入ってるぞ。なあ、蔵城。これ、堂野のおばあちゃんの作る栗ご飯と一緒の味がする」
藤村は見事な食べっぷりでどんどん平らげていき、あっという間に器はからになった。
「うちの味はすべておばあちゃん直伝だからね。お米もうちで作ったものだし、栗もうちの裏山の栗。遥んちも同じ材料で作るから同じ味なの。それに、おばあちゃんは、本当は遥のおばあちゃんなんだけど、うちの父さん、おばあちゃんに育てられたから、本当のお母さんだと思ってるっていつも言ってるよ」
「へぇー。じゃあ、おまえの本当のおばあちゃんは早くに亡くなったのか？」
「うん。父さんが子どもの頃に病気でね……。だからわたしも、隣の遥のおばあちゃんしか知らないんだ……。母さんのおばあちゃん

もわたしが生まれてすぐに死んじゃったからね。さあ、そろそろ練習しよっか？」
藤村はわたしと遥の家の関係を知っている数少ない友人の一人だ。
そのせいか、うちの内情もつい気安く話してしまうのだ。

お腹が満足する頃にはすっかりいつものように打ち解けて、学校に居る時と同じように藤村と話すことが出来た。
ピアノのふたをあけて楽譜を立て、合唱コンクールの課題曲を前奏から弾いてみる。
近所に他人の家がないので、音漏れを心配する必要も無い。
グランドピアノの弦の上の蓋も、おもいっきり開けっ放しだ。
「すっげぇーー！　ピアノの弦って、こんな風になってたんだ」
中を覗き込みながら藤村が感嘆の声を上げる。
学校のピアノは普段は黒いカバーがかかったままだから、あまり中まで見えることはない。
藤村にとってはそんなあたりまえのピアノの仕組みも、新たな発見だったみたいだ。
そういえば昔、遥が弦の上にブロックを乗せたりして、おばちゃんに怒られてたっけ。

「なんでおまえんち、こんな大きなピアノがあるの？　おまえピアニストにでもなるのかあ？」
グランドピアノに釘付けになった藤村が、不思議そうに訊ねる。
「ピアニスト？　ありえないって！　そんなの無理無理！　それにこれ、わたしのピアノじゃないから……。遥のピアノだよ」
「はあ？　どういうことだよ。　あいつピアノなんか弾くのか？　マジでえ？」
まるで天と地がひっくり返ったかのような彼の驚きぶりに、ちょ

っとだけ遥が不憫になる。
ピアノを弾ける男子は希少価値があるし、好感度アップでかっこいいとは思うんだけど、残念ながら遥は弾けない。
小さい頃に、キラキラ星をでたらめな指使いで弾いているのは見たことがあるけど、左手の伴奏をつけると右手と同じようにしか動かなくて、逆ギレしていたのを思い出した。
「ぜんぜんっ！　遥はピアノは嫌いなんだ。全く弾けないよ。キラキラ星だって、めちゃくちゃだもん」
「じゃあ、なんで？」
「あのね、東京にいる遥のおじいちゃんとおばあちゃんが、小学校入学のお祝いにって贈ってくれたらしいんだけど。あの家じゃあ、誰も弾かないのよね。で、中学に上がる時、わたしが借りることになったの」
東京のおじいさん、おばあさんとは、遥のお母さんの綾子おばさんの両親のことだ。
おばさんは東京の老舗の一人娘なので、新幹線で二時間以上もかかるこの町へ嫁ぐのは、すごく反対されたらしい。
俊介おじさんと結婚するのはどうにか許してもらったけど、名前だけは堂野姓を継いでくれと条件を出されて、おじさんは養子になったという経緯がある。
うちと違って、おばさんの実家は超のつくお金持ちらしくて、ある日突然ピアノが届いた日には、おじさんもおばあちゃんも、そしてうちの両親も、目玉が飛び出るくらいビックリしたと言っていた。
それでしばらくの間、おばあちゃんのいる母屋の奥の和室に、でーんと置きっぱなしになっていたのだ。
綾子おばさんも少しはピアノが弾けるらしいけど、こんな大きなピアノがあっても宝の持ち腐れだからと、小さい頃から習ってたわたしに、ラッキーにも白羽の矢が当たったというわけだ。
東京のおじいさんとおばあさんには、嫌がる遥をどうにかピアノの前に座らせて、写真を撮った物を送ってことなきを得ているらし

い。

遥が小一の時、油性の黒マジックペンで、鍵盤をすべてブラックに統一しようとしたことは、東京のおじいさんたちは、知る由もない。

１４．マエストロの宣言

合唱コンクールの課題曲は最初の四小節が前奏になっている。八分音符と十六分音符が連なった軽快なリズムが小気味よく音を刻む。

指揮者は四小節目の四拍目で、歌い出すタイミングを生徒に知らせなければならない。

混声四部合唱の歌い出しをそろえて、ハーモニーを一気に押し出すのが、この曲の聞かせどころになっているのだ。

前奏の四拍目のタイミングを計って指揮棒を振るのが、藤村には難しいらしい。

さっきから、指揮棒代わりの菜ばしが無秩序に空を舞うばかりだ。何度も何度も繰り返しやってみるが、どうしてもうまくいかない。わたしが音を口ずさみながら彼と一緒に手を振るとうまくいくのに、やめてピアノを弾いたとたん合わないのだ。

「ぐあああっ！　出来ねえよ。これ、俺にはムリかも……」

藤村はパニック状態になって頭をかきむしった。そして天井を仰ぎ見て、俺には出来ねえ、絶対に無理だと叫ぶ。

今更無理と言われても、それはこちらの言いたいセリフ。藤村が指揮を辞めること自体が無理なんだと。

結局、あれこれ考えあぐねた結果、奥の手を使うことにした。

「ちょっと待ってて……。強力な助っ人、呼んで来るね」

遥に電話をかけて、すぐに来てと頼んだのだ。彼は去年の合唱コンクールで指揮者の経験がある。

おまけに彼のクラスは優勝まで掻っさらったほどの名演奏だったのだ。

ここは彼に助けてもらうしかないだろう。中学校生活最後の合唱コンクールを悔いのないものにするためにも……。

遥が登場すると、信じられないくらいスムーズに練習が進んだ。
さっきまで、自信喪失、無気力状態だった藤村が、まるで別人のように、凛々しく軽快に指揮棒を振れるようになったのだ。
調子付いてきた男子二人が、客席の聴衆や、審査をする先生にもっとアピールするためにはどうしたらいいかなどと、あれこれ意見を出し合っている。
そんな二人を尻目に、わたしはジュースとお菓子を取りに台所に向った。
さっき栗ご飯を食べたテーブルにそれらを並べ終えると、急に眠気が襲って来て、頬杖をついてクッキーをつまみながら、うとうとと居眠りしてしまった。
口の中に広がる甘い香りが、いっそうリラックス効果を生んだのだろう。
次第に二人の話し声も遠のいてゆき……。わたしはふわふわとお花畑を彷徨い始めていた。
「……だよな？　な？　っておい！　ひいらぎっ！　おまえ聞いているのか？」
頬を支えていた腕がガクンとはずれて、はっと意識が戻ってくる。
えっ？　ここ、どこだっけ？　なんで遥が怒ってるのだろう。
「ひ、ひえっ。な、何？」
「このやろう、起きろっ！」
遥の罵声がわたしに突き刺さる。
「ごめん……。わたし、どうしたんだろ？」
夢の世界から現実に連れ戻されたわたしは、目の前の二人男の子から、冷たい視線を投げつけられている最中だった。
「……ったく、のん気に寝てるんじゃねえよ。人が訊いてるのによ」
「つ、つい、うっかりと……」
「おまえ、なんでいつもそんなに眠いんだよ。いいか。今度こそちゃんと聞けよ」
「わ、わかりました。ごめん、遥……」

両手を合せて拝むようにして謝りながら、上目遣いで遥を見上げる。
「あのさあ……。俺、前から気になってたんだけど。おまえと藤村、最近なんかコソコソしてないか？　俺、のけ者にされてる気分なんだけどなあ？」
遥ったら突然何を言い出すのかと思ったら、そんなことなんだ。ならば答えは簡単だ。
「別に、何もコソコソなんてしてませんよ。今日だって藤村がうちに来るよって、昼休みに遥に教えたじゃない」
藤村もコクコクと頷いて、なんで？　というように不思議そうに遥を見ている。
「そんなんじゃなくて、なんかこう……。内緒話をしているような、なんというか……。ま、まさか。おまえたち、実は付き合ってる……とか？」
なんでそうなるのよ。藤村は、仮にも遥の親友でしょ？　なのにこっそりわたしと付き合ってるなんてこと、ありえないし。
「堂野、いくらなんでもそれは話が飛躍しすぎだろうが。おまえ、俺の好きな奴が誰かって知ってるだろ？　俺にだって好みってものがあるし、おまえの蔵城取ってどうするの？」
そうそう！　藤村ナイス！　……って今、なんて言った？　ええ、ええ。そうでしょうとも。藤村君、わたしがあんたの好みじゃなくて悪かったわねえ。じゃなくて……。
おまえの蔵城って言わなかったっけ？　それってわたしのことだよね。
わたしは遥のモノになってるのですか？　い、いつの間に？
わたしがキョトンとしていると、バツの悪そうな顔をした遥が、余計なこと言うなと藤村の頭をポカッと殴っていた。
頭を掻きながら、スマンと謝る藤村は、心もちニヤニヤしたままだ。
「堂野、わかったよ。そんなに、怒るなよ。俺はただ、その……。

夢美のことを、蔵城にいろいろ教えてもらってただけだから。何も隠しちゃいないってば。そうだ！　俺さあ……。文化祭が終わったら、彼女に告白するつもりなんだ。二人とも協力よろしく！」
突如、頬を紅潮させた藤村がとんでもないことを宣言したのだ。
こ、こ、告白？　遥が顔を引きつらせて、黙り込んでしまった。
藤村くん、あんた衝撃的すぎますから……。そんな大事なこと、こんなところで堂々と言っちゃっていいのですか？
「早くしないと、誰かに取られてしまうからな。だって彼女、かわいいだろ？」
ますます顔を赤くした藤村が、ガラにもなく照れてモジモジしながらそう言った。
確かに、夢美はかわいい。わたしと違ってかなりかわいい。
だからって遥まで一緒になって深く頷いててていいの？　ボヤボヤしてたら藤村に先を越されちゃうよ。
遥。あんたも夢美が好きなんでしょ？　だったらはっきりと言わないとだめだよ！
わたしはまだ、遥に本心を確かめられないでいる。
もし遥が夢美を好きだとしたら……。
わたしは遥も夢美も。大事な人を二人とも同時に失くしてしまうことにもなりかねない。
「それに蔵城の様子だと、夢美の奴、別に好きな人が居るみたいな気もするし……。彼女が行動起こす前に、俺、手を打つから」
ふ、藤村……。おとこらしいぞ！　遥が変な気を起こす前に、さっさと夢美を落とすんだ！
生まれて初めて、この昔馴染みの藤村が真の男に見えた瞬間だった。
……でもね、夢美の想い人は、今あんたの隣でお菓子を口いっぱいほお張っている、遥なんだからね。
どうかお願い。わたしのためにも夢美の心をがっちりつかんでよね。ね、藤村君？

もし親友であるならば、友人の恋を応援するのが友情の証でもあるんだけど、遥だけはどうしても、何があってもわたせない。

夢美、ごめん……。

とうとう、わたしと遥が二人でタッグを組んで、夢美との仲を取り持つため、藤村を全面的にサポートすることになった。

でも、このことが夢美に知れたら、彼女との友情もおしまいだよね……。

だってわたしは、夢美がどれだけ遥を好きかってわかってるんだよ。

なのに、全く関係のない藤村をけしかけるだなんて……。

夢美はわたしを困らせまいと気を遣っているのか、まだ一度も遥との仲を取り持って欲しいと言ったことがないのだ。

もしかしたら夢美は、わたしの本当の気持ちに気付いているのかもしれない。

最近特にそう思うようになってきた。

なのに夢美の本心を知りながら、全く違う男を押し付けようとしているわたしは、卑劣極まりない最低の人間なのかも……しれない。

その夜、苦しそうな顔をした夢美の姿が何度も脳裏をかすめて、なかなか寝付けなかった。

15．柊、危機一髪！

次の日、練習の成果が出たのか、指揮がうまくいくようになった藤村は、各クラスの指揮者の集まりで、音楽の先生に褒められたと言って気をよくしている。

その時大河内大輔に、どうして急にうまくなったのかと訊ねられたらしい。大河内も二組の指揮担当者なのだ。

そこで藤村は何を血迷ったのかわたしの名前を出して、教え方がうまいからおまえも習ってみればと言ってしまったなどとのたまう。

藤村、それは違うよ。遥の手助けがあったからうまくいっただけ。わたしの教え方なんて、ちっとも役に立ってないのに。

ホントに深い意味はなく、つい口がすべってしまっただけだよと言い訳していた藤村だが、堂野には内緒にしておいてくれ、と涙目で懇願された。

もちろんそんなこと、いちいち彼に言うわけもなく。

それでなくても今のわたしは分が悪い立場なのに、遥に大河内のことを誤解されたら身もふたもない。

ここは隠密にことを運ばないと……。

それにしても、何で藤村が遥に気を遣っているのだろう。

遥に知られたら都合の悪いことでもあるのだろうか……。

そうだ！　今回の合唱はあくまでもクラス対抗のコンクールなので、わたしたち一組の手の内を、ライバルである二組に見せてしまうのは、マズイってことだよね？

つまり、わたしが大河内に指揮を教えたというのがみんなにバレたら、遥は委員長として、クラスのみんなに顔向けが出来ない。そういうことなんだ。

ここは遥はもちろん、クラスのみんなにも大河内のことがバレないように気をつけようと思った。

放課後、校舎一階ロビーの黒板式掲示板に委員会の連絡事項を書き込んでいたわたしのところに、帰り支度を整えた大河内大輔がとびきりの笑顔と共に今日はよろしくと告げに来た。
わたしは辺りに人がいないかどうかきょろきょろと確かめて力なく笑い、こちらこそよろしくとぎこちなく微笑み返す。
一緒に帰るところを誰かに見られでもしたら、それはこの世の終わりを意味する。
学校で一番人気を誇るこの元生徒会長と肩を並べて道を歩こうものなら、全生徒からブーイングの嵐を受けるのは間違いない。
サラサラとした長めの前髪を少し後ろに流し、彫りの深い目元が時折ドキっとするくらい大人っぽい。
メガネの奥にきらめく真っ直ぐな瞳だけが彼が中学生であることを物語っている。
去年まではそんな大河内の飛びぬけた容貌に全く気付きもしなかったのに、遥のことが好きだと自覚してから、大河内の美男子ぶりもようやくそこそこ理解できるようになってきた。
みんなが騒ぐ理由がようやくわかるようになった自分が少し誇らしい。
確かに背も高くて頼れる感じの大河内だが、二番目に好きと言っても、藤村と同じくらいの好きさレベルだ。
遥のことだと一日中でも思いを巡らせていられるけど、大河内のことは五分もあればすべてこと足りる。
いや、もしかしたら一分もあれば十分かも……。

生徒に見られないようにするため、住宅街のコンビニ前に十五分後に待ち合わせてわたしの家に行こうと提案した。
けれども彼は一度家に帰って着替えてから直接うちに来ると言う。
変だ。彼はわたしの家の場所など知らないはずだ。

大丈夫かなと首をかしげていると、堂野の家を知っているのでわたしの家もわかると再びにっこりと微笑んだ。
おおおっ！　必殺スウィートスマイルの連打だ。
あまりにも彼の笑顔がまぶし過ぎて、息を呑んで眺めているうちに、どうして遥の家を知っているのか訊ねることもできないまま、あっという間にわたしの元から去って行った。
二人は部活動もちがうし、同じクラスになったこともないはずだ。小学校も違ったので遥との接点は皆無のはず。なのになぜ遥の家を知ってるのだろう。
ますます合点がいかないが、とにかく掲示板の仕事をさっさと終えて、早く家に帰ろうとチョークを握る手に力を込めた。

重いカバンを肩に掛け、上り坂を足早に駆け上がる。
セイタカアワダチソウが群れを成す黄色い茂みのすき間から、とんがり屋根が見えてきた。遥の家だ。あと少しで帰り着く。
息を切らせて玄関戸を開け、ただいまと部屋の中を覗きこむようにして、母さんに声をかけた。
玄関の土間には見慣れない大きなスポーツシューズがきちんと揃えてある。遥だろうか？
いや、あいつなら、こんな風に揃えない。遥じゃない。ならいったい誰？
も、もしかして……。大河内がもう来てるの？　マジで？

学校指定の大きなボストン型のカバンを床に置き、紐を解いて靴を脱ごうとしていると、母さんがバタバタとやってきて、興奮した様子で耳元でまくし立てる。
「早く、早く……。ほら、あの人……。誰だっけ……？　そうそう、生徒会長だったわよね。彼がもう来てるわよ……。約束したとか言ってるけど、あんたいつの間にあんな素敵な彼氏が出来たわけ？

それならそうと前もって言ってくれなきゃ、気の利いたお菓子もジュースも。何もないんだから。ああ、どうしましょう……」
母さん、耳が痛いよ。いくら興奮してるからって耳のそばでそんなに騒ぎ立てないで。
やっぱりこのくつの主は大河内だったのだ。
わたしは、はあ〜とため息をつき、そばにいる母さんをギロっと睨みつけた。
「もう、母さんたら……。大河内君だよ。去年同じクラスだったでしょ？　それに彼氏とか意味のわかんないこと言わないで。昨日の藤村君と同じで合唱コンクールの練習なの」
「あら、そうだったの？」
母さんは、おもいっきりつまらなそうに肩も声も落としてしょぼくれる。
「でも今は違うクラスじゃなかった？　なのにどうして一緒に練習するの？　それに大河内君、全くそんなこと言ってなかったわよ。おじゃましますって、とても丁寧にあいさつなんかしちゃって。うふふふ。背も高いのね」
「か、母さん。声が大きいよ。あのね、大河内君のクラスは無伴奏のアカペラ風の合唱をするらしいの。それで、少し指揮のアドバイスをして欲しいっていうから、ちょっとくらいならいいかなと思って。敵だけど、同じ学校の仲間だもの。ボランティア、ボランティア！」
こんなところで長時間母さんに捕まっているわけにもいかない。
わたしは、母さんをそこに残したまま、大急ぎで自分の部屋に行き、レモンイエローのトレーナーとデニムのスカートに着替えて、ピアノの部屋に向った。
テーブルの上にはお茶とおせんべいが二枚だけお皿に載って並んでいた。
本当に何もなかったんだ。いくらなんでもこれじゃあ寂しいよ。
わたしがその部屋に一歩踏み入れると、テーブルの前で足を崩し

てくつろいでいる大河内大輔が、満面の笑顔を浮かべてわたしを見上げた。

「忙しいのにすまないね。君んち、ほんとに広いな。グランドピアノを置いても部屋がちっとも狭く感じないよ。僕の家なんか、ピアノの部屋はそれだけで定員オーバーって感じ」

店員オーバーって……。　も、もしかして大河内の家にもグランドピアノがあるのだろうか。

「君のピアノと僕んちのピアノ、型番が同じみたいだ。十年くらい前に発売された最もポピュラーな形の奴だな」

「お、大河内君。もしかして、ピアノ、弾くの？」

「うん、まあね」

まあねって、あなた。ピアノが弾けるんなら、何もわたしに指揮のこと聞く必要なんてないのでは？

それに、わたしのピアノにせっかく興味を持ってくれたのに、悪いけど。実はこのピアノ……。

「あっ、でもね。これ、わたしのピアノじゃないの。こんな立派な物、うちじゃあ、とても買えないもの……」

「へぇ……。そうなんだ。じゃあ、どうしたの？　このピアノ」

大河内はいつの間にか立ち上がって、ピアノに手をかけながら見入っている。

「これは、堂野のピアノだよ。あいつ弾かないから半永久無期限に借りてるの……」

「……」

わたしは藤村に言った時と同じように、普通に、ごく普通に本当のことを言っただけなんだけど……。

大河内は、それまで触れていたピアノの蓋からすっと手を離すと、ついさっきまで浮かべていた極上の笑顔を跡形も無く消し去り、今まで見たこともないような無表情な顔で、再び畳の上に座りなおした。

わたし。何か気に障るようなこと、言ったのかな？　彼は一点を見つめたまま尚もわたしに質問を投げかける。
「堂野のピアノ？　どうしてあいつからピアノを借りてるの？　近所だから？」
えっ？　あっ。ああ……。そうか、そういうことだったのか！
わたしは彼が急変した理由が少しわかった気がした。
それもそうだ。こんな高価な物を貸し借りするなんて、普通じゃ、考えられないよね。
大河内はわたしと遥が親戚ってことを知らないから、驚いているのだ。
「ふふふ、びっくりした？　あのね、わたしんちの蔵城家と隣の堂野家は親戚同士なのよ。だから、気楽にいろんな物を貸し借りするんだ」
「し、親戚？」
「そう」
ほら。大河内の顔に赤みが差してきた。彼も納得したのだろう。
なーんだ、そうなのか、そうかそうかと何度も頷いて、しまいには、あははと笑い出す。
大河内は今はもうピアノのレッスンには行っていないけれど、好きな曲を弾いて勉強の合間の気分転換をしているんだって。
はやりのポップスなんかも、ピアノ用スコアを買ってきて、弾き語りを楽しんだりもしてるらしい。
それって超レアな情報かも。大河内の歌声って、ちょっと聴いてみたい気もする。
彼の好きなアーティストや最近話題の映画の話で盛り上がっていると、気がつけばもう時計の針は六時を指していた。
た、大変だ。指揮の話なんて、これっぽっちもしてないよ。
去年、大河内と同じクラスだった時の楽しいやり取りが再現されて、浮かれていたわたしは、今日彼がここにいる理由など、すっかり忘れてしまっていたのだ。

焦っているわたしのことなどおかまいなしに、大河内は棚にあったCDを手にする。
これ僕も持ってるよとどこまでもマイペースな大河内大輔にあきれながらも、彼が持っているCDを見て、ある記憶がよみがえった。
「あっ、それ堂野のだわ……。返すの忘れてた。気に入ってるからもらっとこかな？」
まさかあのCDがそこにあったとは……。随分迷子になったままだった遥のCDが突如大河内の手の中に姿を現す。
以前、あんなに探しても見つからなかったのにね。
「ははは……！　全く、蔵城らしいよ。でもさすが親戚だよな。堂野と君とは音楽の趣味も似てるんだね。君たち、いとこ同士？」
「ええっ？　ちがうよ。いろいろややこしいんだけど、結局のところ堂野とは血の繋がりはないんだ。親戚なのに変わってるでしょ？」
そう言いながらも、再度この運命にこっそり感謝しているわたしがいる。
だって……。それなら、将来もしも、もしもだよ。
遥と恋人同士になったりしても、誰にも遠慮はいらないし、咎められないよね？　えへへへへ。
にやついているわたしをよそに、部屋の半分は、いつしかどんよりと鉛色の空気に包まれ始めていた。
「あいつとは、血が……。繋がってないの？　そ、そうなんだ……」
再び凍りついたような表情になった大河内は、わたしを冷ややかな視線で凝視している。
お、大河内君、いったいどうしたんですか？　わたし、何か変なこと、言いました？
「一度、君に訊きたかったのだけど……。蔵城は誰か付き合ってる人とかいるの？」
「へっ？　つ、付き合ってる人……ですか？」
わたしは呆気に取られて大河内のいつ見てもきれいな顔を覗き込む。

だって、付き合ってる人だよ？　そんなもの、いるわけないじゃない。見れば分かるでしょ。
それに、なんで大河内がそんなことを訊く必要があるの？
「そう。そんな人がいるのかなと思って……。で、もし。そんな人がいないのなら」
大河内がじりじりと近寄ってくる。ちょ、ちょっと、待ってよ。
「も、もし、わたしに、そんな人が……いないのなら？」
あまりにも真剣な大河内の瞳に吸い込まれそうになりながらも、その場から逃れたい一心で、ゆっくりと後ずさりを始めたその時だった。
急に部屋の襖戸が開く音がして後を振り返ると、ついさっきまで思い浮かべてにやにやしていた、血のつながらない親戚がそこに姿を現したのだ。
「大河内、悪いけど。こいつ付き合ってる奴、いるから……。柊、おばあちゃんが呼んでる。もたもたしてないで早く来い！」
わたしと大河内の間に入って来た遥が、怖い顔をして突如まくし立てる。
「そ、そんな急に！　わ、わかったから。今、行くから！」
遥はそこにいる大河内をさっさと帰れと言わんばかりに睨みつける。
大河内は不服そうな表情を浮かべながらも、遥に何も言い返さない。わたしの方をちらっと見て、黙って部屋を出て行く。
大河内の姿が部屋から消えたのを見届けるや否や、遥の手がわたしの手首を掴み、強引にひっぱられる。
それにしても、どうしてこのタイミングで遥がやって来たの？
それに今、付き合ってる人がいるって、大河内に向かって言わなかったっけ？
このわたしが、誰かと付き合っているってことだよね。
もちろん、そんなのは口からでまかせだってわかってるけど……。
窮地に追いやられたわたしを、遥が機転を利かせて助けてくれた

ことには違いない。
と言うことは……。

も、もしかしてわたし……。大河内に迫られていたのかな？
まさか……。このわたしが？

16．そこそこかわいい

「おじゃましました……」
遥の家からもどってきた母さんにすれ違いざまに頭を下げ、大河内が表情を硬くしたまま帰って行く。
もう少しゆっくりしていってちょうだいと母さんが引き止めても、大河内が振り返ることはなかった。
そして、その後をドタドタとわたしと遥が家から出て行く。
「おばちゃん、ちょっと柊借りるわ」
「あらあら、はる君もいたの？　そんなに慌てちゃって。いったい何事かしら」
理解に苦しむ母さんを尻目に、遥が強引にわたしの腕を引っ張り、有無を言わせずにおばあちゃんの家に連れて行こうとするのだ。

おばあちゃんの家の中はシンと静まり返っていた。
いつもこの家には、おばあちゃんしかいないのだから、静かなのはあたりまえなんだけれど……。
「おばあちゃん、いないみたいだね。ねえ遥、おばあちゃんが呼んでたって……うそ？」
キョロキョロとあちこちを探してみてもおばあちゃんの姿はどこにもなかった。
台所も、居間も電気が消えている。これはどうみたって留守だ。
「ばあちゃんは今夜、村の寄り合いだから……。家にはいないさ」
遥はそんなの当然だとでも言うように、しらっと答える。
なんでそんな見えすいた嘘をつくのだろう……。
居間の灯りを点けると、遥はまだぬくもりの残っているコタツに足を突っ込み、わたしにも座れと布団を持ち上げて、座布団の上をトントンとたたいた。
わたしはこれから何が起こるのかと内心ビクビクしながら、よも

ぎ色の座布団の上に腰を下ろし、足を伸ばした。
「おまえの部屋に急に押しかけてごめん……。びっくりしただろ？」
わたしを覗き込むようにしながら遥が言った。
「そ、そりゃあもちろん。まさかあのタイミングで遥が来るなんて、思いもしないもの……」
「俺も、おまえの部屋の前に着いたとたん、大河内の声が聞こえて驚いたさ……。さっきおまえんちのおばちゃんが、何か客に出せそうなお菓子はないかってうちにやって来たんだ。すっごいハンサムな元生徒会長が来てるって母さんと話してるのを聞いたとたん、俺の頭ん中に赤いランプがみごとに点灯して……」
赤いランプって……。大河内が危険人物とでも言うのだろうか？
「猛ダッシュでおまえのところに駆け込んだってわけさ……」
「そ、そうだったんだ。……ごめん。遥に知られたら怒られると思って、大河内君が来るってこと、内緒にしてた……」
せっかくいい調子で大河内と練習してたのに……じゃなくて、おしゃべりを楽しんでいたのに。
母さんのせいで、遥にバレてしまった。藤村になんて言おう。彼も遥に怒られるのかな？
「大河内がおまえを誘ったのか？　……それでおまえ、嬉しくて家に上げたのか？」
「うん……。断ればよかったんだけど、二年の時、わりと仲が良かったし、別にいいかなと思って……」
「そういうことか……。なら、おまえがいいのなら、俺、別に止めなくてもよかったんだな……。でもおまえ、本当にあいつのことが好きなのか？」
えっ？　今、なんて言いました？
ちょ、ちょっと待ってよ。　好きって……。遥、あんた、何か誤解してない？
「だからさあ。好きとか嫌いとかじゃなくて、同じ学校の元クラスメイトとして、困っている時はお互い助け合うのは当然かなって、

そう思って……」
「じゃあおまえは、好きでもない奴と、元クラスメイトというだけで付き合ったりするのか？　おまえって奴は、そんな風に男をたぶらかすようないい加減な女だったのか？　ええ？　どうなんだっ！」
こたつの天板をバンと叩いて遥が怒りを露わにする。
でも……。遥は完全に、わたしと大河内の関係を誤解している。
なんでそうなるの？　どうして？
「遥？　あんた、なんか勘違いしてない？　わたし、大河内君と付き合ってないし、男をたぶらかしたりなんかもしてないよ！　大河内君に指揮のやり方教えてって、頼まれただけなんだけど！」
そうだ。それだけだ。なのにどうしてそんな風に思われなきゃいけないんだろう。
わたしは、遥に負けないくらい大きな音で、こたつの天板をビシッと叩いた。
「はあ？　し、指揮ぃ？」
「そう。大河内君、二組の指揮者なんだって。藤村みたいに教えてって。でも、その……。結局練習なんて全くしなかったんだけど……。だから、遥があの時来てくれなかったら、今頃どうなっていたのかなって……」
指揮の練習と聞いたとたん、ふにゃふにゃとこたつの天板にうなだれて、力の抜けてしまっただらしない姿の遥がそこにいる。
ってことは。指揮の練習はやってもいいってことなの？
な～んだ。それなら正直に最初からそう言っとけばよかったんだ。大河内と指揮の練習をするって。
藤村が余計なこと言うから、変に気を回してしまったんだよね。クラスのためにも、このことは黙ってたほうがいいんじゃないかって。
でも、遥が来てくれて助かった。もしあのまま大河内と二人きりだったら、わたしはとんでもないことに巻き込まれていたのかもしれない。

「やれやれ……。おまえホントに心配させすぎ。俺はてっきり、おまえがあいつに尻尾振ってるだと思ってたよ。でもあいつ、さっきおまえに言い寄ってただろ？　たしか去年の今ごろだったかな。あいつを家の周りでちょくちょく見かけたんだ。最初はチャリでどこかに行く途中なのかなと思ってたけど、木の陰からおまえの家をじっと見てるんだぞ。俺、ピンと来たもんね」
「ピンと？」
「そう。おまえが二年の時、あいつと仲がいいのは希美香に聞いて知ってたから、もうこれは間違いないってな。あいつ、おまえに気があるんだよ」
「えっ？　どういうこと？」
「だから……。おまえのことが好きなんだよ、あいつ」
「は、は、遥……。やめてよ。そんなの、ありえないし……」
わたしは引き攣り笑いを浮かべながら、大きく頭（かぶり）を振る。
でも……。それと同時に、さっきの大河内の真剣な眼差しを思い出してもいた。
「で、でもね……。さっきの大河内君、いつもの大河内君じゃなかった。遥が言ったみたいに、ちょっとはそんなこともありかな、なんて思った。ほんとに、ちょっとだけ……。でもあの大河内君だよ？　モテてモテてモテまくりの彼が、わたしなんかに興味持つのかな？　自慢じゃないけどわたし、今まで一度だって、誰からも告白なんてされたことないし、美人でもないし、愛想もそんなに良くないし……」
「確かにそうだよな」
そんなあ……。わかっていても面と向かってそうだと言われると、乙女心がチクリと痛む。
わたしはますますヒドイ顔になるのは承知の上で、ぶうっと頬を膨らませた。
「あはははは……！　そんなに拗ねるなよ。おまえのいいところは俺が一番良く知ってるから、それでいいだろ？」

遥もわたしの目の高さに合わせるように、背中を丸めてこたつの上に直接頭を乗せている。
すると突然左斜め前にいる彼の手が、わたしの目の前に伸びてきて……。
頭を撫でてくれた。よしよしって……。
随分久しぶりの遥の手のぬくもり……。さっき手首をつかまれた時は、痛かっただけだけど、今は違う。
う、うわっ。どうしよう。恥ずかしくて、心臓が爆発しそうだよ。
遥、お願いです。もう、それくらいでやめて下さい。これ以上は、とても耐えられそうにありませんから……。

わたしは遥の手が離れたと同時に、むくっと上半身を起こすと、多分真っ赤になってるだろう頬を隠すようにして両手で頬杖をつき、さりげなく質問を始める。
「ねえねえ遥。わたしのいいところってどんなところ？　教えて……」
気になる。遥が誰よりも良く知ってくれているいいところって、何だろう。
「そうだなあ。友達思いだろ？　それに力持ち。ピアノうまいし、よく食う。そこそこ勉強できて、そこそこかわいいところかな？」
力持ちって、それ褒めてないですから。よく食べるのは認めます。で……。そこそこかわいいというのは、評価してもいいのでしょうか？
「おまえな。誰にも告白されたことないって言ってるけど、かなり損してるよなあ。多分……」
「なんで？　わたしの性格が悪いの？　それとも顔のせい？」
性格は直すように努力するけど、顔だけはどうにもならない。
「ぶはははは……！」
そんなに笑わなくても……。何を損してるって言うのだろう。
別に告白されなくても何も困らないし、今のままで十分満足な中

学生活なんだけどな。
「俺がいるから、誰も何も言ってこないんじゃないかな？　俺に言ってくる女子も必ずおまえのこと訊くぞ。そりゃあ、俺たち、恋人同士でもなんでもないけど、見た目付き合ってるみたいに見えるらしいからな……。なあ、柊。いっそのこと俺と付き合ってみる？　どう？　ひいらぎちゃん……」
は、遥……。そんなにじっとわたしのこと見ないで。本気なの？　それとも……。
「じょ、じょ、冗談でしょ？」
この状況が信じられるはずもなく。遥の様子をそれとなく窺い見る。
わたしだけを映すその瞳は、とても嘘を言っているようには思えなくて……。
そんな唐突に、それも一生の一大事をこんなに簡単に言ってのけるなんて。
世の中のカップルはみんなこんな感じで付き合い始めるのかな？　なんか違うような気がするけど……。
付き合うとかそんなことよりも、遥の本当の気持ちが知りたい。
わたしのこと、どう思ってる？　少しは期待してもいいのかな？　だとしたら……。

その時、遥の目がキラリと光ったのを見逃さなかった。
わたしがオロオロしているのを楽しんでいる目だ。
「うそだよーーん。おまえ、本気にしたろ？　まあ、もしまた大河内に迫られたら、俺と付き合ってるとでも言って断ってくれていいから。それに俺達が付き合うったって、これ以上どうしようもないしな。だろ？」
「ま、まあね」
アブナイ、アブナイ。まんまと遥の口車に乗せられるところでした。でも……。

なんで大河内に迫られたら断らないといけないんだろう。
わたし、大河内が嫌いだなんて言ってないし、どうしたらいいって遥に相談したわけでもない。
でもね、わたしが好きな人は遥だけだから、大河内が何か言ってきても返事は決まっているんだけどね。
遥ったら、少しはわたしのことも、気にかけてくれているのかな？
なんだかんだ言っても、いつもそばに居て何かあったら駆けつけてくれるのは、目の前の遥なんだから。
当分はこのままでいいよね。

遥へのこの想いは、今はまだ、わたしの胸の中にそっとしまっておこう。
うん。それがいい。

17．ありえない誤解

合唱コンクールは激戦の末、ノーマークだった四組が優勝して我が一組は二位に終わった。朝はホームルーム前の三十分。昼休みは十五分。放課後一時間の猛練習の結果なのだから、残念だったけどクラスメイトのどの顔もとても満足げで、後悔の言葉はなかった。

その日学校が終わってから、優勝した四組の夢美と二人でささやかな祝賀パーティーを開催した。もちろんいつものようにわたしの家のピアノの部屋で。

夢美は合唱部員で、文化祭でのコンサートを最後に部活を引退する。彼女のソプラノが四組の優勝に大きく貢献したのは言うまでもない。

持ち寄ったお菓子やおにぎりを食べた後は、仕事帰りの夢美のお父さんが迎えに来るまで勉強する事になっている。最近ではこうやって勉強を名目に夢美と一緒に過ごす日以外は、彼女と遊ぶことも少なくなってきた。

夢美は塾にも行ってるのでわたしより格段に忙しい。だから仕方ないんだけどね。その点わたしは受験生なのに、結構時間的なゆとりはある。本を読んだりＣＤを聞いたり、おばあちゃんのところで遥と勉強したり……。これは、さすがに夢美にはまだ言ってない。いや、言えないよ。

夏休み中の塾の夏期講習はそれなりに成果をもたらしてくれた。だからというわけでもないけど、今度冬休みにも短期集中講座を受けようかな……とは思っている。だってもう来年の春は受験だよ。そろそろエンジンをかけないとね。

シャーペンを器用にくるくる回しながら夢美が突然問題集から顔をあげた。

「ねえ、ひいら……。あたし、合唱部の推薦で花山大付属受けるように顧問に勧められてるけど、堂野はどこ受けるのかな？　やっぱ西山第一？」
　西山第一は、この地域の県立普通科高校だ。昔、男子校だったなごりで、硬派なイメージがいまだ染み付いたままで、質実剛健をスローガンに掲げた進学校でもある。多分遥の成績なら申し分なくそこに行けるのだろう。
「何も聞いてないけど、そうじゃないかな？　……で、夢ちゃんは迷ってるの？」
「う、うん。花山大付属に行って合唱で高校の部の全国大会目指すのも魅力的だし、西山第一で堂野と一緒に高校生活の思い出を作りたいってのもある。ただ、西山第一にはちょっと内申点が足りないんだ。期末でよほどがんばんないと無理なんだけどね……。ひいらは？　どこ受ける？」
「わたし？　わたしはどこでもいいよ。別にここでなくっちゃって目標があるわけじゃないし。そりゃあ、西山第一に行ければそれに越した事ないよ。でもさ、わたし、夢ちゃんより成績ひどいから、まあ百パーセント無理だね。だったら西山第二かな？　だめならまた他を考えるよ……」
　西山第二は戦後のベビーブームに推されて出来た普通科高校。道路を隔てて第一高校と隣り合わせにある。制服もほとんど同じで、両校とも私服登校も認められている。はっきり言って校門をくぐるまでどっちの生徒か全くわからないと、部活の先輩が言ってたのを思い出す。
　果たして二校を区別する必要がどこにあるのか未だに意味不明、なんてね。……西山第二はそんな高校なんだ。
「ひいらって、案外マイペースだよね。みんなには、あくせくしてるところなんて一切見せないで、実はかげで努力してるってタイプなのかな？」
「ええ？　かげも何も、努力はどうも苦手なんだよね。コツコツ

積み重ねるとか……。そんなのは多分向いてないみたい。将来だって、何になりたいとかこんな風に生きてみたいとかそれすらまだ何もわからない。わたしってつくづくのん気で世間知らずなんだと、最近ようやく気付いたんだ。へへへ」

「じゃあ、何もしないで今の状態なんだったら、ちょっとがんばったら勉強だって出来るんじゃないかな？　それってすごいよ！　今度の期末がんばんなよ。文化祭終わったら、もうこんな勉強ごっこやめて、一人で集中してやってみるといいんじゃないかな。わたしもなんだかやる気が出ちゃった」

「う～ん。それもそうだね。勉強、ちょっとはまじめにやってみようかな？　……ところで夢ちゃん、藤村の事なんだけど……」

わたしは何か引っかかる物を感じながらも、藤村の願いが成就するためのささやかな手伝いも忘れなかった。

「藤村？　彼がどうしたの？」

「え～っと。彼っていい奴だよね」

わたし、いったい何言ってるんだろ？　これって怪しくない？

「……そうだね。って急にどうして藤村なの？」

それもそうだ。夢美の言うことはもっともだ。高校の話からいきなりこれだもん。やっぱ怪しすぎる。

「その……。藤村って運動神経抜群で、一年からバスケのレギュラー獲ってたよね？　短距離走も陸上部の人よりも速かったって噂だよ」

「……そうみたいだね。って、ひいら。なんかおかしい。いったいどうしたの？」

「……」

ど、どうしよう……。　藤村が直接夢美に告白するって言ってたから今ここで余計なことは言えないし。

「わかった！　ひいら、もしかして……。藤村のこと、好きになった？　ねえ、そうでしょ？」

「えっ？　い、いや、そういうわけではないけど、あいつはいい奴

だと思って……」
「やっぱりおかしいよ！　ふふふ……そうなんだ。ひいらもやっと恋に目覚めたのね。去年は大河内君が好きなのかと思ってたけど……そうだったの。でも良かった。だって……もしかして、もしかしたらだよ？」
「もしかしたら？」
「うん。ひいらも堂野が好きなのかな？　って思ったりもしてたんだ。だって、ひいらと堂野、なにげに仲いいしさ」
ドキ――――ッ！！　やっぱ、気付いてた？　ど、どうしよう？
「そ、そんな……わ、わ、わけ……ないじゃん。堂野はわたしのことなんて何とも思ってないし、わたしだって……その……好きとかそういうんじゃないし」
ふうーーっ。言えた。なんとかごまかせたよね。
「で、藤村なのね？　これはビッグニュースだよ。あたしの中で今年度最高のサプライズだわ。昔から仲良かったもんね。あんた達」
「だから、違うって！　藤村はただの友達だよ。ほんのちょっと、いい奴だなあと思っただけ」
「ほんとに？」
もちろんです。それ以上何もありませんから。わたしは深々と頷いた。ああ……。だからいやなんだよね。こんな風に慣れないことをするのは……。これ以上、藤村の恋のお手伝いをするのは無理だ。夢美の気持ちは遥一筋だもの。わたしの力ではどうにもならないよ。悪いけど藤村には一パーセントだって夢美と両思いになる可能性はない。明日、遥に言わなきゃ。
キューピット役は御辞退申し上げます……ってね。

18．栗の木

学校から帰ったわたしは、ジーンズと薄手のセーターに着替えて裏山に向った。今朝登校の途中遥に、話があるからいつもの裏山でと約束を取り付けたのだ。

わたしが学校を出る時、遥はまだ教室でクラスメイトとのおしゃべりに夢中だった。そんなに急がなくても充分間に合うだろう。

今日はなんとしても彼より先に、約束の栗の木の下に着きたかったから……。

山の中腹あたりに見晴らしがよくて、視界が開けたところがある。そのあたり一帯が、昔、果樹園だったところで、栗の木がいっぱいあるのだ。なかでもひときわ目を引くのが、今日約束した一番大きな栗の木。小粒だけど甘くておいしい栗が採れるこの木の下は、小さい頃二人のお気に入りの場所だった。

高さも手ごろで木登りにうってつけのこの栗の木は、いつでも暖かくわたしたちを迎えてくれる。

いつもなら走って駆け上がると五分もかからずにここまでたどりつけるのに、運動不足とちょっとは受験勉強に励むようになったための睡眠不足のせいか、十分近くもかかってようやくたどり着いた。

夕暮れまでにはまだ少し時間がある。夕日の沈む方向に向いて腰を降ろそうと木のそばまで行くと、もうすでに先客があるのがわかった。もう一つの獣道（けものみち）の方から上がってきたのだろうか？

遥は制服のまま、首もとのネクタイを緩めて、落ちている栗のイガを避けるようにして、枯れ草の上に寝転んでいた。

「よおっ！　約束どおり来たけど……。何の用？」

そこにいるのは確かに遥なのに。全くの別人が話しかけてくるような不思議な感覚を覚える。本当に今ここにいるのは、あのひょうきんでお笑い好きの遥なのだろうか？

わたしはどぎまぎしながらそっと彼の横に腰を下ろした。
「は、遥。忙しいのに呼び出したりしてごめん。実は藤村のことなんだけど……」
「へ？　藤村？」
「うん……。わたしさあ。藤村の恋のお手伝い、もう辞めにしようと思って。だからあんたひとりで応援してあげてって、そのことを頼もうと思って……」
「えっ？　でもおまえがあいつの力になってやんないと、夢美との橋渡しできねえよ？」
突然のわたしのギブアップ宣言に驚いた遥は、枯葉を髪につけたままガバっとはね起きた。そしてわたしを覗き込む。
「そ、それが問題なの……」
遥の顔があまりにも近くにあって、ちょっとだけ後ろにずりずりと身体を動かした。
「実はわたし、夢美の本当の好きな人のこと知ってて……。だから、藤村を無理やり押し付けるようで、申し訳なくて……」
「そうだったのか……。じゃあおまえは、その夢美の本当に好きな奴との間を取り持ってやりたいんだな。わかった。そういうことなら俺にまかせておけ。俺は藤村を応援する。おまえは夢美を応援する。後は、二人にまかせる。それでいいな？」
でも遥は本当にそれでいいのかな？　夢美のことあきらめたの？
藤村との友情の方が大事？
落ち込んだそぶりを見せることもなく、遥は、これで話は終わりとでも言うようにすくっと立ち上がり、髪についた枯葉を振り落とすようにして、頭を二、三度振った。
「あっ、遥。ちょっと待って。二人にまかせるって、そうもいかないんだ……。夢美を応援したいのはやまやまなんだけど、その相手ってのが……」
遥、あんたなんだよ、なんて、とてもじゃないけど言えないよ。どうしよう……。

「その相手？　おまえが困るような相手って、そんな奴がいるのか？　誰だよ。もしかして大河内？　……そうなのか？」
遥が鼻息も荒くまた迫ってくる。どうしてここで大河内の名前が出てくるの？　あれから大河内とは何もしゃべってないし、もし夢美が大河内を好きならば、とっくの昔に応援している。
「そんなわけないでしょ。もし夢ちゃんが大河内君が好きならこんなに悩まないよ。それに言っとくけど、わたしが大河内君と仲良くするのを邪魔するのはあんたなんだからね！　これ以上、進展のしようがないっていうの！」
「あ、あれは邪魔とかじゃなくて、おまえのためを思って、その……なんだな？　そうそう、おまえに特定の人が出来ると不便だから……あ、いや……」
いつも雄弁な遥がしどろもどろになってる。……なんだかおかしいよ。それにしてもわたしのためを思ってって、どうしてそうなるんだろう。大河内って、そんなに悪い人だったっけ？　それに……。
「不便？　……ということは、わたしは遥のために、一生特定の人を作れないってことだよね？　なんかおかしくない？　それにこの先誰からも相手にされなくて、おまけに数少ない出会いをあんたに阻止されて、わたしはずーーっと一人ぼっちで寂しく生きていかなくちゃならないってことだよね？」
「何もそんな大げさな意味で言ったんじゃないよ。おまえに本当に好きな人ができたら、それはそれできっと応援するから。なっ？……だけど大河内はだめだ！」
……応援してくれるんだ。うれしいような寂しいような複雑な気持ち。やっぱり遥にだけは応援されたくないな。ずっと邪魔してくれた方がましだよ。それにしても大河内だけは、何があってもだめなんだ。何か彼に対するトラウマでもあるのかな？
勉強もモテ具合も微妙に大河内に負けてるのが、遥の闘争心に火をつけているのかもね。ここはちょっとなだめてあげなきゃ。
「それなら安心して。わたし好きな人いるから、大河内君には何が

あってもなびかないよ。どう？　これなら文句ないでしょ？」
「そうか……って、おい！　おまえ好きな人いるのか？　誰だ、誰なんだっ！」
　これって、もしかして新たな火種を起こしちゃった？　なんかすごい剣幕で訊ねてくるよね。結局遥は、わたしの恋を応援する気なんてさらさらないんだ。単なる独占欲丸出しってやつだね。
「なあ、教えろよ……。俺も教えるからさあ。ねえ、ひいらぎちゃん、お、し、え、て！」
　そんな、似合わない乙女チックな上目遣いをされても、あんたにはぜーーったい言わないから。こればっかりは……ねっ？
「あんたの好きな人なんて聞きたくもないし、わたしも教えない。いい？　わかった？　もうっ、なんでこんな話になるの。だから、今話してるのはそんなことじゃないでしょ？　夢ちゃんと藤村のことよね！　ほんとに、遥はのんきなんだから……。なんで夢ちゃんは、こんな人がいいのかなあ。はあ……っ」
　ため息と共に、ぼそっとしゃべってしまってから気付いた。わたし、たった今、とんでもないこと言わなかった？　言ったよね？
後の祭りとは、まさしくこの瞬間を指すに違いない。

19．夕日の約束

――なんで夢ちゃんはこんな人がいいのかなあ……。

勘のいい遥のことだ。わたしの言った言葉の意味を知るのに、そんなに時間はかからないだろう。

「夢美の好きな人って……。もしかして、俺？」

ほら、やっぱり。わかっちゃったよね。ど、どうしよう……。夢美の了解も取らないうちに、遥にバレちゃった……。

それにもしもだよ、まだ遥も夢美が好きだったとしたら、わたしはとんでもない墓穴を掘ってしまったことになる。四月のクラス分け発表のあの日。遥と夢美は確かに意識し合っていたのだから……。

遥は腕を組み、思案顔になる。そしてわたしの顔をじっとのぞき込んだ。

「うーーん。それはそれで嬉しいことかもしんないけど。……俺、夢美のこと、別になんとも思ってないから、その話乗らねえ。悪いけど、あいつと俺をくっつけようなんてのはなしね」

う、うそ。夢美のこと、本当に何とも思ってないの？　わたしの心臓が急に早鐘を打ち始める。

「そ、そうだったんだ。わたしはてっきり……。そうだ！　藤村に遠慮してるってことはない？」

わたしは真意を確かめるべく、遥の目をじっと見た。

「ははは、ちがうよ。……絶対にちがう！」

遥もわたしをまっすぐに見る。そしてきっぱりと否定した。

「そ、そうなんだ。あははは、あはははは……」

わたし、何笑ってるんだろ。夢美のことを思えば、とても笑ってなんかいられないはずなのにね。友としてあるまじき態度だ。

でも、なんだか急に身体中の力が抜けて、ひとりでに頬が緩んで

しまうんだよね。遥が好きな人は夢美じゃなかったんだ。
でも、わたしにとっての幸福は、夢美の不幸に繋がる。そう考えたとたん、いままでの浮かれた自分が恥ずかしくなり、自己嫌悪に陥る。ごめんね。夢美……。

ところで幸福を手に入れたのは本当にこのわたしなのだろうか？
それは違う。さっき遥が言ってたよね。俺も誰が好きか言うからって。確かにそう言ったのだ。夢美じゃないとすると、別に好きな人がいるってわけだよね。いったい誰？　やだ。涙が出そう。でも面と向かって訊く勇気はないし。
「おまえ、何にやけたり、怒ったりしてるの？　変な奴。で、おまえ。夢美のことを素直に応援できないって言ってたよな？　ということは……」
な、なに？　そんなに近寄らないで。わ、わたしは、何も深い意味はなく、そう言ったまでで……。
「おまえも俺のことが。実は……。好き。とか……」
「……」
遥がじっとわたしを見てる。目を逸らすことなんてできない。どうしてこんな展開に？　いつものように不敵な笑みを浮かべた遥は、悪びれることなくさらりとそんな大胆なことを言う。恥ずかしいよ。そんなに見ないでよ。
うん、そうだよ、遥が好きだよ、なんてとても言えない……。
どれくらいそうやって沈黙していたのかわからないけど、ふっと遥の口元が緩み、白い歯が覗く。ズボンのポケットに手を突っ込んだまま足先で栗のイガを蹴り、ゆっくりと話し始めた。
「俺は……。おまえに好きな人が出来たら、応援するって言ったろう？　もしおまえの相手が俺ならば……。その話乗った！」
えっ？　……の、乗ってくれるんですか？　それって、それって……。わたしはおもいっきり激しく、何度もコクコクと頷いた。遥の気が変らないうちに。

「そうか！　よっしゃっ！　それならこの話、決まりだな」
き、決まりって……。ポケットから手を出した遥が、胸の前で作った拳を誇らしげに何度も振りかざす。
「なあ柊。俺、前から考えてたんだけど……。もし二十五歳になって、お互い誰も相手がいなかったら、俺たち結婚しよ。な？　そうしよう」
わたしは目の前の遥を凝視したまま固まった。
「け、け、け……。けっこん？」
へ？　今なんとおっしゃいましたか？　確か言いましたよね。結婚と……。わたしって、十五にしてプロポーズされてるわけですか？
「あ、あの……。結婚してくれるのは嬉しいけど、相手はわたしだよ？　好きでもない相手なのにいいの？」
そうだよ。遥は何も言ってくれないし、わたしだけが好きなんてバランスが悪いよ。
「はあ？　おまえ、何言ってるの？　俺、嫌いな奴とは結婚しないし、多分これから先も他の誰とも付き合わないから、二十五歳になったらおまえと結婚して蔵城に改名するよ。つまりおまえんちと養子縁組するってわけ。こんないい保険は他に見当たらないだろ？あ、それと……。俺には柊しかいないから……」
遥の頬が心持ち赤く染まる。そう言ったあと急に下を向いて照れくさそうにはにかむ。わたしでいいんだ。いいんだね。
「遥……。ありがと。わたしも多分遥以外に出会いはなさそうだから、これって現実になる可能性、相当高そうなんだけど。それに、将来蔵城を名乗ってくれるんだ。おばあちゃんも喜ぶね。でも綾子おばちゃん、許してくれるかな？」
「それ、大丈夫」
突然遥が顔を上げ、意気揚々と答える。
「昨日の検診でお腹の赤ちゃん男だってわかったんだ。そいつに堂野を継がせりゃいいだろ？」
そんな……。まだ生まれてもいない未来の弟君の将来を勝手に決

めてしまうなんて。なんだか、自分勝手で我がまま兄貴の本領発揮って感じなんだけど。
「ねえ遥。もしも、もしもだよ。どっちかに他に好きな人できたらどうする？」
「だから俺は誰とも付き合わないって言ってるだろ？　心配御無用。それとも何？　おまえ、裏切る気？」
「裏切るって、人聞き悪いんだから。それに、遥が言ったんだよ？　二十五歳になった時、お互い誰も相手がいなかったらって……」
「はん！　おまえが裏切りそうになったら阻止するまでのことよ。はっはっは……！　まあとにかく将来は決まったし、この先受験勉強もがんばらないとな。そうだ。明日からおまえの成績上げるために、俺の時間を捧げるから覚悟しとくように」
遥の目がキラリと怪しい光を放つ。どういうこと？　もしかして……。わたしのために家庭教師になってくれるとか言うんじゃないでしょうね？　なら、答えはノーだ。
「け、結構です。今の成績で行けるとこ探すから。お気になさらずに。あんただって、自分の勉強があるでしょ？　わたしのことはいいから。ね？」
「何をおっしゃるうさぎさん。絶対に俺と同じ高校に行ってもらいますから。しっかり監視しておかないと、おまえ裏切るだろ？　違う学校で第二の大河内が現れたらどうするんだ！　これ、必要最低条件だから。希望校調査、県立西山第一って書くこと。第一だぞ。いいな！」
そんな、横暴な……。

いつの間にか夕日が辺りを真っ赤に染めていた。落ちている栗のイガもまるで大きなこんぺいとうのように甘く輝いて見える。きっと、わたしもあの夕日に負けないくらい真っ赤な顔をしてるんだろうな。
栗の木の下で婚約をしたわたしたち。ほんとにいいのだろうか…

…。こんな大事なことを二人だけで勝手に決めちゃって。……でもちょっと待ってよ。プロポーズはされたけど、好きだとも付き合ってとも何も言われてないよ。これって……。

「ねえねえ。わたしたち、これからどうすればいいの？　わたしは遥の何なの？」

「うっせえなあ。そんなもの自分で考えろ！　これ以上は……。また今度」

「今度っていつ？　これ以上って。……ちょっと待ってよ！　こら、遥！」

急に駆け出して、少し離れたところからまん中の栗の木を眺めている……わたしの大切な人。

「大きくなったよな、この木。十年後にまたここに来ような」

わたしも遥のそばに駆け寄って、一緒に栗の木を見上げた。するとふいに遥の手がわたしの手を包み込む。

心臓が止まるかと思った。

わたしたちが最後に手を繋いだのはいつだったんだろ？　四年生の時？　いや、六年生のフォークダンス？

遥の手はちょっと冷たかったけど、わたしの心の中はぽかぽか暖かい。日も暮れてきたし、そろそろうちに帰らないといけないよね。でも……。このまま、遥とこうしていたい。ずっと手を繋いだまま、こうやって、栗の木を眺めていたい。

少し強く握ると、遥がぎゅっと握り返してくれた。指先から、彼の気持ちが入り込んでくるような、そんな気がする。

好きだとも、なんとも言ってくれなくても……。今はこれで十分。

足元にころがった大きなこんぺいとうはまだかすかに夕日色。

それはとても甘い夕日色だった。

20．制服

裏山のあちこちに山桜が咲き、ついこの間まで小雪が舞っていたなんて信じられないくらいうららかな陽気の四月の初旬。今日は待ちに待った高校の入学式だ。

初めての電車通学に胸を躍らせながら、新品の制服に身を包んだわたしは、遥と一緒に藤村の家に向っていた。中三の時の同じクラスからは五人、西山第一高校に行くことになっている。もちろん、わたしもそのうちの一人にもぐり込めたわけで……。

いまだに信じられない気持ちだけど、合格発表の日の生きた心地のしないあのドキドキ感だけは、もう二度と味わいたくないと心に誓った。ほんとうに奇跡だったとしか言いようが無いのだから。

「ねえ、遥？　わたしさ、今回の受験で一生分の運を使い果したような気がする。だってこのセーラーが着れるなんて、ほんとに夢のようなんだもん」

中学生日記っていうドラマの生徒が着ている様なオーソドックスなセーラー服なんだけど、特別な思いがこの制服に込められているんだ。

「はん、何言ってるんだか……。隣の西山第二でも同じ制服だろうが」

「もーーっ。遥ったら、乙女心がちっともわかってないんだから！　よーく見てよ！　胸元の校章のマークが第二とは微妙に違うんだからね。縫い取りの刺繍糸の色も違うし」

わたしは遥に見えるように、おもいっきり胸を張った。

「そんなもん、別にどうだっていいじゃないか。男の詰襟なんて、日本中、どこも同じなんだぜ。制服なんてもんは、所詮その程度のもんだよ。なあ柊。おまえもどうせ明日からは私服で行くんだろ？」

「そりゃあそうだけど……。じゃあ遥は、わたしが西山第一、落っこちた方が良かったっていうの？」

遥のどうでもいいようなその言い方が、気に入らない。わたしはどこまでも食らいつく覚悟を決めた。
「そんなこと、言ってねえだろ？」
「言った。西山第二でも同じだって言った」
「はあ？　……ったく話になんねえよ。おまえの頭、前よりもひどくなってるんじゃないの？」
「な、なによ。そうですよ。わたしはあほです。バカです。悪かったわねっ！」
遥にセーラー服に込めた乙女心をわかってもらおうと思ったわたしが間違ってたんだ。夢美は花山大付属だし、中学の同じクラスの女子といえば白石史絵しかいないし……。遥と一緒に行くんじゃなかった。これなら一人の方がましだ。

白石史絵といえば……。この人、ちょっと苦手なんだよね。ちゃっかり遥狙いなんだってことは前から気付いていた。でも、もう遥はわたしのものだしね。だから関係ないんだけど、妙に引っかかる人なんだ。
それに、まあ、遥の意地悪は、今日だけがまんすればいいんだし。明日からは別々に登校すれば何も問題ない。わたしだってそのうち新しい友達もできるだろうしね。記念すべき高校生活スタートのこの晴れがましい日に、いきなりけんかだなんて。先が思いやられるよ、全く。

藤村の家の前に着いてから、かれこれ五分程経っただろうか。なかなか出てこない藤村にしびれを切らせた遥が、彼の家のインターホンを鳴らした。
――はい！
中から藤村のお母さんの元気な声が聞こえる。
「ああ、堂野です」
――あら、はるか君。ごめんなさいね。直輝ったらさっき起きた

ばかりで。もう少しかかりそうだから先に行っててくれる？
「はい、わかりました」
――あっ！　ちょっと待って。はるか君のお母さん、退院なさったの？
「まだです」
――そう。それじゃあ、ひいらぎちゃんのお母さんと一緒に後で入学式に行くわね。
「はい」
遥のだるそうな返事が耳に痛い。藤村ったら、また寝坊したんだ。中学の時も、誘いに行っても一緒に学校に行けたためしがないと言ってたっけ？　高校になっても直る見込みはなさそうだね。電車に乗り遅れたらどうするんだろう？　朝練とか大丈夫なのかな？
遥のお母さんは出産でちょうど入院中なんだ。三月の出産予定だったんだけど、ひと月近くも延びちゃって、やっと四月二日に元気な男の子が生まれたばかり。
だから今日は、うちのお母さんがわたしたち二人の保護者代わりで入学式にやってくる。
「あ、相変わらずだね、藤村」
機嫌の悪さが滲み出ている遥に、恐る恐る声をかける。
「ああ。あいつ、ふざけてるのか？　これから誘うの辞めにする」
「そ、そうなんだ……。じゃあ、遥は、一人で登校するの？」
男子は一人で行動する人が多いもんね。遥だって、きっとそうするんだ。
「いや。おまえの面倒みるだけで、俺は手一杯だからな」
ええっ？　それって……。これから毎朝、遥と一緒に登校するってこと？　このわたしが？　な、な、なんで？
今日は入学式だから特別だったんじゃないの？　でも、わたしたちって、その、付き合ってるんだったっけ？　その辺りがまだはっきりしないんだけど、そういうことなんだろうね。きっと。
「あっ、でも誤解するなよ。おまえとのことは学校でみんなにばら

すつもりないからな。人前でベタベタするのって、見てらんねえだろ？」
　みんなが見てなくても、一度もベタベタされたことないですけど？　これで付き合ってるって、相当わかりにくいカップルだと思うんだけどね、わたしたちって。とにかく、平穏無事に学校生活が送れればそれでいいと思ってる。ラブラブでなくても別に構わない。わたしだって、遥とのことをべらべらしゃべる気はないよ。
「う、うん。じゃあ、わたしたちのこと、藤村にもまだ内緒？」
「う……ん。そのうち俺が言う。あいつ、夢美に告白した後、相当落ち込んでいたからな。これみよがしに、俺たちのことひけらかすわけにはいかないだろ？」
「そうだね。……夢ちゃんさあ、まだ遥のこと、その、好きなんじゃないかな」
　様子を窺いながら、それとなく訊ねてみる。
「だから？」
　ひえっ！　遥に睨まれた。
「いえ、なんでもありません……」
　そんなに、怖い顔しなくてもいいじゃない。遥が藤村のことを心配するように、わたしだって夢美のことが心配なんだ。
　去年の文化祭の後、宣言どおり夢美に告白した藤村は、シナリオどおり、見事にフラれた。受験が終わるまでは何も考えられないからと、やんわりと夢美に断られたらしい。
　その後の藤村の落ち込みようったらなかった。受験にも支障がでるんじゃないかってくらいボロボロだった。ただ、一学期の内申点が遥に負けず劣らず立派なものだったおかげで、今、こうしてわたしたちと一緒の高校に通えているというわけ。
　とにかく、わたしと藤村が、若きクラス担任、梅谷彩加（うめたにさやか）先生の肝をこれでもかというくらい冷やしたとんでもない生徒だったのは、決して言い間違いではない正真正銘の事実だった。

隣を歩く遥は、まだ成長が止まらない。かなり大き目のサイズの制服を注文したせいか、だぶついた感じは否めないが、黒の詰襟の制服姿が新鮮で、とても似合っている。

首元を緩め、少し気崩しているのもサマになってるんだな。くーっ。かっこいいかも。胸のキュンがなかなか収まらない。

あまりジロジロ見ると怒られるから、ちらっと盗み見程度しか出来ないのが非常に残念だ。朝おばあちゃんに、きちんと首元を締めなさいと叱られていたけど、今どきそこまでビシッとしてる人なんてどこにもいない。

髪は染めていない。名門バスケ部に入部するつもりらしいから、染めるのは絶対に無理なんだって。わたしは春休みに、ちょっとだけ染めてみた。言わないとわからないくらいだけどね。母はいいんじゃないと言ってくれたけど、父はうちにはそんな不良娘はいないと、わけのわからないことを言って怒り出し、ただいま少し、親子関係にひびが入っている最中だ。

遥は、はあ？　と言ったきりで、あくまでも無関心。

「とても似合ってる、かわいいよ……」なんてセリフは彼の口からは一生聞けそうに無い。いい加減、ロマンチックな夢を描くのはあきらめないといけないのかな。

そう、遥は最近ますます無愛想になってきたのだ。中三の時のクラスでは、相変わらず、ひょうきん者でとおっているんだけど、家に帰るとわたしには超が付くほど冷たくて、愛想のかけらも見せない。釣った魚にエサをやらないどころか、干物にでもされそうな勢いだ。

小説に出てくるような、恋に芽生えた幼馴染同士の甘い日常なんてものは、どこにも見当たらない。もちろん中学校でも誰にもバレなかったし、親も当然気付いてない。

自由に振舞えるのはありがたいけど、やっぱり、少し寂しいな。

「……くーーん！」
あれ？　今、誰かの声が聞こえたような気がしたけど。気のせい？
「……うのくーーん、くらしろさーーんっ！」
今、わたしの名前も呼ばなかった？　おもわず隣の遥を窺い見る。彼も聞こえたのか、怪訝そうにわたしを見返す。
「あれは誰だ？」
駅の方に目をやると、そこにはわたしと同じ制服を着た元クラスメイトが手を振ってこっちを見ていた。白石……史絵。な、なんで、あんたがそこにいるの？　待ち合わせなんかしてないよね？
「おまえがあいつを誘ったのか？」
遥の声の怒り度合いが増す。
「ち、ちがうよ！　誘ってなんかいないよ。なんでいるの？　白石さん」
「んなもん、俺も知るか！　じゃあ、俺、先に行ってるから。後で学校でな……」
そう言って片手を上げると、目の前に近付く白石史絵を軽く無視して、そのまま改札に駆け込んで行った。
「お、おはよ、白石さん……」

21．あんまり、そういうこと……するな

「お、おはよ、白石さん……」
「おはよう、蔵城さん。あら？　堂野君行っちゃったのかしら……。どうしてあんなに急いでるの？　彼」
どうしてって言われても。わたしだってよくわからない。でもね、多分、白石さんにかかわりたくなかっただけだと思うけれど。
「あなたたち二人そろって仲良く登校かと思ったけど、そうじゃなかったのね。まあいいわ。ところで蔵城さん、これからよろしくね」
「えっ？　う、うん」
改まってこういうことを言われると、なんとなく後が怖い。絶対、何か企んでいるに違いない。
「中学の時の同じクラスの女子は、私とあなたしか西山第一に行かないんだから、これから助け合っていきましょうね」
助け合うって、あなた。別に何も助け合うことなんてないと思うんだけど……。それとも、高校って一人でいては危ないところなの？　大変なところなんだろうか……。でもそんなこと、これっぽっちも聞いたこと無い。
「ええ。まあ」
わたしはあいまいに頷く。
「ということで、今日からあなたと私は親友ね。よそよそしい呼び方は辞めにしない？」
「はあ？」
ど、どういうこと？　なんで一緒の高校に行くってだけで、親友にならなくちゃならないんだろう。それが言いたくて、今日待ち伏せしていたのだろうか。
「もう！　あなたって、ほんとに鈍いわね。私の気持ち知ってるでしょ？　あなたのご親戚の堂野遥。絶対に私の彼氏にしたいから、手伝って欲しいのよ。だから私たちは親友にならなくちゃだめなの、

わかった？」
なんてことだ。そんなあからさまに宣言されても、遥は、その……。わたしのカレなんだけど。
「あなたのこと、みんなみたいに、ひいらって呼んでいい？」
「うん、別にいいけど……」
「そう？　じゃあ、決まりね。私のことは何て呼んでくれるの？」
「え？　えーーと、白石さん……じゃ、だめ？」
「やだ、だめに決まってるでしょ。そうね……。堂野君に印象付けるためにもフミとかふみえちゃんとか、フミリンとか……ってもう！　私にそんなこと言わせないで。あなた、考えなさいよ！」
は、はい！　って、なんでわたしがそんなこと考えないといけないのよ！　だんだん腹が立ってきた。うっとおしいぞ、白石史絵！
呼び名なんてものは自然に付くものだから、無理やり考えてもうまくいかないに決まってる。そういえば彼女ってクラスでなんて呼ばれてたっけ？　一部の女子にしらいしって呼び捨てにされてたのは聞いたことある。それ以外は……ない。困ったなあ。何かいい呼び方ないかな……。これって結局、彼女の思う壺だよね。必死になって考えてるわたしって……。
「じゃあ、フミちゃんで」
こうなったら、もうなんでもいいや。ありきたりだけど、これでどうかな。
「いいわ。ならこれから頻繁にそう呼んでね。特にお家に帰ってから彼の前では何度も私の名前を連呼してちょうだい。頼んだわよ」
うわーーっ。大変だ。そんなこと頼まれても、白石さんのことなんか何も話すことないんだけどな。それにしても、フミちゃんか……。まずはこの呼び方に慣れないとね。

でもね、白石史絵って、意外と美人なんだ。それが、ついこの間までは銀縁のいかにも賢そうに見えるメガネをかけていて、いや、実際秀才なんだけど、真面目一辺倒でクラスメイト達も引き気味の

女生徒だった。
　ところが、春休みの間にコンタクトにしたらしくて、先日の入学説明会の時、彼女の隠されていた美しさに驚かされたっていう経緯がある。高校デビューナンバーワンのトロフィーは、間違いなく彼女の手に収まると思われるほど、その変貌振りは著しい。
　セミロングのゆるくウェーブのかかったヘアスタイルは思わず触れてみたくなるほど柔らかそうでツヤツヤしている。おまけに口元には薄く引かれたリップが濡れてきらめき、中三の時の面影などどこにも残っていないほど人目を引く美しさだ。
　もし、遥にまだプロポーズされてなかったら、絶対にやばかった。わたしには、一ミリだって勝ち目はないもの。

　学校に着くと、体育館前の掲示板にクラス分けが発表されていた。なんと、そこには遥の名前が。そして藤村も。そしてもう一人探したけれど……彼女の名前はなかった。ああ、良かった。白石史絵はわたし達とは棟も違う離れたクラスになっていた。取りあえず第一関門突破ということだ。

　その日の夜、遥の部屋に行って、電車の中でのことを全て話した。自分だけが心に留めておくにはちょっと気がめいる内容だったしね。遥はひとつ大きくため息をつくと、わたしを見て、「ほっとけ」と一言放つだけ。遥はそれでいいのかもしれないけど、わたしはそうはいかない。これから彼女にいろいろ迫られるのは間違いないし、遥との関係も嘘を付き通さなくてはいけない。そんなの無理だ。このままだと後々厄介なことに巻き込まれそうなのは目に見えている。
「ねえ、白石……じゃなくて、フミちゃんには、わたしたちが付き合ってるって言ってもいいでしょ？」
　あれれ？　わたしったら、何を律儀にフミちゃんなんて言ってるんだろう。別に遥にアピールする必要はないのにね。
「……」

当然遥は何も答えず、英語のテキストを眺めたまま微動だにしない。こいつ、完全無視を決め込むつもりだな。負けてなるものかと、まだ遥の背中に訴え続ける。
「ねえ、わたしの身にもなってよ。これからずっと、遥のこと訊かれるんだよ？」
遥の背中に少しだけ近付いてみたけど。
「……」
やっぱり同じ反応しかなくて。わたしは少し身を屈めて、遥の真後ろから彼の耳元に口を寄せる。
「わたしが苦しんでても……平気なの？」
おお！　ちょっと体が動いた。好感触。いいぞ、柊。その調子でがんがんいけ。まるで小さい子供が内緒話をするみたいに、ヒソヒソと、それでいて感情をたっぷり込めて小声で気持ちを伝える。
「嘘ついて、人を傷つけるのは嫌なのよ。ねえ、遥……。いいでしょ……」
「……ったく、うるせえなあー。わかったよ。おまえの好きにしろ！」
「いいの？　いいんだね。ありがとう、遥！　大好きだよ、遥っ！」
わたしはあまりの嬉しさに、何も考えずに椅子に座っている遥に後ろから抱きついてしまった。ほんとうに何も深い意味は無く、いつも夢美や希美香に抱きつくのと同じ感覚で。
すると突然立ち上がって前を向いた遥に今度は逆に抱きしめられる形になって。
「おまえってヤツは……。今ここに誰かが入ってきたら、どうする？　あんまり、そういうこと……するな」
遥の艶のあるバリトンが耳元をくすぐる。彼の吐息が首筋に……かかった。
その時初めて自分のとった突飛な行動に気付いたわたしは、遥の

顔をまともに見ることなど出来るはずもなく、彼の腕をすり抜けると猛スピードで自分の部屋に逃げ帰った。

後にも先にも、プロポーズされてから初めて遥に抱きしめられた。ふわっと優しく、夢にまで見たその腕に包み込まれたのだ。わたしが先に抱きついたことなど、この際、記憶の向こう側にでも追いやって、遥に抱きしめられたことだけを憶えておくことにしよう。

その晩わたしは布団の中で、遥の温かい胸のぬくもりや耳のそばでささやいた声の感触を何度も思い出すあまり、深い眠りにつくことは不可能だった。

ちょっとだけ、それもほんのわずかの間、抱きしめられただけでこの心拍数。もしキスなんかされた日には……。きっとわたしは瞬時に死んでしまうだろうと本気でそう思った。

22．同情は禁物

小鳥の鳴き声が騒がしい春の朝。明け方、少しだけうとうとしたのだろうか？　睡眠不足を物語る頭痛をこめかみに感じながらも、布団からどうにか起き出した。

台所からは味噌汁と焼き魚の匂いがほんわり漂ってくる。今、何時だろう？　もたもたしていると遥が迎えに来てしまう。今朝はなんとしても一人で学校に行かなくちゃならない。夕べの遥のぬくもりがまだわたしの身体から消え去らない以上、彼をまともに見ることなんてできないし、この上なく気まずい雰囲気に直面するのは避けられそうにないと思ったから。

わたしは素早く着替えると、朝食をがっと口に詰め込み、母の作ってくれた弁当を持って家を出ようとした……のだが……。

なぜかテーブルには大きめの弁当がもうひとつ。そうだった……。これは遥の弁当だった。彼の母親は、今、出産のため入院中だ。帝王切開での出産だったので、退院までまだ一週間かかる。その後もしばらくは、わたしの母が遥の弁当を作る予定になっているのを、たった今思い出したのだ。

このまま知らないフリをして早く家を出ないと、わたしの計画は見事に打ち砕かれてしまうだろう。母が洗濯物を干しに裏庭に行った隙に、小走りで玄関に向った……まではよかった。

「い、痛っ！　……あ、アレ？」

おもいっきり何かを踏んづけて、おまけにぶつかって。見上げた先には……。今、一番会いたくない人。そう、遥がそこに、ぬっと立っていたのだ。

「痛いなあ。……謝れよ」

「は、は、はるか！　ご、ごめんなさい！」

わたしは間髪射れずに謝る。長年の経験上、これが一番解決が早

い。ところが遥がいつにも増してギロリとわたしを睨む。もしかして、かなり怒ってる？
「おまえの体重で踏まれたら、俺の足、折れてしまうだろ？　……気をつけてくれよ」
そんなあ。いくらなんでも折れるなんて大袈裟だよ。だってわたし、遥より、多分十キロ以上軽いはずなんだけど。でもここは逆らわない方が身のため。
「は、はい」
気持ちを抑えて、しおらしく頷く。
「……えらい素直だな？」
そりゃあそうですとも。今朝は特別ですから。だから……。そんな目でじっとわたしを見ないで。ずっと怒ったままでいいから。ね？　でないと、夕べのこといろいろと思い出すじゃない。朝っぱらからこんなにドキドキしてたんじゃ、身が持たないよ。
それにしても遥は、この状況で何とも思わないのかしら？　そうだよね。結局のところわたしばっかりが遥のことが好きなんだ。でなきゃ、そんなに落ち着いていられるはずないよね。
「柊、俺の弁当は？」
遥が、突然訊ねる。
「あっ……忘れてた。ごめんごめん。ちょっと待っててね」
さっき見て見ぬ振りした罰がこれだったのだ。わたしは大急ぎで身を翻し、台所にもどって遥の弁当を手に取った。そして、台所の入り口横の壁にもたれている遥に「はい、これ」と言って、顔も見ずに弁当を差し出した。そして玄関に向かおうとした……が。
「おまえ。俺の弁当、置いたまま出て行こうとしたんだろ？　一人で学校に行くつもりだったのか？」
遥に腕を掴まれ、凄まれる。
「い、い、いや、ちがうって。本当に忘れただけなんだってば。今から、その……。誘いに行くつもりだったんだよ、遥のこと」
ダメだ。やっぱり目が合わせられない。わたしったらおもいっき

り挙動不審者になってるよ。
「ふうーん。……なら、そういうことにしておいてやろう」
そう言って、ようやくわたしの腕を離してくれる。
「さ。早く靴履けよ。で、おまえ。なんで制服なわけ？　今日から私服にするって言ってなかったか？」
言った。確かに言ったけど……。だって仕方ないじゃない。夕べ遥に抱きしめられた後、何も考えられなくて、今日の服の準備なんて出来る状態じゃなかったんだもん。起きてからも慌ててたし、ハンガーに吊ってある制服を着るのが一番手っ取り早かったってわけだからね。
遥は薄手のインナーにシャツをはおって、だっぷりしたストリート系のパンツスタイルだ。髪も少しスタイリングしてある。まるで、最近読んだ漫画の主人公の女の子が付き合っているカレシが、そのまま抜け出してきたような感じだ。
足の長い遥は、ちょとずらしたパンツがバランスよくみえる。その横に並んで歩くのがこのわたしじゃあ、遥が気の毒な気もしないでもない。

わたしたちは特に何を話すでもなく、黙々と靴音だけを響かせて坂を下りて行った。ふと視線を感じて横を見ると、ちょうど遥と目が合う。うわっ、どうしよう。と思ったその時だった。
なぜか真っ赤な顔をしている遥が、突如わたしから目を逸らした。今度は明らかに遥が挙動不審者になっている。そんなはずないと、もう一度彼を覗き込もうとすると……。
「そ、そんなに……見るな。ちょ、ちょっとだけ、夕べのこと、その……思い出していただけだ。いいか、柊。今度あんなことしてみろ。俺、もう、自信ないから。覚悟しておけよ……」
そうですか、自信ないですか……。って、そ、それって。つまり、そういうことだよね？　抱きしめるだけでは終わらないって……こと。覚悟しなきゃならないんだ。

遥ったら、朝っぱらからなんでこんなに恥ずかしいこと面と向かって言うんだろう。わたしもきっと、ゆでだこより真っ赤になっているに違いないよね。わたし達、今から電車に乗って学校に行くんだよ。とてもじゃないけど、こんな状態で二人並んでプラットホームに立てないよ。どう見ても怪しすぎるもの。

でも、ちょっと嬉しいかも。やっぱり遥も心穏やかでいられないんだ。少しはこのわたしにドキドキしてくれたってことだよね？　わたし達って、やっぱ、両思いなのかな？　遥の本当の気持ちが早く知りたい。

駅が見えたとたん突風が吹いて、制服のプリーツスカートが砂埃と共に舞い上がった。裾を押さえて、道の途中で立ち止まる。すると、その先には……。白石史絵が、チェックのスカートにポロシャツ、紺のハイソックスというさわやか女子高生スタイルで、風に乱れた髪を手で押さえながら立っていた。また待ち伏せ？

彼女を見たとたんさっきまであれだけ熱を持っていたわたしの頬は、まるで巨大冷凍庫に放り込まれたかのように、いっきに血の気が無くなり、思わず身震いしてしまうほど身体が冷え切ってしまった。遥といえば、昨日と同じように一人改札に駆け込んで行く。

今朝ほど遥と入れ替わりたいと思った日はない。だって今日は彼女に本当のことを告げようと思ってるから。遥はわたしカレなのだと。面倒なことは、さっさと済ませた方がいい。彼女にこれ以上期待を持たせるのはよくない。

「ひいら、おはよう！　堂野君ったら、また行っちゃったわね。ねえ。ちゃんと私の名前、彼の前で何度も呼んでくれた？　ちっとも効果がないみたいじゃない」

「う、うん。実は、そのことなんだけど……。今日、学校が終わったらフミちゃんとどこかで会えないかな？」

「どこかで？　いったい何なの？」

あ、あれ？　わたし、結構深刻な顔してそう言ったはずなんだけ

どなあ。白石さんは、何を勘違いしたのか、瞳を輝かせて話に食らい付いてきてしまった。
「い、いや。そうじゃなくて。そ、その……。言っておかなきゃならない大事な話があるんだ、フミちゃんに」
「大事な話？　もしかして堂野君のこと？　なら決まりね。ひいらの家に行かせて。それなら、オッケーよ。ふふふっ。ひいらと親友になれてホント良かった。彼とクラスが離れちゃったから、なんとしてでも、御近付きになっておかないとね」
　白石さんの瞳がキラキラと輝きを増す。これはマズイよ。どうしよう。ただし、わたしの家なら、話がややこしくなった時、遥に助けてもらうことも出来る。幸い母は、畑仕事か綾子おばさんのお見舞いに行ってるだろうから、もし彼女と言い合いになったとしても咎められる心配はない。
　よし！　そうと決まればいざ出陣だ！　今日こそきちんと決着をつけるぞ！　わたしは急に全身に勇気がみなぎり、武者震いをして決戦に挑む。
「ねえ、ひいら？　私のこの服、変じゃない？　あなたの家に行く前に着替えた方がいいかな？　髪だって、巻きなおした方がいい？　だって、堂野君に会うかもしれないでしょ？　ああ。これぞ夢にまで見たあこがれの女子高生ライフだわ」
　こんなにハイテンションな白石史絵を見たの、初めてだ。このあと起こることを思えばちょっとかわいそうかも。でも同情は禁物。ここは初志貫徹あるのみ。傷口は浅い内に処置しないとね。
　ちっともわたしの本心など理解してくれそうにない彼女に若干いら立ちながらも、恋をする乙女は誰でも一途になるものなんだなどと、感慨深くなったりもした。それにしても遥って、本当に罪作りな男だよ。全く……。

23．あきらめないから！

心地よい風が吹きぬける四月の昼下がり、午後の授業を終えてわたしと白石史絵は、連れ立って坂の上のわが家を目指した。道端にひっそりと咲く空色のオオイヌノフグリも、赤紫の小さな花をかわいく揺らすホトケノザも、ただいつものようにそこに、静かに咲いているのだ。これから起こるであろう、同じ人物を愛する二人の行く末を暗示させるような不安など微塵も感じさせること無く……。

カラスノエンドウが群をなして絡み合う一角を過ぎると、遥の家のとんがり屋根が見えてくる。庭先のビオラがまるで何百人ものこどもの笑顔のようにそろってこっちを向いて、その上を何も知らない無数のモンシロチョウがひらひらと舞っていた。

「はあーーっ。結構、きついわね。ひいらは毎日ここの坂を上り下りしてるの？」

肩で息をしながら白石史絵は、西に傾き始めた太陽の光を左頬に受け、眩しそうに目を細める。

「そうだよ。今はまだいいけど、夏はもっと大変なんだ」

遥の家を過ぎて、家庭菜園のある畑のところでおばあちゃんに呼び止められた。

「柊、おかえり。おや、お友達かい？」

夏野菜の苗を植える準備に忙しいおばあちゃんは、日中は畑に出ていることが多い。

「おばあちゃん、ただいま！　高校の友達の白石史絵さんだよ。母さんは？　いる？」

「いいや。病院からまだ戻ってないみたいだけど。遥は、遅くなるのかい？」

「ちょっとだけね。部活の体験入部だって」

不思議そうな顔をしてわたしとおばあちゃんの会話を聞いていた白石史絵が、誰？　と小さく尋ねる。

「おばあちゃん。堂野の」
それを聞いたとたん白石史絵は満面の笑みを浮かべて、こんにちは！　とおばあちゃんに向っておもいっきり愛想よくあいさつをした。

わたしの部屋の真ん中にある小さなテーブルには紅茶とクッキーが並んでいて、それを間にはさんで白石史絵がわたしと向かい合うようにして腰を下ろしていた。
「ねえ、大事な話って何？　もったいぶらないで、早く教えてよ。堂野君のこと？　何か、新情報でもあるの？」
白石史絵はカールのとれかかった毛先を指に巻きつけながら、ぬっと身を乗り出す。瞳をキラキラと輝かせながら。そんなにも、遥のことが知りたいんだ……。白石さんの気持ちはわかるけど。
でもこの場での偽善的な仏心は、かえって彼女の気持ちをもてあそぶことにもなりかねない。わたしは意を決して口を開いた。
「あのね、堂野は……。その、堂野遥は……」
言わなきゃ。ちゃんとはっきりと言わなきゃだめだよ。遥を好きだと気付く前のわたしなら、これくらいのこと、すぐにでも言えたはず。なのにどうして？　これが恋を知るということなの？　目の前の無邪気に振舞う彼女を傷つけるのが怖いのだ。
「何？　いったいどうしたの？　……もしかして、言いにくいことなのかしら」
白石史絵の笑顔が消えた。もう後には引けない。
「う、うん。あのね、堂野はね、その……付き合ってるんだ」
「付き合ってる？　堂野君が？　……誰と？」
「わたし……と」
「……」
目を見開いたまま何も言わず、じっと固まっている目の前の白石史絵は、急に手を伸ばしたかと思うと紅茶の入ったカップを取り、ごくごくといっきに飲み干した。そして、下を向いたまま肩を震わ

せている。泣いてるの？　そんなの困るよ。わたしが泣かしたことになるんだろうか。
「う、うそ。……うそよ。そんなはずないわ。あなたたちって親戚同士でしょ？　幼馴染なんでしょ？　だったら、恋愛感情なんて無縁のはずよ。だって、中学の時もけんかばかりしてたじゃない……。そうだ！　もしかしたらひいら。あなた堂野君に片思いしてるんじゃないの？　で、わたしに彼を取られたくなくてそんな嘘言ってるんだわ。ね、そうなんでしょ？」
　白石史絵が、必死になって食い下がってくる。わたしだって負けてはいられない。
「そうじゃない。そうじゃないんだってば。最初は片思いだったかもしれないけど今は違う……と思う。堂野は、いや、遥はわたしにとって、とても大切な人だし、遥だって、わたしを……」
「じゃあ、証明してよ。今すぐ証明して！　手紙とか、指輪とか……。恋人同士だっていう何か証拠があるでしょ！」
　手紙とか、指輪？　……そ、そんなあ。どうしよう。何もない。証明できるものなんて何もないよ。それに、彼女には言えないけど、正式に付き合ってくれともましてや好きだともまだ言われたことがない。うわ……。ほんとに何もないよ。絶体絶命、人生最大のピンチかもしれない。
「ご、ごめん。何もないんだ、証明できるものなんて。お互いが思い合ってるだけじゃあ、だめなの？」
「ええ、だめよ。何も証拠がないんなら、私、あきらめないわ。ひいらの思い過ごしに決まってる。あなたって、ほんとうにひどい人ね。優しそうな顔しちゃって、心の中は悪魔が潜んでるのよ。堂野君がかわいそう。こんな人がいつもそばにいるなんて……」
　な、な、なんだって？　わたしが悪魔だって？　言わせておけば、こいつめ……！　でも、落ち着け。落ち着くんだ。ここで言い合いになっても売り言葉に買い言葉。どこまでも平行線。ああ……遥。早く帰ってきて。白石史絵、すごすぎるよ。最強だよ。

「もう明日からあんたとなんか一緒に学校に行ってあげないから。ひいらも彼にベタベタくっついてるんじゃないわよ。彼だって迷惑だからいつも一人で改札に走って行くんだわ。いい、わかった？それじゃあ、さようならっ！」

言いたいこと言って、もう思い残すこともないのか、白石史絵はすくっと立ち上がると、大股でつかつかと玄関に向かった。ローファーをはいてハイソックスをクイクイと引っ張り上げ、風を切るようにして外に出て行く。

とても見送れるような状況じゃない。だって彼女の背中には怒りのオーラがとげとげしく取り巻いているんだもの。

明日から一緒に学校に行かなくてもいいのはありがたいが、さっきのはまるで戦線布告。わたしはガックリと肩を落として、部屋の窓から遠ざかる白石史絵を呆然と見ていた。

すると彼女が突然立ち止まる。わたしは目を凝らしてその先をよく見た。

遥だ。遥が帰ってきたのだ。

わたしはまだ制服のままだったことも忘れて、玄関のサンダルを突っかけると、過去最高タイムともいえるほどの猛スピードで二人のところに走って行った。もちろん、スカートが跳ねてもおかまいなしに。

「ひいらぎ……」

何事か、とでも言うようにびっくりして、立ち止まっている遥。そして、言葉を失くして立ちすくんでいる白石史絵と、突然猛スピードで走ってきたわたし。何があったかなんて説明しなくても遥にはわかるはずだ。

「堂野……君。あ、あの……。今、ひいらから聞いたんだけど……あなたたちのこと」

「ああ……。悪いけど、多分柊の言ったとおりだ。じゃあ……」

ええ？　それだけ？　ぽかんと口を開けたままの白石史絵をそこに残し、何事も無かったかのように家に帰ろうとする遥。もちろん

わたしだって呆気(あっけ)にとられてその場から動けない。
「ひいらぎ、いつまでそこにいる気だ。帰るぞ」
一度帰りかけた遥がまた引き返してわたしの手を取ると、強引に引いて家に向おうとする。彼女……見てるよ。これってもしかして、口で言うより態度で示す作戦？　百聞は一見に如(し)かず、とか？
「ひいら、私あきらめないから！　あなたになんか負けないから……」
すれ違いざまに彼女が言い残した言葉は、とても強気なものだった。わたしがもう一度振り返った時には、彼女はもうそこにはいなかった。坂を駆け下りていく後姿が見る見る小さくなっていく。
少し残酷だったかもしれない。明日から学校で、どんな顔をして彼女と会えばいいんだろ。わたしに負けないって言ってたよね。勝つとか負けるとか、そんな悲しいこと言わないでよ。

遥の家の玄関に入ったとたん、わたしは彼に抱きしめられていた。自分でも気付かないうちに涙をいっぱいこぼしながら。怖かった。白石史絵が本当に怖かった。彼女を傷つけたことにも胸が痛んだ。わたしは遥の胸に顔をうずめてしばらくの間、泣きじゃくっていた。
「ちゃんと、言ったんだろ？」
うん……。とても声になんかならないよ。遥の胸元でこくりと頷くことしか出来ない。
「おまえがあいつに俺達のこと言うって決めたんだろ？　だったらもう泣くな。あいつのことだから、明日になったらケロっとしてるさ。あんなやつ、放っておけばいい。あいつは俺のことより、おまえに対してライバル心があるだけだろ？　勉強も何もかも誰にも負けたくないんだよ。な？」
遥はそう言うけど、わたしは同じ女の子だから彼女の気持ちが痛いほどよくわかる。ライバル心だけではないことが……。彼女だって、わたしに負けないくらい遥のことが好きなんだ。
でもね、今すごく幸せな気分なんだ。小さい頃悲しいことがあっ

て母に慰められた時とはまた違った安心感っていうのか、もうわたしは一人じゃないっていう、確固たる気持ちっていうのかな？　遥がこうやって支えてくれるのなら、これから起こるどんな障害だって乗り越えられそうな気がする。

ようやく涙が止まって、平常心が戻ってくると、やっぱり夕べと一緒でこの状況が恥ずかしくてたまらなくなる。ずっと背中を撫でていてくれた遥の手の動きが止まり、見上げた格好のわたしと目が合った。

やだ。見詰め合ってるよ。これって……相当。や、ヤバイ状況なのかもしれないよね。ど、どうしよう。どうすればいい？　やっぱり目をつぶるべき？　心なしか遥の顔が近付いて……。

「さっ、なんかうまいもんでも食って、病院に行くか。おまえも赤ん坊見に行くだろ？　着替えて来いよ。それにしても、おまえがそこまで制服好きだったとはな……」

……えっ？　そういうこと……ですか。うわーーっ。恥ずかしいよ。なんてことだろう。わたしって早合点しすぎだったってわけだよね。

目を閉じかけたこと、気付かれたかな？　いかにもキスして下さいって感じで、遥も驚いたに違いないよね？　でも、遥だってそのつもりだったんじゃ……。

まだまだわたし達の関係は始まったばかり。これから少しずつ分かり合っていけばいいんだよね。急がずにゆっくりと。

次の日、白石史絵になぜか全く学校で出会わなかった。その次の日も、そして一週間たった今も。おかしいなと思っていると、電車の同じ車両にどこかで見たことある人が……いるのだ。

銀縁メガネに、肩までのストレートヘア。昔のままの白石史絵が

……そこにいた。あの、ツヤツヤのセミロングはいったいどこへ？
「……ひいら。久しぶりね。堂野君の趣味って意外と地味なのね。これならあなたといい勝負でしょ。わたし、絶対にあきらめないから……」
た、た、たしかに、その日の白石史絵はわたしの雰囲気に似てた。でもね、白石さん。あなたの選択、間違ってますから。前の方が絶対にいいよ！　あんなにきれいだったのに。なんで辞めちゃったの？
声を大にしてそう言いたかったけど、もうこれ以上彼女にかかわるのは辞めた方がいいと学習したわたしは、返事もそこそこに、隣の車両に逃げるようにさっさと移ったのだった。

２４．とんだ受験勉強

高校生活もあとわずか。中学校の三年間よりもそれはあっという間に過ぎていった。今再び、受験勉強一色の毎日を送っている。一学期まではのん気そうにしていたクラスの面々も、今ではすっかり真面目モード全開で、ピリピリと張り詰めた空気が教室中に漂う。

わたしはどうにかぎりぎりの成績でこの高校にもぐりこんだらしく、入学後初の全国模試の散々たる結果がご丁寧にそれを証明してくれたのを昨日のことのように思い出す。

学年人数四百人中、校内順位三百六十五位をゲットしたわたしは、まだ後ろに三十五人いるというのを心の支えに、なんとか今まで学校にしがみついてきたようなものだった。

ところが最近では努力のかいあって、希望の大学の合格判定はようやくBをもらえるようにまでなったのだ。これで携帯電話も買ってもらえる。

もうクラスの半数以上の人たちが持っている携帯電話は、女子高生の必須アイテムになりつつある。遥にも一緒に持つように勧めているのだけどなかなか首を縦に振らない。彼はパソコンのメールで充分事足りるらしいのだ。

「ねえねえ遥、聞いてよ。Bよ！　B判定！　最初担任に絶対無理って言われてたけど、どう？　わたしってすごいでしょ？　わたしだってやれば出来るんだから」

模試のデータをこたつの上に載せて、遥に自慢してみる。我関せずを決め込んだ遥は、誰のお蔭だと思ってる？　と言わんばかりの横柄な視線でチラリとわたしを見る。そしてフッと小さく鼻で笑ってまたすぐに英語の長文読解の問題を目で追い始める。

わたしの希望する大学は東京にある結構……いやかなり名の知れ

た私立大学だ。ここの文学部からは各種の文芸賞を受賞する先輩が大勢名を連ねる。別に小説家になろうとは思わないけれど、図書館司書の資格と教員の免許を取るのを目標に、あこがれの東京暮らしを満喫しながら青春を謳歌する……と夢は大きく膨らんでる……なんてね。

　というのは表向きの建て前論。実はわたしの想い人である目の前の遥も、この大学を狙っているのだ。つまりわたしがこの大学を目指す理由はただひとつ。彼と離れたくない……。と、まあ、この上なく不純な動機だったりする。

　ただし彼の希望する学部は政治経済学部。文学部よりもずっと偏差値も高くて政界や財界に名を残す卒業生をざくざく輩出するようなところ。当然入試の倍率も高く、A判定でも気を抜くことは出来ないと今まで以上に勉強に力が入っている。B判定ごときで模試結果を自慢するわたしを尻目に、遥は黙々と勉強を続けているのだ。その鋼鉄のような強い意志と集中力はどこから来るのか？　その謎はいまだに解明されていない。

　どうせわたしの成績アップの理由の半分、いや九割は遥のお蔭だというのは重々わかっている。でも努力したのはわたし。自分の部屋に帰ってからも夜中まで毎晩がんばったんだから。少しはその辺も認めて欲しいんだけどな。

　高校入試の時とは全く違うやり方だけど、遥直伝の必殺受験勉強法は、とてつもなく効力を発揮した。まず過去の入試問題を夏休みにおおまかにやって自分の不得意分野を探し、他の問題集でその苦手部分を徹底的に何度も繰り返し解く。答えがすらすら暗唱できるくらいまで同じ問題に取り組むのだ。ある意味とてもシンプル。でもこれが確実に点数アップに繋がったのだから返す言葉もない。

　入試問題ほど洗練された問題はない！　というのが彼の持論で、過去の出題問題を分析できた時点で七割は完成らしい。あとの三割は問題集を繰り返すことと重要事項の暗記でカバーするという、か

なり危険度も高いかいつまんだやり方だけれど、わたしには合っていたみたいだ。
おばあちゃんの部屋の隅にはカラーボックスが二つ並べられ、そこにわたしたちの受験用参考書、問題集がぎっしり詰まっている。高校入試の時とは比べ物にならないほどのテキスト量の多さに、おばあちゃんがたまりかねて備えてくれたのだ。
うちの母は、わたしが西山第一高校に入学できたのは百パーセント遥のお蔭だと思っている。あわよくば大学入試も……と二匹目のドジョウを狙っている母は、この勉強会をことのほか推奨してくれている。これがわたしたちの日々のデートみたいなものだから、母の遥への信頼度が高まれば高まるほど、彼と一緒にいられる時間が増える利点はあるのだけど……。
中学三年の時に遥にプローポーズされ、一応彼とは結婚をも約束した仲では……ある。でも高校に入ってからも別段二人の関係に進展がみられるわけでもなく、未だに恋人らしい言葉さえ掛けてもらったこともない。
夏休みに大学のオープンキャンパスがあって、東京まで一緒に行った時はわくわくしたけれど、遥のおじいさんの家に泊まったので、結局心ときめくような状況は何も起こらなかった。でも最終日の半日は渋谷や青山あたりを手をつないで結構ラブラブモードで歩いたのは二人だけの思い出。甘い秘密だ……とわたしは思ってる。
学校ではもちろんのこと、家でも世間一般の恋人同士には程遠いわたしたち。おばあちゃんが席を外した時に、たま～にそばに寄ってきて、わたしの膝に頭を載せてくることがあるくらいで、まだキスもしたことない。何度かニアミスはあったけど、どうもタイミングが悪くて、それ以上の瞬間は訪れないんだよね。
わたしと遥のことを唯一知っている高校の友人にそれを言ったら、マジでどん引きされた。信じられないって。おまけに遥のことを男としてどうよと異常者扱いまでされて、それ以来この手の話は彼女とはしなくなった。

わたしだって正直、不安だ。あの時の結婚の約束なんて実はもう忘れてしまっているのではないかと、ふとそう思ったりもする。わたしがB判定をもらっても喜んでくれるでもなし、返事すらなしで無視され続けているこの悲しいまでの状況。

そんなわたしたちの様子を目の当たりにしているおばあちゃんは、ことあるごとに仲良くしなさいよと、たしなめることを忘れない。わたしがちょっと問題の解き方を間違えると、バカだのアホだの容赦なく罵声をあびせる遥に、幾度となくおばあちゃんの鉄拳が飛ぶ。女の子に向かってそんなこと言うもんじゃないと厳しく叱ってわたしをかばってくれるのだけれど、昔から慣れっこになっているせいかもう何とも思わなくなっている。習慣って恐ろしい。

遥に相手にされないわたしを不憫に思ったのか、編み物の手を止めたおばあちゃんが、にっこり笑って模試データを見てくれる。

「どれどれ……。おや、成績が上がったのかい？　よくがんばったね、柊。次はきっとAになるよ。でも遥も柊も東京の大学に行ってしまうなんてねえ……。何度も言うけど、こっちの大学じゃだめなのかい？　何も二人揃ってここを出て行かなくても……」

おばあちゃんはわたし達二人のどちらを見るでもなく、独り言のように話しかけてくる。寂しいのだろうか？　すると、今まで話に加わらなかった遥が突然顔をあげて、その重い口を開いた。

「東京に行くのは四年間だけだよ、ばあちゃん。就職はこっちでするつもりだし、将来は家も裏山もちゃんと管理するから心配するな」

もう遥ったら……。突然そんなこと言うんだもの。本当にびっくりした。今わたしが不安に思っていたことを見透かされたような遥の言葉に、心臓がトクンと鳴る。家も裏山も守るってことはわたしとの約束も忘れてないってことだよね？　まだ憶えててくれたんだ。

でもおばあちゃんは、そんな遥の口先だけの言葉をとても信じているようには思えない。不安げに手元の模試データに視線を落とす。

「東京に行ったら、堂野家のみんながおまえを離さないかもしれな

いよ。そのまま店を継がせるかもしれないしねえ。向こうはきっとそれを望んでいるだろうから……」

おばあちゃんは、遥が東京の大学を選んだのは、堂野家と関係があると思っているのだ。でもわたしは知っている。遥が東京のこの大学を選んだ理由を。彼はずっとテレビ局の仕事に興味があって、マスコミ方面への就職に最大の威力を発揮する大学として、そこを選んだのだ。夏に東京に行った時、渋谷の公共放送局の前で立ち止まって、三つの卵の中のアルファベットのロゴをじっと見つめている遥の目は、嘘偽りなく将来を見据えている目だった……と思っている。多分、間違いない。

「ばあちゃんも心配性だな。まあ、四年後は実際俺もどうなってるかなんてわからないけど……。でもな、うちには希美香もいるし※卓(すぐる)もいる。それに俺がやりたいことを見つければそれを応援してくれるって東京のじいさんも言ってくれてるし。だから絶対ここにもどってくるから心配するなよ。……なあ？　ばあちゃん」

遥が笑顔を見せながらおばあちゃんの肩をぽんと叩く。

「そうかい？　そりゃあここに戻るのもお菓子屋を継ぐのも、それは遥の自由なんだけどね。でも、もしも。もしもだよ、遥が東京で仕事を見つけて、柊も東京でいい人が出来てここに帰ってこなくなったら……なんてことになったらどうするんだい？　希美香も嫁に行くだろうし、卓もどうなるかわからない。そうなったら本当にここはどうなってしまうんだろうね。柊だけでもこっちの人と結婚してくれないと、困ったことになるよ……」

おっと、今度はわたしに矛先が向いているのですか？　おばあちゃん、心配いらないから。安心して。東京でいい人なんてできないよ。っていうか、作らないから。わたしには遥しかいないんだし……。かといって今ここでそれは言えないしね。どうしたらおばあちゃんに納得してもらえるのだろう？

「あははは……！　それなら大丈夫！　ばあちゃん、安心しろよ。俺がこいつに変な虫が付かないようにしっかり監視するから。あっ、

それとばあちゃん。まだ誰にも言ってないんだけどその……俺さ。将来、蔵城を継ぐつもりだから」
は、遥……。いったい何を言い出すつもりなの？　おばあちゃんも目じりの皺をおもいっきり伸ばして、びっくりしてるじゃない！
「蔵城を継ぐ？　どういうことだい？　でも遥。おまえは堂野家の跡取り息子だろ？　ということは、おばあちゃんの養子にでもなるのかい？」
遥の言っている意味が全くわからないといった顔をしたおばあちゃんは、ただただ不思議そうに彼を凝視している。遥はそんなおばあちゃんの視線を避けるようにしてプイと横を向くと、とんでもないことを言い始めるのだ。
「あっ、ばあちゃんの養子じゃなくて。柊の家に、その、婿養子に入って……。それで、結婚しようか……と」
「柊の家に養子？　結婚？　……そりゃまた、どういうことだい？」
たぶん、きつねにつままれたような気分を味わってるに違いないおばあちゃんが、いったい何寝言を言ってるんだい？　というように目をぱちくりさせて、わたしと遥を交互に眺めていた。

※卓（すぐる）は、遥が高一の春に生まれた二歳の弟。

２４．とんだ受験勉強　（後書き）

大学受験を目前に控えた１８才になった2人です。相変わらずですね。
今から7年前くらいの携帯電話の普及率はここに記している程度のようです。
今では、ほとんどの高校生が所持しているようですね。

25．男に二言はない！

「だから、柊と……結婚するんだよ」
「柊と？　へえっ？？」
遥ったら。言ってしまった……。わたしは恥ずかしくておばあちゃんの顔をまともに見ることができない。おばあちゃんはメガネを下にずらして、わたしと遥を交互に見てしきりに目をしばつかせている。
「お前達、もしかして一緒になってくれるのかい？」
到底遥の言ったことなんて信じられないとでもいうように、大きくため息をついて疑わしい目でわたし達を見ている。
「ああ、そのつもりだよ。でもばあちゃん……。親父達にはまだ言うなよ。あいつらには知られたくないんだ。お袋だってまだ俺が東京で堂野を継ぐのをひそかに望んでるかもしれないしな。そうなったら柊とは引き離されてしまうだろ？」
「親のことをあいつだなんて……。おまえはいつのまにそんなに口が悪くなったんだい？」
確かに遥の口から出る彼の両親に対する物の言い方は、誰が聞いても横柄で尊敬の欠片も見当たらない。でもそれは、中三の時、夏祭りの夜に逃亡したあの事件がきっかけになっているのだから、それも仕方ないのだが。あの日以来遥は、彼の両親にかなり不信感を抱いているのだ。大学に入れば家を出て、親から離れて生活したいというのは、彼の精一杯の反抗心の表れなのかもしれない。
おばあちゃんにたしなめられても、いっこうに反省する様子もなく、ちっ！　と舌打ちして居心地悪そうにもぞもぞしている。遥ったらまるで小さい子供みたいだ。
「でも……。よくおばあちゃんに話してくれたね。ほんとうにほんとなんだね。なら嬉しいね。これで私にもまた新しい生きがいが出来たよ。卓も段々手が離れてくるだろうし、次はおまえたちの力に

なる番だね。おばあちゃんに出来ることはなんでもするからね。ところで将来はどっちの家に住むんだい？　柊の家は亮一郎たちもいるし、なんだったらこの母屋に手を入れて住むかい？　丁度来月満期になる郵便貯金があるから、あれ使って台所改装しようか？」
「……」
「……」
お、おばあちゃん、暴走しすぎですから……。わたしも遥も開いた口が塞がらない。わたしたち、これから大学行って就職して、結婚はそれからまだまだ先のことだと思ってる。それに、その時お互いの気持ちが離れていたら、この話は白紙にもどることだってある。
「ばあちゃん、結婚はずっと先の話だよ。まだ大学も決まってないんだぜ。……ったく。ばあちゃんに俺達のこと話すの早まったかな？　いつぽっくり逝ってもいいように、早い目に教えておこうと思った俺がバカだった……」
「ぽっくりっておまえねえ……。おばあちゃんはこのとおり、まだまだ元気だよ。でも、嬉しいね。おまえたちが結婚するなんて言うから、天にも昇りそうな気持ちになってしまったよ。ところで……。いつの間に二人は結婚の約束をしたんだい？　どう見てもそんな関係に見えなかったけどねえ」
そりゃあそうだよ。当事者本人だってあまり自覚がないんだから。それに見てのとおり、ちっともラブラブじゃないしね。
「柊は本当にそれでいいのかい？　こんな口の悪い孫が相手じゃあ、不満だらけなんじゃないの？」
「ううん。遥はわたしのことなんでも知ってるしわかってくれてるんだ。全然不満なんてないよ。だからプロポーズしてもらった時はほんとに嬉しかった。わたしね、一生、遥のそばにいたいと思ってる。遥の方がわたしじゃ物足りないんじゃないのかな？」
きっとそうだよ。いつも文句ばっかだし、三年前の約束が重荷になってるかもしれない。
「柊っ！　ぷ、プロポーズとか、ばあちゃんの前で言うなっ！　あ、

あれは、ただの提案だ」
――提案？
耳まで真っ赤にした遥が、なぜか憮然とした態度で吐き捨てるようにそんなことを言う。それじゃあ、わたしが三年間誰にも言わず大事に胸にしまっておいたあの夕日の約束は、なんだったって言うの？　わたしのひとり相撲？
自分でも気付かないうちに、おもいっきり遥を睨みつけていた。
「お、おい。そんな怖い顔するなよ。い、言っとくけど俺はおまえのこと、そ、その……。物足りないとか思ってないから。……ってなんでばあちゃんの前でこんなこと言わせるんだよ！　たのむから……。もう勘弁してくれよ」
何をどうたのむのか知らないけど、遥の慌てっぷりったら……。ここは勘弁してあげるべき？　こんなにオロオロしている遥を見るのは久しぶりだからね。
おばあちゃんときたら、泣いてるのか笑ってるのかわからないようなくしゃくしゃな顔をして何度も何度も頷いている。
「柊はいい子だよ。おまえにはもったいないくらいだね、まったく……。ちゃんと好きだと言わないと逃げられてしまうよ。ほんとにだらしないったらありゃしない。これ、遥！　男に二言はないよ。提案とかぐだぐだ言ってないで、柊との約束はきちんと果たしなさい。いいね！」
いつになく強い調子のおばあちゃんに、わたしまで圧倒されてしまいそうになる。
「わ、わかったよ。だからこの話は、もう終わりにしてくれ。柊もばあちゃんも家族もみんな大事にするから……。なので。東京行きよろしくっ！」
これでこの場から退散できると腰を上げた遥に、おばあちゃんの最後の一撃が発射された。
「遥……。東京に行く前に、籍を入れたほうがいいんじゃないのかい？」

だから、おばあちゃん……。

このことはまだ誰にも言ってないってさっきから言ってるんですけど。内緒なんです……。おばあちゃんにしか言ってないんです。

ほんとに大丈夫かな、おばあちゃん。

26．月夜の魔法

とうとうその夜は勉強どころではなかった。けれど、遥がはっきりとおばあちゃんにわたし達のことを言ってくれて良かったんじゃないかと思う。これでおばあちゃんの心配事も少しは軽くなったかな？

家の改装や入籍にまで話が及んだ時は正直びっくりしたけど、それもこれもおばあちゃんがわたし達の将来を喜んでくれている証拠だと思えばいい。これ以上の強力な助っ人は他にいないのだから。

遥の気持ちも確認できたし、大学を卒業して二十五歳になったら、本当にこの人のお嫁さんになるんだと想像すると嬉しくて、そしてちょっぴり誇らしくて、思い出し笑いのようにひとりにんまりしてしまう。

いつもは一人で走って帰る夜道を今夜は遥が送ってくれると言う。おばあちゃんの家からわたしの家までは、ほんの目と鼻の先の距離だけど、こうやって一緒に歩くのが妙にこっ恥ずかしくて背中がこそばゆい気がするのはなぜだろう。

東京では何のためらいもなく手をつないだり肩を抱いたりしてくれたのに、そんなことはまるで遠い過去の出来事だったかのように、今の二人の間にはぽっかりとバスケットボール一個分のスペースがあいたままだ。このままだと何も話さないうちに家の玄関まで着いてしまう。

二軒の家の間には、昔水田だったところに結構な広さの家庭菜園がある。おばあちゃんとわたしの母が共同で作っている野菜畑だ。

十一月になって時々吹く北西の季節風にも負けないで、大根やほうれん草がしっかり根付いて青々と葉っぱを茂らせている。この冷たい風に当たってこそ、冬の野菜は甘さを増すんだよ……といつもおばあちゃんが言ってたっけ。

あぜ道に畑仕事の合間に休憩するためのベンチが置いてある。これは遥のお父さんである俊介おじさんが日曜大工で作った渾身の作品だ。雨ざらしになっても木が傷まないようにオイルステン仕上げの手作りベンチは、ゆったりした作りで、大人なら二人並んで座ってもまだ余るくらいのゆとりがある。

畑の横に差し掛かったとき、月明かりに照らされてベンチの輪郭がぼんやり浮かび上がって見えた。わたしはこのまま遥と別れてしまうのがいやで、彼の上着の袖口を少しつまんで、歩くのを引き止めた。

立ち止まった遥は、わたしの想いを察したのか、微かに笑みを浮かべてわたしの手を取ると、ベンチの前まで連れて行ってくれた。

今夜は風はそんなに強くないけど、かなり冷え込んでいる。ベンチに座ったわたし達は手をつないだまま月に照らされた畑を見ていた。ここ最近にはなかったロマンチックな場面なのに、目の前が生い茂った大根の葉っぱというのは、この際目をつぶることにしよう。その横の白菜の大きな葉も見えなかったことにしよう。

遥は寒さのあまり少し身震いしたわたしをチラリと見ると、クスっと笑って、冷え切った両手を彼の手で包み込んでくれた。遥の手はとても大きくて暖かい。右手の中指のペンだこがぷっくりしていてなんだかかわいい。つい出来心でそこを撫でてしまったら、遥が、こらっ！　と言ってわたしの頭をグシャっとかき混ぜた。大変だ。こんなところを誰かに見られたらどうしよう……。

わたしはおもわず手を引っ込めようとしたけれど、より一層握った力を強めて離してくれない。誰かに見られるといっても、この周りは私道なので、通るのはうちの両親と遥の家族だけしかいないんだけどね。

「柊。なんでそんなにもそもそ、きょろきょろしてるんだよ。気になるのか？　……こんな寒いのに誰も出てきやしないさ。おまえも往生際が悪いな……」

わたしの心を見透かしたように遥が耳元でたしなめる。そうだね。まあ、見られたらその時考えればいいか……と開き直ったわたしは、彼の手のぬくもりを感じながら徐々に落ち着きを取り戻していった。

「さっきはごめんな。おまえに何の相談もなく、ばあちゃんに俺達のことばらしてしまった。でもばあちゃん、あんなに喜ぶとは思ってなかったよ」

「ほんとだね、ふふふ……。おばあちゃんのびっくりした顔、俊介おじちゃんにそっくりだったよ。実はわたしね。遥はあの約束、もうすっかり忘れてるんじゃないかと思ってたんだ」

「何で？」

「だって、遥、ずっと冷たかったし……。あれ以来その話も全くしなかったでしょ？　わたし達って、付き合ってるようにも見えないし……。それに遥がわたしのこと、どう思ってるのかいまだにちっともわからなかったから……」

まるで月夜の魔法にでもかかったかのように、昨日まで暗く沈んでいた心の内をすらすら言える自分がいた。

「そんな風に思ってたのか……。これだけいつも一緒にいて俺の気持ちがわからなかっただって？　俺は自分ではおまえにとってこれ以上ないってくらい、いい彼氏のつもりだったんけどな……。おまえは不満だったんだ……。それならそうと、もっと早くそう言えよ！」

ええ？　そうだったの？　わたしは遥のあまりに衝撃的な発言にベンチからひっくり返りそうになった。

ずっと一緒にいるのは認めるけど、わたしにとっていい彼氏っていうのは、遥が思っているのとちょっと違うような気がするんだ。わたしの思い描く素敵な彼氏像は、毎日毎晩のように電話をかけてくれて、会うたびに愛の言葉をささやき、着ている服や髪型を褒めてくれるのだ。そしてレディーファーストも忘れない。

たまには気のきいたプレゼントを手紙と共に贈ってくれるのはも

ちろんのこと、週末には映画を見たり食事をしたりデートも楽しんで、そして、そして……。ハーレクイーンな世界を夢見ているわたしは、そのどれもがまだ未経験で、いつかは遥に叶えてもらえるだろうと本気で期待して待っているのだ。

でもね、遥がいい彼氏のつもりだったと言うのなら……。わたしってやっぱり鈍感なのかもしれないね。気付かなかっただけってことなのかも。

「模試の成績が上がったのは誰のお蔭？」

突然遥の腕がわたしの肩に回され、間近に彼の顔が寄ってくる。

「は、遥です」

もう話どころの騒ぎではない。自分でもなんて返事してるのかわからないよ。

「そう。この遥様がおまえに手取り足取り特別仕様で勉強の面倒を見たからだろう？　じゃあ、ＭＤにダビングしてやってるのは誰？」

「そ、それも遥です」

「ビデオにしても俺がいつも見せてやってるから学校でみんなの話題についていけるんだろ？」

「はい、おかげさまで……」

「ほら、見てみろ！　俺がいなかったらおまえは勉強も高校生活もまともに送れないんだぞ。こんないい彼氏どこにもいないだろ？」

「た、確かに……」

わたしはこれ以上、彼に何を望んでも無駄だと再認識した。やや（？）傲慢でロンマンちっくのかけらも持ち合わせていない彼だけれど、好きになってしまったんだもの。仕方ないよね。

わたしの好きなアーティストのＣＤを発売日にしっかり買ってきて、ＭＤウォークマンで聴けるようにしてくれるのは遥だ。その後こっそり、わたしのＣＤラックにその新しいアルバムを並べておいてくれているのも知っている。

勉強だって自分のことは後回しにしていつだってわたしを優先してアドバイスしてくれた。すっかり感化されてお笑い番組にはまっ

たわたしに、今一番旬な芸人のネタを真っ先に教えてくれるのも遥だ。あまりにもあたりまえ過ぎて気にも留めてなかった遥の優しさが、今となってはどれも愛しい。ああ、このまま遥の腕に、ずっと包まれていたい。そう思った時、遥がすっとわたしの肩から腕をはずした。

そろそろ帰ろうか……。と言って立ち上がったとき、いっこうに暖まらないわたしの手を遥が口元に寄せ、はぁーっと息を吹きかけてくれたその瞬間、手のひらが彼の唇に触れて、わたしの心臓が危うく止まりそうになったのを、彼は気付いたのだろうか。

月夜の魔法よ、どうかこのまま、永遠に解けないでください……。

わたしは帰り着いた自分の部屋の窓から夜空に浮かんだ月を見ながら、静かに、そっと祈るのだった。

27．こんぺいとう

二月の早朝、わたしはダッフルコートに身を包み、おばあちゃんの編んでくれた手袋をはめて完全防備で玄関から一歩外に出た。

あたり一面に霜が降りて、まるで雪が積もっているような銀世界が広がる。明日は本命の大学入試。今日から東京入りして堂野のおじいさん宅に泊めてもらうことになっている。バックには着替えと参考書、筆記用具。そして、受験票も入れた。忘れ物はないな。よし！　準備完了！

「それじゃあ、気をつけてね。力いっぱいがんばってくるのよ。堂野さんによろしく」

父の運転する車に乗り込んだわたしは、心配そうな顔をした母に見送られていた。車が数十メートルほど進んで、遥のとんがり屋根の家の前で止まる。遥もちょうど今出てきたところだったのだろう。おじさん、おばさん、そしておばあちゃんまで玄関先に並んでいる。

「遥、柊。大丈夫だからね。おばあちゃんがちゃんと氏神様にお願いしてきたから、合格間違いなしだよ。いつもどおりにしてればいいからね。気をつけて行っておいで。そうそう、これこれ。新幹線の中で食べなさい」

そう言って渡された物は、おばあちゃんお手製の巾着袋。パリパリと中から包み紙の音がする。お菓子でも入っているのかな？

「ありがと、おばあちゃん。遥と一緒に食べるね。それじゃあみんな、行って来ま〜す」

わたしはおばあちゃんのくれた巾着袋を胸に抱くようにして握り締め、外にいるみんなに手を振った。

「じゃあ、行ってくるわ……」

と、わたしの隣に座った遥も、短くみんなに声をかける。

いよいよ始まる、本命の大学入試。三日前に地元の女子大も受けたが、やはりなんとしても遥と一緒の大学に行きたいという気持ち

は今も変わらない。模試の判定は結局Ｂのままだったけど、担任の先生は射程範囲内に入っているから、気を抜かず最後まで丁寧に問題を解けと励ましてくれた。こうなったらなんとしてでも受かってみせる、得意の英語で点数をかせいでやるんだと鼻息も荒く握りこぶしに力をこめた。

父に頑張って来いと言われて車を降りると、さっきようやく顔を出した朝日がプラットホームの屋根を照らしているのがとても眩しい。まるでわたし達の明るい未来を予言するかのような眩い光に、勇気を授けてもらったような気がした。遥と連れ立って改札をくぐり、快速電車に乗り込む。新幹線の駅まであと少しだ。

平日の朝だというのに新幹線は結構利用客がいる。自由席は新聞や雑誌を読みながら眠そうな目をしているサラリーマンでほぼ満席だった。父の助言もあって、指定席を取っていたわたし達は、あわてることなく座ることができた。途中の駅からも客が乗ってくるのだろうか。まだまだこの車両は空席が目立つ。

遥と並んで腰を下ろすと、さっきおばあちゃんがくれた巾着袋の中身を取り出してみた。小さい透明な袋に入ったカラフルなそれは、予想通りわたしの大好物だった。口を結わえてあるモールをはずし中身を手のひらに載せ、遥にも差し出した。

「食べる？」

「ああ。またこれか。ばあちゃん、俺達のことといったいいくつだと思ってるんだろうな」

「ふふふ。子供の頃遥とけんかして泣いたら、すぐこれを口にポンと放り込んでくれたっけ。わたしはピンクが大好きで、遥は黄色が好きだったよね」

「良く覚えてるな？　その記憶力を、是非とも勉強に応用して頂きたいものだけど」

「もうっ、遥ったら。そうできれば、今頃こんなに苦労してないよ。

そうだ！　甘いもの食べて、頭の働き良くしておこうっと」
　わたしは手のひらのピンクと白のそれを指でつまんで口にポンと投げ入れた。なつかしい味。いつものおばあちゃんの味がした。遥も食べている。ん……？　やっぱり黄色を選んでるじゃない。
　あと二時間で東京だ。ちょっとだけ単語でも見ておこうかなと吊り棚のカバンを見上げるが、今更やっても無駄だと思い直す。隣に座っている遥は腕を組んで、窓の外を眺めていた。そしてわたしと目が合う。
「なあ、柊？　大学に行ったら何がしたい？」
　遥がわたしの耳元に顔を寄せて訊ねる。
「ええ？　何って言われても……。そうだ、アルバイトがしたい！　高校の間は父さんが許してくれなかったからね。遥は？」
　すぐそばにいる遥にどきどきしながらも、あくまでも平静を装ってもう一度訊き返す。
「俺か？　何か打ち込めるサークルとかやりてーな。別に何でもいいけど、バスケ以外のことをやってみたい」
「そっか。バスケ以外のサークルか。わたしもサークルとかあこがれちゃうよ」
「なあ柊、一緒のサークルに入ろっか？」
　わたしはついに耐えられなくなって、少し顔を背けた。だって、遥の顔がますます近付いてくるんだもの。いくら電車の中で声が聞き取りにくいって言っても、そこまで寄ってこなくてもちゃんと聞こえてますから……。
「う、うん。そんなのもいいね。……でも、まずは合格しないと。あのね、遥。わたしさ、さっきまで、すっごく合格する気分が高まってたんだ。なんか、体の中から力がみなぎるって感じ？　でも、今は。ちょっと不安。落ちた時のこととか考えちゃう」
　そう。絶対合格するっていう自信に満ち溢れている時と、きっとダメだと落ち込む時が交互にやってくるのだ。こうやって遥と一緒にいられるのもあとわずかかもしれないと後ろ向きな考えしか思い

浮かばない今は、楽しい未来のことなんて何も考えられない。
「柊、ちょっと目つぶってみろ」
またすぐそばで遥の声がする。顔の右半分にずっと遥の息がかかって、さっきからなんだかとってもこそばゆい。
それにしても、どうして目をつぶらなきゃならないんだろう。トンネルに入った瞬間脅かそうとしてるのかな？　遥ったらいまだに、時々子どもっぽいとこあるしね。
「なんで？」
って訊ねてみる。素直に、はい、わかりましたなんて言えないもの。理由もわからずに、まんまと遥のドッキリにひっかかるなんて、悔しいじゃない。
「いいから、黙って俺の言うこと聞け」
ホントに遥ったら、変なとこ強引なんだから。何かのおまじないなのかな？　どうせ子供だましみたいなことだよね、とあまり期待もせず仏頂面のまま目を閉じた。
さあ、閉じたよ、次どうするの？

えっ……。

わたしは息を止めたまま金縛りにでもあったみたいに、ギュッと固まってしまった。目の前に遥の顔が……。目をつぶっていたって気配でわかる。
次の瞬間、遥の唇がわたしのそれと重なって……。
どれくらいそうしていたのか、はたまた、わたしが今どこにいるのか、何もかもが真っ白になってしまって、状況が理解できなくて。ただ、彼の肩を掴んでしがみつくことしか出来ない。

それは、とても甘かった。わたしがさっき食べたものなのか、遥が食べたものなのかどっちかわからなかったけど、とても甘かった。初めてのキスの味は、おばあちゃんのくれたこんぺいとうの味だった。

「柊。……あんまり、くよくよするな。これで大丈夫だ。きっと一緒に合格するよ」

真っ直ぐに向き直った遥は、普段どおりの顔をして、そんなことを言う。は、はるか……。なんでそんなに普通でいられるの？　わたし、初めてだったんだよ、こんなこと。もう心臓が暴れまくって、何がなんだかわからなくて……。

「柊、ありがとな。実を言うと……。俺も、明日が怖かったんだ。でも、今のでがんばれそうな気がしてきた。はああ、ドキドキしたよ、全く……」

そうなんだ。遥も受験が不安だったんだ。そうだよね、遥とわたしは同級生なんだもの。細かく言えば少しだけわたしの方が年上だったりもする。いつも怖いものなしみたいな顔をしてるから、遥の気持ちなんて考えたこともなかった。

自分ばっかりが受験の荒波に揉まれて苦しんでいると思ってた。こっちこそ、ごめん。そしてありがと……。

それにしてもさっきのはびっくりしたよ。ここ、新幹線の中だよ。ようやく気持ちが落ち着いて車内をぐるっと見回してみたけれど。幸い、誰にも見られてなかったみたいだ。横も後ろもまだ空席のまま。一安心ってとこかな。

なんだかわたしも急に合格しそうな気分になってきた。だってこれ以上、ドキドキすることなんて他にないものね。

おばあちゃんのこんぺいとうは、他のどんなお守りよりも効き目がありそうだ。

わたしは全ての迷いと不安を拭い去って、前だけを向いて東京駅

に降り立った。

遥の手をしっかりと握り締めて。

了

２７．こんぺいとう（後書き）

最後までお読みいただきありがとうございました。毎日大勢の方にこちらにお越しいただき、とても充実した三週間（と少し）を過ごすことができました。

ここで一区切りですが、続きを読んでみたいと思われる方は、続こんぺいとう　ｈｔｔｐ：／／ｎｃｏｄｅ．ｓｙｏｓｅｔｕ．ｃｏｍ／ｎ０３４２ｄ／ｎｏｖｅｌ．ｈｔｍｌ　へお越し下さい。お待ちしています。　２００７年１１月１１日

このあと引き続き、こんぺいとうの番外編を掲載しています。遥視点で、本編に書ききれなかったエピソードも綴っています。

続けてお読み下さい。　２００８年１１月

番外編　初恋は永遠に　１（前書き）

番外編にお越しいただき、ありがとうございます。

こんぺいとうは、女性主人公、柊の一人称（　わたしは……）で書き進めてまいりましたが、以降、番外編は、男性主人公、遥の視点によります三人称（　遥は……、柊は……）表現になっています。

多少読みづらい面もあるかと思いますが、ご了承いただけますようお願い申し上げます。

番外編　初恋は永遠に　1

「パス、パス、パス。よっし！　それいっ！」
「ういっし！　おーら、おら、おら、もう一回！」
「よっしゃっ！」
選手のかけ声と、観客の声援がこだまする体育館は、四月だというのに初夏を思わせる熱気に包まれていた。
ハーフタイムの時、遥は確かに見たのだ。夢美の後ろに佇む柊の姿を。見間違うはずがない。あれは絶対に柊だったと遥の心臓は、俄かに拍動を早める。
藤村に回すべきか。自分がシュートを決めるべきか。
ブロックをかわし、敵の背後に回りこむ。3ポイントを狙える位置に立った。願ってもいないチャンス。藤村がいけと叫んだその時、ボールは遥の手を離れ、ゴールに向かってきれいな弧を描いた。

それは中学校バスケットボール大会地区予選の優勝が決まった瞬間でもあった。
初めて手にする優勝杯に、チーム全体が沸き立つ。創部以来の快挙に、監督の顔も緩みっぱなしだ。
遥は仲間達と肩を抱き合い、喜びに浸りながらも次の県大会に思いを馳せる。そして観客席を見た。
手を叩いて飛び跳ねながら喜ぶ夢美の横で、頭ひとつ分背の高い柊が、しきりにきょろきょろと辺りを見回している。そして遥と目が合ったとたん、破顔一笑する。
この笑顔を見るためならどんなことだって耐えられる。遥は再び高鳴る胸の鼓動にややたじろぎながらも、彼女に向かって満面の笑みで応えた。

「なあ堂野。今日夢美と蔵城が来てたの知ってるか？」
試合の帰り道、藤村がペットボトルに入ったスポーツ飲料を飲みながら遥に訊ねる。
「ああ。知ってる」
「夢美のやつ、俺のこと見てくれてたかな？　優勝が決まった後、すんげえ喜んでたろ？」
「ああ」
「あれは絶対に、俺の活躍を見て、狂喜乱舞ってやつだよな。おまえが蔵城と夢美を誘ったのか？」
ペットボトルを真っ逆さまにして振りながら、最後の一滴まで飲み干した藤村が言った。
「いいや」
「じゃあなんで来たんだろ」
「さあ」
「っておまえ、ホントにのん気だよな。おまえももっと喜べよ。おまえの蔵城が来てたんだぜ」
藤村は口の端を上げてにやりと思わせぶりな笑いを浮かべる。
「だから、あいつは俺とは関係ないって言ってるだろ？」
「またまた、そんなこと言って。俺にはわかってるんだってば。おまえが蔵城を好きなことくらい」
「はん！　んなわけないだろ」
遥はカバンを担ぎなおすと、仏頂面のまま急に走り出した。
「お、おい。待てよ。逃げるなよ」
「家族に早く帰るよう言われてるんだ。じゃあな、藤村」
遥はそれだけ言ってそのまま住宅街の坂を駆け上って行った。俺が悪かった、だから機嫌を直してくれという藤村の叫び声も虚しく、遥は二度と振り返ることはなかった。

「ただいま……」
玄関の上がり口にカバンをドサッと置き、靴を脱ぐ。すると部屋

の奥から遥の妹の希美香と、片想いの相手であり親戚でもある柊が顔を出し、おかえりと口を揃えて言った。
遥は二人の顔をチラッと見ただけで、何も言わずに、そのまま二階の自分の部屋に駆け込んでいく。
「お兄ちゃん。なんで無視すんのよ！　優勝したんでしょ？　最後、お兄ちゃんが決めたんだって？」
希美香が階段の下から遥に向かって大声を出す。
「うっせえー」
二階から轟く遥の答えはそれだけ。
「……ねえねえお姉ちゃん。お兄ちゃんって、なんであんなに偉そうなんだろ。マジむかつくし」
希美香が柊の耳に口を寄せてひそひそと話す。
「ほんとだね。でも学校ではにこにこして、みんなの人気者なんだから信じられないよね？」
「だから、うっせーんだよ！　おまえら、さっさとそこから消えろっ！」
容赦なく降りかかってくる遥の怒声に、きゃーっと言って逃げ出したのはもうすぐ入学式を迎え、中学生になる希美香。柊は腕を組み、遥を見上げながらふうーっと大きくため息をつく。
「遥ったら、なんでいつもそんななの？」
柊がトントンとリズムよく階段を上がって来る。遥は慌てて部屋にもどり、机の上に載せていた藤村から借りた雑誌を、ベッドの下に投げ込んだ。それとほぼ同時に柊が部屋に押し入ってくる。
「ねえ、遥。もうちょっとあたしたちに優しくしてよね。そうそう、今日の最後のシュート、すっごいカッコよかったよ。優勝おめでとう！」
「……」
柊が腰掛けたベッドの足元には今投げ込んだばかりの雑誌が半分こちら側に顔を覗かせている。遥は試合の話どころではなかった。もし柊がその足元を見たなら……。遥のこめかみに冷や汗が伝う。

「遥ったら、返事くらいしてくれてもいいでしょ？」
「俺のベッドに勝手に座るな」
今の遥に言えるのはそれだけ。
「なんで急にそんなこと言うの？　変な遥。でもいいな、遥の部屋にはベッドがあって。わたしなんか、ずっと畳の上に直接布団だよ。わたしもベッドが欲しいな」
何も知らない柊は座りながらベッドのスプリングのバウンドを楽しんでいる。
「いいから。早く行けよ。ここから出てけ！」
遥は今、苦渋の選択を強いられている。柊がここに来てくれるのは本当は大歓迎なのだけれど、とにかく今は、史上最大のピンチに襲われている。雑誌がばれないうちに、柊を追い出さなければいけない。
「勉強のじゃまだ。早く消えろ」
「わかった……。出て行けばいいんでしょ？　遥の意地悪。せっかく応援に行ったのに、なによ、その態度」
「誰が来いって頼んだ？　おまえが勝手に来たんだろ？」
「ふん。もう二度と行きませんからね。それじゃああんたのご希望通り、消えますから。そうそう。今夜は遥の優勝パーティーだって。おばあちゃんがお寿司を作ってくれてる。何が優勝パーティーよ。応援して損した」
柊はプリプリしながら遥の部屋を出て行く。
遥は部屋の戸をパタンと閉めると、今まで柊が座っていたベッドに腰掛け、頭を抱え込んだ。柊が応援に来てくれて、あんなにも嬉しかったのに……。柊がいてくれたから、あそこまでがんばれたのに……。
それを素直に伝えられない自分と、彼女にだけは何があっても見られたくない大人びた雑誌のハプニングに、遥は激しく自己嫌悪に陥るのだった。

番外編　初恋は永遠に　2

いくら夜だといっても、気温は一向に下がらず、じっとりとした空気が身体中にまとわり付く。七月の夜は暑くて蒸す。遥はこの時間、村の中をランニングするのを日課にしている。朝は学校で早朝練習があるので、もっぱら自主トレは夜が中心になる。部員の中では小柄な遥がレギュラーに選ばれたのは、きっとバスケット部に入部以来続けているこの自主トレのおかげだと彼は信じている。

旧村役場の跡地広場に差し掛かった時、木から木へと渡した電線にぶら下がったいくつものちょうちんから、オレンジ色の光が漏れているのが目に入る。広場の真ん中には櫓（やぐら）が組まれ、太鼓の練習をしている村人の姿が見えた。スピーカーからは、あ、あ、あーー、マイクのテスト中というお決まりの声が流れ、合間に民謡が途切れ途切れに聞こえてくる。音響の準備も万端のようだ。

明日は村を挙げての夏祭りだ。今年は遥の住んでいる地域の住民が、会場の様々な役割を担っている。仕事から帰ってきた父親が、話し合いに出席するため、ここにある集会所に足しげく通っていたのも知っている。今夜もまだいるのだろうか。遥は、あちこちを見回してみたが父親を見つけることはできなかった。もう帰ったのかもしれないと探すのをやめ、水のみ場の水道の蛇口を上に向けて、直接そこから水を飲む。首に掛けてあるタオルで口元を拭い、再び走り始めた。

遥はスピードを緩めることなく広場を横切り、家のある方向にUターンする。ここからはしばらく上り坂が続く。そのまま真っ直ぐに行けば、すぐに彼の家の玄関に繋がっているというのに、少し手前で畑の横を曲がり、祖母の家からわずかばかり離れたところにあるもう一軒の古い民家を目指す。

家の傍らには軽トラックとシルバーのセダン、黄色の軽乗用車が停まっている。セダンはここの当主が通勤に使っている車だ。すなわち、遥の想い人である柊の父親もすでに帰宅しているということを示す。軽トラックは農作業時に遥の家と兼用で使っているもの。黄色の軽乗用車は、彼女の母親が所有しているものだ。

この蔵城家が、遥の父方の本家になる。そして自分が堂野を名乗り、彼女が蔵城を名乗っていることが何を意味するのか。中学三年生の遥には、もうすでにその真意がすべて理解できていた。

自分がどれだけ柊を想っても、それは叶わぬ夢であるということも。

駐車場を過ぎて、祖母の住む母屋に続く道から、ピンクのカーテン越しに明かりが漏れている一階の端部屋が見える。

そこは柊の勉強部屋だ。子供の頃は窓から出入りして、よく叱られたものだったなどと、遥の脳裏に過去の様々なシーンが鮮やかによみがえる。その部屋にも最近はすっかり足が遠のいている。クリスマス会の時と、正月にちらっと覗き見たくらいだ。

それは遥が、用もないのにずかずかと女性の部屋に入り込むほどもう世間知らずではなくなったということを物語っている。

ハンガーにかけてある制服や、棚の上に無造作に載っているアクセサリー、カバンからのぞくハンカチまでもが、遥には眩しすぎた。柊を前にすると、妹の希美香とは全く違った空気を感じてしまい、落ち着かなくなるのだ。

いつからそんな気持ちを抱くようになったのか定かではないが、柊を好きだと自覚したのは、小学生の低学年の頃。高学年になった時には、すでに女性として意識し始めていたのかもしれない。

柊の部屋の明かりを確認すると、それはランニングの終わりを意味する。遥はそのまま一気に家の前まで走り、蚊が入らないようにさっと家の中に入る。シャワーをあびようと風呂場に向かうが、水

の流れる音が聞こえ、今夜もまた先客がいるのを知る。
――ちっ！　希美香のやつ、俺が帰ってくるのを知ってて、先に入りやがったな。
これが妹の希美香の、精一杯の兄への反抗心であるのは彼も理解しているが、無性に腹立たしくなる。イライラする気持ちをなんとか抑えこみ、何か冷たい物でも飲もうと、台所に向かった。ところが部屋の中から、ぼそぼそと両親の声が聞こえてくるのだ。その会話の中に、遥という名が無遠慮に繰り返される。遥は心臓がドキドキと鳴るのを感じながら戸口に立ち止まった。

「……遥には、私から言うから。どうせ東京にやるんなら、少しでも早いほうがいいと思うの。向こうの高校の説明会が十月にあるのよ。大学の付属だからいいんじゃないかと思って。店を継ぐといっても、大学は行かせてやってもいいって父も言ってるしね。あの子、この頃成績がいいのよ。昔は柊ちゃんにどう背伸びしても追いつかなかったのに、今はクラスで一番よ。学年でも三番って先生に言われて。いったい誰に似たのかしら」
「俺だな。俺に似たんだ」
「あなた、成績よかったの？　ほんと？　初めて聞いたわ。まあ、どっちにしろ、将来は店の経営も遥の肩にかかってくるんだし、そっちの方で手腕を発揮できたら、父も心強いと思うの」
「そうだな。俺が力になれない分、あいつにがんばってもらうしかないからな……」
ドア越しに聞こえる両親の会話。以前にもそのような話を聞いたことがあったが、ここまで具体的なのは初めてだ。遥は拳をきつく握り締めると、そのまま二階の自分の部屋に駆け上がって行った。

番外編　初恋は永遠に　２（後書き）

読んでいただき、ありがとうございます。
遥が中三の夏祭り前日の話です。

番外編　初恋は永遠に　3

翌日の午後、うだるような暑さの中、エアコンの冷房スイッチすら入れる気にならず、遥はベッドの上に仰向けに横たわりながら夕べの両親の会話を思い出していた。自分には何も知らせられないまま、勝手に進められている将来のことを。

小さい頃から、おまえは大きくなったら祖父の店を継ぐんだよと言い聞かされてはいたが、まだまだ先のことだからと、真剣に受け止めたことはなかった。ただおぼろげに、いつかはそうするのだろうと思っていただけだった。

ところが夕べの両親の話は違った。来春から東京に行き、向こうの学校に通えと言うのだ。いったい何を言ってるのだろうと耳を疑った。

部活で身体がぼろぼろになるほどの厳しい練習に耐え、時間をやりくりして勉強に打ち込んだのは、東京に行くためではない。親を喜ばすためでもない。ましてや名誉や人気を得るためでもない。

遥は、思いを寄せる彼女に認められたくて、彼女を守れる強い人間になりたくて。柊のことだけを考えて中学校生活の二年と数ヶ月を過ごしてきたというのに。なのに、そんな自分の気持ちなど一切理解されず、大人の敷いたレールの上を歩かされることに、ただただ憤りを覚えていた。

遥は夕べ夜遅くまで練った計画を、今こそ実行に移すべきだとベッドから身体を起こし、クローゼットの中から大き目のスポーツバックを取り出した。

今夜は村の祭りだ。夕方から夜にかけて、家の中は誰もいなくなる。その時を見計らって、ここを抜け出す。遥の計画は、いよいよ現実味を帯びてくる。

タンスから着替えを出し、カバンに放り込む。問題集や参考書を

買うためにと、銀行に預けずに封筒にしまっておいたお年玉の残りの千円札と五千円札を、全部財布の中に押し込んだ。後は家族が出払うのを待つだけだ。遥は汗の滲む額をTシャツの肩の部分で拭い、ベッドに腰を下ろした。その時、ドアをコンコンと叩く音がする。誰だ？　カバンを隠そうと立ち上がったと同時に、遥の心臓の鼓動を一番乱れさせる声がそこから聞こえてきた。

「遥、いるんでしょ？　ここ開けて」

いつになく優しいその声は、確かに彼女のものだ。遥はありえないほどの心音を部屋中に響かせながら、息を潜め考えを巡らせる。ドアを開けるべきか、それともこのまま彼女を追い返すべきか……。

外側のドアノブに彼女の手がかかった瞬間、遥は自らドアを開け、柊の腕を掴んで中に引き入れていた。

「ちょ、ちょっと何すんの！」

浴衣姿の柊が、遥の手を振りほどこうと身体をよじる。

「いいから、黙って中に入って……」

なだめるようにそう言って、遥はドアを閉めた。柊が室内を見回し、ある一点にその視線を集中させる。その場にいつかわしくない衣類の詰まったカバンが柊の思考を混乱させているのだと手に取るようにわかる。遥は覚悟を決めた。

「俺、今夜、逃亡するから……」

柊の目を見てはっきりと言った。

「と、逃亡？」

柊が呆然としながら遥を見つめ返す。

「ちょっと、考えてることがあるんだ……。今夜、十一時の夜行バスで東京に行くことにした。だから、俺がバスに乗り込んでから、みんなにそのことを言って欲しいんだけど……」

「どういうこと？　おじちゃんとおばちゃんには黙ってここを出て行くの？　意味わかんないよ。ちゃんとワケを話してから行けば？」

柊が詰め寄ってくる。

「そうはいかないよ。だって今日は祭りだろ。絶対に村から出して

もらえないに決まってる。どうしても今夜発ちたいから、おまえに協力して欲しいんだ。帰ったら理由を全部話すから……」
急に口をつぐんだ柊が、遥をまじまじと見る。柊の色素の薄い茶色の瞳が微かに揺れる。
「俺はこのあと、ますます気分が悪くなって、祭りに行かないことにするからな。九時ごろこっそり家を出るつもりだから、家の者を祭りの会場に留めておいてくれ。特に希美香が忘れ物をうちに取りに帰ったりしないように、しっかり見張っておけよ！」
強い口調の遥に、柊も決して負けてはいない。
「わけも訊かないで、遥を逃亡させるわけにいかないよ！　いったい何があったの？　どうして東京なの？」
遥の理不尽な反乱を認識した柊が、執拗に遥を責め立てる。
「今は言えない……。じゃあ……。おまえも一緒に行く？　行けばわかるよ」
柊が承諾するはずがないとわかっていながらも、そう訊かずにはいられない。もしも柊が一緒に行ってくれたなら、勇気も倍になるかもしれない。遥は一パーセントの確率に全てを賭けた。
「そんなあ……。理由もわからないのに行けないよ。……わかった。あんたがそれほどまで言うのなら協力する。みんなになんて言われようとも、バスの出る十一時までは何も知らないふりしてる」
それは彼女らしい答えだった。遥はほっとため息をつきながらも、目の前で小首を傾げる柊から目が離せない。すると、柊のどこか甘えたような声が遥の耳をくすぐり始めるのだ。
「ねえ、遥。ひとつだけお願いがあるんだけど……。東京に着いたら、うちに電話して。どんなに朝早くてもいいから……」
「うち？　それってどっち？　おまえんち？　それとも俺の家？」
柊の言う「うち」とは時と場合によって、その意味合いが変わる。学校で友達におばあちゃんの話をする時の「うち」は遥の祖母の家を指す。希美香と遊んでいる時の「うち」は、遥のとんがり屋根の離れを意味する。柊にとっては自分の家も含めて、三つ全部が「う

ち」なのだ。遥はたちまち混乱し始める。
「どっちでもいいから。とにかく連絡すること！　いい？　……じゃあ、早く寝る！　気分悪くてお祭り行けないんでしょ？　夏バテってことにしておいてあげるから」
結局どこに電話をかけるのか、はっきり答えがでないまま、遥は無理やりベッドに寝かされる。柊が手にしたタオルケットが、ふわりと遥の身体に掛けられた。その時、彼女の浴衣の袖が遥の顔をかすめ、甘い香りが漂う。パウダースプレーの香りだろうか？　遥の心臓が大きく跳ねた。
「柊、恩に着る……。そ、その……。一緒に夏祭りに行けなくて、ごめん……」
こんなことを言うつもりではなかったのに。遥は自分の言ったことに驚きを隠せない。
「はあ？　別にいいよ、そんなこと。中学生になってからいつも別行動だったじゃない。何よ、いまさら……」
「あはは。そうだよな。でも、今日のおまえちょっとイケテルぞ。馬子にも衣装とはホントよく言ったもの……」
「ど、どの口がそんなことを言うの！　病人は黙って寝る！」
ますます気が動転して、ぽろっととんでもないことを口走った瞬間、真っ赤になった柊が足元に転がっていたバスケットボールを拾い上げ、遥に投げつける。そして、浴衣を着ているとは思えないような大胆な歩みで、部屋を出て行った。
――イケテル？　俺、なんであんなこと言ってしまったんだろ。
遥は咄嗟に口にした自分の言葉に動揺するあまり、しばらくの間、顔にかぶったタオルケットをそこからはがすことが出来なかった。

番外編　初恋は永遠に　４

もうすぐ九時になる。遥は履きなれたスニーカーに足を入れ、スポーツバックを肩に担ぎ上げた。部屋の電気はつけたままにして、そっと玄関から外に出る。

いつもならランニングを終えて帰ってくる時間帯だ。小高い裏山から木々がこすれ合う音と、虫や猫の鳴き声くらいしか聞こえない静かな家の周辺が、今夜は少しばかり違った。家のすぐ下を通る県道にはひっきりなしに車が通り、姿は見えないがどこからともなく人の声も聞こえる。

遥は辺りの様子を窺いながら玄関のドアを閉め、鍵をかける。そして祭り会場とは反対方向の農道を、なるべく足音をたてないように静かに下っていった。

遥は祖父に会ったら自分の今の気持ちをすべてぶちまけるつもりでいた。本当は店を継ぎたくないんだと。

祖父も祖母も穏やかで優しい人達だ。蔵城の祖母と違って年に数回しか会えないが、遥は彼らが大好きだった。でもそれとこれとは話が違う。自分の一生のことなのだ。自分に後を継ぐ意志がないことをはっきりと伝える必要がある。

遥にはやりたいことがあった。それはテレビ局に勤めること。俳優やタレント、アナウンサーなどの表に出る仕事ではなく、番組を作る仕事がしたいのだ。この仕事にあこがれたきっかけは、皮肉なことに、祖父に連れて行ってもらったテレビ局の見学ツアーだった。東京には様々なテレビ局がある。テレビの画面だけでは知り得なかったことが、そこで次々と明らかになり、自分で番組を作ってみたいと強く思うようになったのだ。そして地元の地方局に勤めることができれば、柊と離れることもない。

遥の脳裏にはそんな青写真が出来つつあった。そうなれば柊にこの想いを告げられる時がくるのではないかと。遥は何が何でも、祖父と話の決着をつけなくてはならなかったのだ。

ちょうど家と駅の中間地点まで下りて来た。遥は少し歩くスピードをあげる。三叉路にさしかかろうとしたところで、角の所に立っている黒っぽい浴衣姿の女性が視界に入る。どこかで見たような青い帯が暗闇にぼんやりと浮かび上がった。街灯がまばらなのではっきりとはわからないが、どうも彼女が自分を見ているような気がするのだ。遥は目を凝らしてじっと彼女を見つめ返した。

……柊だ。

遥は半信半疑のまま彼女に近寄る。どうしてこんなところに？希美香がしきりにうらやましがっていたかわいいお団子ヘアの柊が、満面の笑みを浮かべてそこに立っているのだ。後れ毛が白いうなじに貼り付き、目のやり場に困りどぎまぎする。柊ではない別の大人の女性がいるような錯覚に囚われ思わず息を呑んだ。さっき、彼女にタオルケットを掛けてもらった時に遥の鼻先をかすめた甘い香りが再び彼を包み込み、またもや心臓が暴れ出す。

「なんでおまえ、こんなところに居るんだよ……。祭りはどうした？」

柊のことをそんな風に見てしまった自分をどこかに追いやるように、遥は精一杯のそっけなさを装って訊ねる。

「う、うん。さっきまで希美ちゃんと一緒にいたんだけど……。今は友達のところに行ったよ。でもね一時はどうなるかと思って」

「何が？」

「希美ちゃんが足が痛いから家に帰ろうって言い出して……。でも助かった。希美ちゃんの友達と出会ったおかげで、帰らずに済んだんだ」

「そうか。……心配かけて悪かったな」

危機一髪だ。もし希美香が戻って来ていたなら、今ここにいなかったかもしれないのだ。遥はほっと胸を撫で下ろした。
「それより、遥。あんたお金とかあるの？」
柊の丸い目が心配そうに遥を捉える。
「金？　それなら心配ないよ。今年のお年玉や貯金をかき集めたから、往復の旅費くらいはなんとかなる。それに俺、中学生には見えないだろ？　この前なんか高二に間違えられたくらいだから別に何も心配いらないさ」
スポーツ用品の店にバスケシューズを見に行った時、店長にそう言われたのだ。一緒だった藤村は遥より十センチ以上も背が高いにもかかわらず、すぐに中学生だと見抜かれていた。これは遥にとって最近滅多にない痛快な出来事のひとつだった。
自己満足の笑みに浸っていると、急に柊の手が遥の手に添えられ、何かをねじ込んでくる。
「これでジュースでも買って。……じゃあ気をつけてね。こっちのことはわたしにまかせて。みんなにはうまく言っとくから」
次の瞬間、もう柊は坂を駆け上がっていた。遥は自分の手に視線を落とす。そこにはクシャクシャになった千円札があった。おばあちゃんにでももらったのだろうか。いつも整理整頓にうるさい几帳面な柊が持っていたとは思えないようなしわだらけの夏目漱石に、遥はふっと口元を緩めた。柊は祭り会場で何も買わなかったのだろうか。大好きな綿菓子も？
柊が怒るとわかっていて、いつも彼女の綿菓子をわざと横取りしていたのを思い出した遥は、何も買わずに自分に千円をよこした彼女の心遣いに胸が熱くなった。

柊の姿がだんだん小さくなっていく。急に立ち止まった柊が両手を大きく振って叫んだ。きっと電話してよと。遥がおおっと返事を返すのとほぼ同時に、夜空が明るくなる。少し時間差をおいてドーンと重い音が響き渡った。

今夜最後の打ち上げ花火が遥の背後で大輪の花を咲かせていた。

番外編　初恋は永遠に　４（後書き）

読んでいただきありがとうございます。
今は野口英世ですが、当時（１１年前）の千円は確か夏目さんだったと記憶しています。
綿菓子のことですが、不思議ですね。テレビのドラマ等ではほとんど綿飴（わたあめ）と表現されていますし、私もそう書こうとしていました。が……。気になって調べてみると、関東より東は綿飴と言って、西は綿菓子となっていました。こんぺいとうの舞台は一応東よりの関西方面と設定していますので、ここは綿菓子にしないとと、書き改めた経緯があります。
こうやって文を書いていますといろいろな面で新たな発見があり、それがまた楽しくもあります。

番外編　初恋は永遠に　5

祖母の住む母屋は離れと違って冷える。背中のあたりがスースーする感じだ。まだ十月だというのにこたつを出している祖母の気持ちがなんとなくわかるような気がした。

遥は祖母の部屋のこたつに入って勉強をしながら、目の前でうとうとしている柊を時折伺い見ては歯がゆい思いに苛(さいな)まれていた。

遥はこの親戚の女の子を以前にも増して愛おしく思い始めていた。というのも夏祭りのあの日に抜け出して東京の祖父母の家に行った時、一応の解決策を見出したからというのもあるが、最近遥の親友である藤村と微妙に接近しつつある彼女が実は気になって仕方なかったのだ。こうなったらいち早くこの鈍感な少女に自分の思いを伝えるべきかどうなのか……。遥はある意味、早急に決断を迫られてもいた。

ただ遥は、相手の藤村が別の女子にぞっこんなのを知っているだけにどこか腑に落ちない点も感じてはいた。が、藤村がいつ心変わりするかなんてことは誰にもわからない。柊はクラスの誰よりもきれいでかわいい。もちろん、遥の贔屓目もあるがあながち間違ってはいなかった。遥が柊と仲がいいと思っている連中から、ひっきりなしに彼女の動向を伺うような質問をされるのだ。中には付き合いたいから間を取り持ってくれと言う者までいて、それこそ油断ならない。藤村がいつ柊に乗り換えても不思議はないのだ。

こくりこくりと船を漕ぎ始める柊に起きろと声をかける。

「遥。少しだけそっとしておいてあげなさい。柊も疲れてるんだよ」

と祖母の優しい声。

――だめだ。こんな調子だからこいつの成績は下降の一途なんだ。

遥は内心気が気でない。このままだと同じ高校に行けないのは目に見えている。ならば自分がランクを下げて受験するという策も考えたが、それではあまりにも短絡的すぎないか？　祖母の思いやり

など、この際邪魔者以外の何者でもない。遥はすかさずこたつの中の柊の足に蹴りを入れた。「起きろっ！」　と。
びくっとして目を開けた柊は何事かと遥を見るが、その視線はまだ定まらない。
「いい加減にしろよっ！　このネボケ女！」
遥の暴言に意識をよみがえらせた柊は負けてはいない。
「何よ。ちょっとぼーっとしてただけじゃない。なのに痛いよ！　そんなに強く蹴らないで。もうっ！」
柊の右足キックが遥の左足ふくらはぎを直撃する。遥はこの時、柊が女の子であるということを一瞬忘れてしまう。ムキになってもう一発蹴りを入れたところで、祖母の一撃を食らうのだ。
「これっ！　遥、やめなさい！　柊もっ！」
祖母の手には丸めた朝刊が。編みかけの帽子を膝の上に乗せて、握り締めた新聞で遥の頭上を直撃する。
「いてっ！　ったく、ばあちゃんよお……。わかったよ。でも、俺は悪くないからな」
「つべこべ言わずに、早く勉強しなさいっ！　私はお風呂に行ってくるからね。おまえたち、今度けんかしたら承知しないよ！」
そうやってどうにか事態が収拾し、また勉強が始まるというのが、ここ最近の遥の日課だ。
柊が口を尖らせ、蹴りあいの結果をまだ不服そうに引き摺りながら数学の問題集を解いている。そこ、違うだろ？　と言いたいのをぐっと我慢して、遥は彼女のノートをなるべく見ないように心がける。これ以上けんかの種を蒔きたくないからだ。

遥がこうやってけんかをしながらも、柊とここで一緒に勉強しているのにはわけがあった。もちろん、大好きな彼女と同じ空間にいることが第一目的であるのは否定のしようのない事実なのだが……。もうひとつ大きな理由があったのだ。
遥の祖父はあの夏の逃亡の時、遥にきっぱりと言い切った。跡継

ぎの心配はいらないと。若いうちは自分のやりたいことを思う存分やれと言った祖父の目はどこか少し寂しそうだったが、遥は宣言したのだ。自分の思った道を進むと。

そして叱られるのを覚悟の上で家に帰ると、父親はまだしも母親までもがお帰りと言っただけで、それ以上何も責め立てることはなかった。この時、母親の様子が少し変だなとは思ったが、それ以上詮索はしなかったのだが。するとその後みるみる母親の調子が悪くなり、病院に行ったその日に入院ということになってしまったのだ。父親からは出血したという説明を受けただけで。

自分のせいで母がどこか悪くなってしまったのだろうかと遥は真剣に悩んだ。自分が勝手にとった行動がこんなにも母親を傷つけてしまったのだろうかと、自己嫌悪に陥ったのも束の間、父親がとんでもないことを遥に告げる。

母さんは妊娠してるんだよ……と。てっきり吐血をしたと思っていた遥は、その症状が子を宿したことによる流産の徴候であるとわかるや否や、今度は無性に腹立たしくなってくるのだ。なんで自分の母親が妊娠するんだと。

十五歳の遥には、それは生々しい現実として受け止められた。結婚をした女性が子どもを産むのは別に不思議でも何でもない。でも、それとこれとはわけが違う。違いすぎる。仮にも、長男である自分はもう十五歳なのだ。クラス中の誰にも、そんな小さい兄弟がいる者はない。おまえの母ちゃん、やるなあとひやかされるのは目に見えている。

退院してきた母親はすっかり顔色もよくなり元気になったように見えたが、高齢出産のリスクも考えて、医者の進めどおり引き続き家庭で療養することになった。病欠と産休を取って仕事を続けるという選択肢もあったが、どういうわけかきっぱりと仕事を辞めてしまったのだ。遥自身も小さい頃はいつも母親が家にいる友達がうらやましく思ったものだが、実際それを経験してみると、うるさいことこの上ない。今しようと思っていたことをいちいち口出しされて、

やる気をそがれるのだ。おまけに妹の希美香とスクラムを組んで責められるのはもうたくさんだと、逃げおおせた地がこの祖母の部屋だったというわけだ。

もう集中力が無くなってしまったのだろうか。柊がさっきからテレビ台の方をちらちらと見ている。テレビはもちろん消してあるのに……だ。遥は英語の教科書から目を離し、不審な動きをする柊を見た。

「遥、あんたさあ、その録画したビデオ、いつ見てんの？」

突如柊の口から飛び出す疑問に、遥はなんだそのことかと、テレビ台の中に納まっているビデオデッキに目をやりながら答えた。

「夜中。宿題やりながら見てる。金土の晩に、みんなが寝静まってから、離れのリビングでＣＭぶっとばしながら見るのがいいんだよな。そうだ。今夜、おまえも見に来ないか？　今週の特番二つほどたまってるんだ。うちの父さんも母さんもノリ悪すぎなんだよな。希美香は料理番組にしか興味ないし……。　俺あの家ですんごい疎外感、感じてる。ねえ、お願い、ひいらぎさま。一緒に見ようよ！　ね？」

遥は両手をこすり合わせて拝むように頼み込む。どうせ勉強しないのなら、ビデオでも見たほうが楽しいに決まってる。それでいい雰囲気になったら……。告白してもいいかなと遥の脳裏に自分勝手なシナリオが浮かび上がった。ところが……。

「ええっ？　いいよ、そんなの。だって、遥の趣味にはついていけないんだもん。お笑いなんかどうでもいいよ。見たくない！」

それはないだろ、ひいらぎさま……。あまりにも速い柊の拒絶に、遥は力なく項垂れる。なんで俺の気持ちがわからない！　と逆切れするのはお門違いで。柊が自分のことなど全く意中にないのは百も承知の上で、何度も拝み倒して、恐る恐る顔を上げてみると……。

どういう風の吹き回しだろう。急にニヤニヤし始めた柊が、頬を上気させながら、ねえ遥と言った。

「やっぱりさっきの返事、取り消す。今夜ビデオ見に行くわね。その代わり、今度はわたしのお気に入りのドラマも一緒に見てよ。うちの両親ったらドラマ嫌いでさ、いつもバラエティーばっかりなんだ。ほんと、ノリ悪すぎ！　あんたの両親と入れ替わってたらよかったのにね……」

遥の心臓がこの時再び鼓動を開始したのは言うまでもない。遥は心の中で何度も何度も柊ありがとうと繰り返した。

番外編　初恋は永遠に　6

柊が、じゃあと言って、こたつから出た。家に電話をかけるためだ。昔はこのパターンでよく泊まり合いをしたものだが、当然のごとく男である遥は今ではもうその仲間には加わらない。それは柊と希美香の専売特許になっていた。

でも、今夜は違う。柊と一緒に夜更かしをしてビデオを見て過ごすのは、まぎれもなく遥本人なのだ。遥は逸(はや)る胸を抑えつつも、ひとりでにやけてしまう口元を止めることは出来なかった。

「もしもし、わたし。うん、うん。それでね、今夜、こっちに泊まるから」

柊の声が心なしか弾んでいるように聞こえるのは気のせいだろうか。遥は受話器を通して漏れ聞こえてくる彼女の母親の声に、耳をそばだてた。

『おばあちゃんに迷惑だよ。今夜は帰っておいで』

今、なんて言った？　今夜は帰っておいでだと？　少し耳が聞こえにくくなった祖母のために、受話器の音量設定を大きくしてあるので、向こうの声がしっかりと遥にも届く。これは大変だ。目の前の柊の表情もとたんに曇ってしまった。

「ええっ！　なんでだめなの？　おばあちゃんに絶対迷惑かけないから……。それに遥と夜中にビデオ見る約束したのにい、お願い！」

『それがダメだっていうの！　あんたも……ダメよ……子供じゃ……今夜は帰っておいで！』

途中、母親が声をひそめたせいなのか、はっきりと聞きとれなかったが……。おおよその見当はつく。遥はこの危機をどう乗り越えるべきか、脳内のありとあらゆる知識を総動員して、超高速で考えを巡らせ始めた。そして、柊から奪うように受話器を取り上げた。

「すみません。俺が強引にひいらぎを誘ったんです。合唱コンクー

ルや文化祭の打ち合わせもしたいんで、ビデオを見ながら話を進めていこうと思って……。心配しないで下さい。……離れのリビングです。両親もいるので大丈夫です……」

どこまでも真剣に、そして精一杯背伸びをして、柊の母親と対峙しているというのに……。そんな遥の気持ちを踏みにじるように、隣で柊がプッと吹き出した。

「は、はい。じゃあ……。おやすみなさい」

まだ電話中の自分をくすくすと含み笑いをしながら見ている柊にあきれつつも、どうにか彼女の母親を納得させて、遥は電話を切った。

「……というわけで、おばちゃんOKって言ってくれたぜ。おまえ、言い方へたくそ。ふっふっふっふ……。今夜は楽しみだなあ。俺のお笑いの原点を、よおーっくおまえに伝授するからな。ずえーったいに途中で寝るなよ！」

とにもかくにも、事態は好転したのだ。遥の方こそ、ひしひしとこみあげてくる喜びを抑えきれずに、訝しがる柊をよそに怪しい高笑いを響かせていた。

離れのリビングの時計の針はもう真夜中の一時を指している。ようやく二本目の録画ビデオが始まったばかりだと言うのに、遥は左側の肩に不自然な重みを感じて、そこに目をやった。

なんということだ。柊の髪が遥の肩にかかり、すーすーと規則正しい寝息まで聞こえてくる。寝てるの……か？

「おい、柊。おい……」

遥は二階に寝ている家族を起こさないように、小さな声で柊を呼んだ。なのに返事はない。

「こら、寝るなよ」

彼女の背中に腕を回し、そっと揺り動かした。ふあ～と声とも寝息とも区別のつかない音を発した後、そのまま遥の膝に崩れるように倒れて、動かなくなった。今度こそ本当に眠ってしまったのだ。

遥は膝の上の無防備な彼女をどうしたものかとしばし天井を見上げた後、そっと床のクッションの上に頭を置き換えて、毛布を取りに行くことにした。静かに息を潜めて二階に上がる。初めは一枚だけ毛布を手にしたのだが、途中で思いなおしてもう一枚手に握る。足音を忍ばせ、二枚の毛布を抱きかかえるようにしてリビングに戻った。

床の上の柊はさっきの形のまま、横向きになってすやすや眠っている。なんて図太い神経をした女だと思いながらも、遥は毛布をそっと彼女の身体にかけてやった。エアコンのタイマーを設定して、緩く暖房を効かせる。そして彼もその横に添うようにして横になり、もうひとつの毛布をかぶった。

初め遥は自分の部屋に戻ってベッドで眠ろうと思っていた。でも……。彼女を床の上にひとり残して自分だけベッドに眠るのはいかがなものかといっぱしの罪悪感に苛まれる。いや、客観的に見れば二人っきりでここにいる状況の方がよほどまずいはずだが、遥は純粋に柊を放っておけない気持ちになって、そばに居ようと決めたのだ。

一時停止にしていたビデオ画面を解除して再生する。音量を最小限にして番組を見続けた。ところが、番組内容がちっとも頭に入ってこない。寝返りを打ってこっちを向いた柊の寝顔が遥の視界を埋め尽くした瞬間、もはやビデオを見ているどころの騒ぎではなくなる。

さっき、急激に伸びた身長を確かめるため鏡の前に立った時、すっと絡められた彼女の細い腕の感触がよみがえり、心が落ち着かなくなってきた。

――高嶺の花のこのひいらぎちゃんが、背が高くなったご褒美に遥とデートしてあげるんだから……。

目をくりくりさせながらそう言った柊の声が、遥の心に何度もこだまする。

そっと手を伸ばし、彼女の頬に指先を近づける。もう少しで届くというのに、なぜか触れるのがためらわれる。頬を撫でて、その柔らかそうな唇に触れて、抱きしめたいと思うのに、そんな勇気はどこにもなくて。柊が起きている時にも、告白できるチャンスはあったはずなのに、結局何も言えなかった……。

遥は何かを決心したようにむくっと起き上がるとそのまま台所に行き、コップに直接水道水を汲んで一気に飲み干した。そして再び彼女の横に寝転がる。

すると柊はごそごそとまた寝返りを打ち、今度は向こう側を向いた。遥の目の前には、思いのほか小さな柊の背中が姿を現す。遥はふうーっと大きくため息をつき、どこかほっとする自分を感じながら、その背中に毛布を引っ張って掛けてやった。そして、ゆっくりと目を閉じた。

番外編　初恋は永遠に　7

もうすぐ合唱コンクールがある。クラスごとに練習した混声合唱の出来栄えを競い合う行事だ。ここで優勝したクラスは文化祭の大舞台に立つという栄誉を得る。

一年生の時は物珍しさもあって、それなりにどのクラスも盛り上がりを見せていた。昼休みも時間を惜しんで練習したりもした。ところが二年生になると、男子の変声期も進み、皆が歌うことに消極的になってくる。そして三年生。せっかく男性パートの低音も安定してきて、美しいハーモニーが期待できる学年であるはずなのに、にわかに受験モードが蔓延し始めて落ち着きがなくなり、適当にこなせばいいというマイナスの空気が漂い始めるのだ。

遥のクラス担任の梅谷先生は、若さと持ち前のバイタリティーで、クラスの皆を叱咤激励してなんとかやる気を出させようと日々努力を惜しまない。クラス委員長の遥は副委員長の女子と共に、放課後、何度も職員室に呼び出され、どうしたらみんなのやる気をひき出せるのかと意見を聞かれ話し合ったりもした。

そんな中、停滞ムードを一掃するように藤村と柊が自ら手を挙げて、指揮とピアノ伴奏を引き受けてくれたのだ。二人の行動力に感化されたクラスメイト達は、次第に協力的になり、時間外の練習も自主的に参加するようになってきた。

前評判では合唱部のメンバーが多い三組が優勝候補だと言われている。ただし四組も侮れない。両者の教室の前を通った時に聞こえてきた課題曲の仕上がり具合は予想以上で、甲乙つけがたい。それは遥の闘争心を煽るには充分すぎるほどの完成度だった。

教室での練習にはピアノは使えない。副委員長が家から持ってきた小さなキーボードだけが頼りだ。柊が足りない鍵盤をどうにか駆使して、アレンジを加えた伴奏を奏でる。そして藤村の指揮に合せ

て歌うのだが、これがまた、心もとないことこの上ない。
柊の伴奏などほとんど……いや、全く無視して、適当にリズムを刻むのはあたりまえ。強弱の合図も何もあったもんじゃない。それでもなんとか歌になっているのは、クラスの仲間達の藤村に対するささやかな思いやりの表れなのだろう。
本物のピアノできちんと前奏を入れて歌う場合を想定してみる。果たして藤村がどうなるのか……。想像するだけでもおぞましい。

そんな時、昼休みが終わって席に着いたばかりの遥のところに柊がやって来た。学校ではよほどの事がない限り、暗黙の了解でお互いあまり干渉しないように心がけているのだが。何か言いたげな柊に遥は、何？　と目で訊く。相手も心得た物で、やはり目で応えるのだ。あのね、と。そして……。
「今日ね、藤村がうちに来るんだ。ピアノと指揮を合わせる練習に……」　とそれだけ言って、瞬く間に自分の席にもどってしまった。藤村と練習か……。遥はちょうどそのことを不安に思っていたところだったので、ますますやる気を出している二人に安堵した……のも束の間。この柊のさりげない伝言がその後の遥を極度の不安に駆り立てる。
そもそも柊は、藤村がうちに来るのと言っただけで、遥も来てとは言わなかった。おもしろくない。遥は自分が呼ばれなかったことに、無性にいら立ちを覚える。
そうなのだ。このごろ、頻繁にあの二人が接近しているように思えるのだ。遥は親友の藤村にかぎって柊を横取りするなんてことはないと思いたいのだが、柊が藤村に好意を持っているのだとしたら……。藤村の心変わりも現実味を帯びてくる。二人きりにさせていいわけがない。
五時間目も、六時間目も、結局先生の説明が全く頭に入ってこないまま無駄に時間が過ぎてしまった。

ホームルームも終わり、柊が藤村に何か耳打ちをして教室を出て行った。きっと四組の夢美を誘いに行ったのだろう。藤村にちょっと待ててねとでも言ったのだろうか。

遥は急にあることがひらめいたのだ。自分も柊達と一緒に帰って、そのまま藤村と共に彼女の家になだれ込もうと。これなら誘われていようとなかろうと、自然な流れで二人に同行できる。そして、二人の仲を監視できるというおまけもつく。遥は帰り支度をする藤村に声を掛けようと足を踏み出したその時だった。

「ねえ、どーの君。今からぁ、ちょっといい？」

遥を通せんぼするように、四組の川田梨乃（りの）が遥の前に立ちはだかった。

「B棟の東階段一階のところに、ホソっちがいるんだけどぉ。そこに来て」

以前より迫力を増した川田は、禁止されてる化粧もはばかることなく念入りに施し、描き足したとわかる細い眉を吊り上げて、なかば強制的に遥を引っ張っていく。

遥は去年のクリスマス会を思い出していた。柊の家にクラスの女子全員が集まったあの日、この川田と、ホソっちこと細村に呼び止められていろいろ訊ねられたことを。それ以降、あの二人からは特別何も言われなかったのだ。柊がうまくごまかしてくれたのだと思ってとっくに忘れていたのに、今ごろいったいどうしろというのだろう。何かよからぬことがおこりそうなのはもう間違いない。

悪い、今日はだめだという遥の言葉も軽く無視されて、川田の後ろを恨めしそうについていくはめに陥る。

鼻歌交じりの藤村はそんな遥のアクシデントにも気付くことなく、カバンを持って遥とは反対方向の四組の教室前に向かって行った。

――藤村の奴、やけに嬉しそうにしやがって……。柊に何かしてみろ。ただじゃおかないからな。

遥の嫉妬は、罪のない友人の上にも、容赦なくふりかかるのだっ

た。

番外編　初恋は永遠に　8

「ねえ、どーの君、早くどっちか選んでよ！」
一階と二階の中間にある踊り場で、遥は二人の女子生徒に迫られていた。それもあろうことか、川田と細村のどちらかを付き合う相手として選べと言うのだ。……ありえない。
「だってさ、もう部活も引退したんだしぃ。ひいらが言ってたもん。あの時は部活以外何も考えられないってね。今はヒマでしょ？　どーの君なら今さらガツガツ勉強しなくても、余裕だしぃ」
あの時というのは、去年のクリスマス会の時のことを言っているのだろう。柊がビシッと断ってくれたとばかり思っていた遥にとってこれはまさしく寝耳に水、そして晴天の霹靂としか言いようがない。川田が甘えたような上目遣いで遥を見上げる。
「黙ってないで、早く決めてよ。あたしとホソっちは二年の時からずっとあんたのファンだったんだからさぁ。じゃあ、一ヵ月ごとに交替で付き合うってのは、どぉ？」
「はあ？」
もう遥には川田のひと言ひと言がほとんど理解不能だった。
「ど、堂野君。そ、その。あたしたちのどこが、不満なの？　それとも、もう誰か他の人と……付き合っちゃったとか……」
今まで川田の言うがままだった細村がやっとのことそれだけ言った。遥は返事に困った。断る理由はちゃんとある。好きな人がいるから誰とも付き合いたくないと言えばいいのだ。ところがそれを平気で言ってのけるほどの度胸は、残念ながらまだ遥には備わっていない。
「えっと……その……」
こんなところでもたもたしてていいのだろうか。早く結論を出して家に帰らないと。……柊が危ないのだ。今こうしている間にも、どんどん柊と藤村の距離が縮まっていくような気がして、いても立

ってもいられなくなる。好きな人がいるから無理と言えばいいだけなのに、遥は焦るばかりで、うまく言葉に出来ない。
「もおーっ！　決められないなら、あたしたちジャンケンするから。勝った方と付き合ってよ。じゃあ……」
二人が向かい合ってジャンケンの音頭を取りはじめた時、上階から軽快なリズムで下りて来る靴音が聞こえてきた。その音は段々大きくなり、遥たちのいる踊り場で止まった。
「あっ……」
遥と顔を見合わせたその相手も目を見開いて同じように驚きの声を漏らす。元生徒会長で今は二組の委員長であるその男子生徒は、思いなおしたように遥に言った。
「急なんだけど、合唱コンクールのことで全学年の委員長が音楽室に呼び出されてるんだ。三年は君だけまだだったから……。先生に探してこいと言われて……」
遥は彼から目を逸らし、「わかった」　とだけ答える。そして踊り場で口をあんぐり開けている二人の女子を見た。
「ということだから、俺、行くわ。それと……。俺、そういうの、無理だから。じゃあ」
遥はまだ固まったままの川田と細村をそこに残し、先に上がっていく二組の委員長の後を追うように階段を駆け上がる。その時、遥の背後から再び信じられないような川田の声が聞こえてくるのだ。
「あたしさ、やっぱ、おおこーちに乗り換えよっかなぁ。ホソっちはどうする？」
……今、なんて？　もう、いい加減にしてくれ！　あまりに勝手な二人に、遥は断崖絶壁の上から大声で叫びたい気分に駆(か)られた。

音楽の先生から、昼休みと放課後のピアノの使用を全クラスで割り振った練習予定表を渡され、短い注意事項の伝達があった。その後、予想外に早い解散になり、教室にカバンを取りに戻った遥は猛スピードで家に続く坂を上って行った。

制服を脱ぎジャージに着替えた遥は、台所で牛乳を飲みながら、どうやって隣の家に行こうかと策を練っていた。用もないのにふらふらとここから出て行くわけにはいかない。こんな時こそ、夕食材料を何か借りてきてと用事を言いつけてくれればいいのにと、リビングのソファで鼻歌交じりに編み物をしている母親を恨めしく思う。

遥は柊の家から聴こえるピアノの音色に耳を傾けながらも、一階を何をするでもなくうろつく。藤村が隣にいるみたいだから俺もちょっと行ってくる、とさりげなく母親に言って家を出れば怪しまれないか……などと思っているところに電話が鳴った。

「遥。出てくれる？」

編み物の手を止めた母親が、振り向きざまに遥に言った。遥は面倒くさそうに、ああと言って受話器を取る。するとそこからは、今、まさに思い悩んでいた相手の声が遥を瞬時にふわっとピンクのベールで包み込むのだ。遥は二つ返事で受話器を置くと、あくまでも呼び出されて仕方なく行くというスタンスを母親の前で貫きながら、柊の家に向かった。

遥の顔を見るや否や、柊も藤村も、すがりつかんばかりに彼ににじり寄る。

「遥。わたし、どうしたらいいかわかんないよ。藤村ったら、もう無理だから指揮者を辞めるって言い出すんだよ」

「お、俺、やっぱ音楽だけはダメみたいだ。バスケみたいにカッコよく決められねえー。おまえ、変わってくれよ～～」

藤村の自信喪失ぶりは、相当、重症だった。遥は、急に身体中の力が抜けていくのを感じていた。今のところ、この二人に心配したような事態は起こっていないようだ。ひたすら指揮の練習だけに没頭していたのだろう。このまま取り越し苦労に終わってくれればいいのだが。遥はそう願いながらも、まだ完全に安心しきったわけではなかった。引き続き二人の様子にアンテナを張り巡らせながら、藤村と共に指揮棒代わりの菜ばしを大きく振り回す。

こうなったら身体で覚えこませる作戦しかない。歌い出しの部分を繰り返し練習する。運動神経だけは誰にも負けない自信のある藤村は、どんなに腕を振り続けていても、絶対に疲れを口にしない。見上げたスポーツマン根性だ。

三十分もすると、ほぼ完璧な仕上がりを見せるようになった。遥が指示をしなくても、柊の伴奏にうまく合わせられるようになっている。いや、伴奏をリードするくらいにまで、正確なリズムを刻み出せるようになってきたのだ。信じられないくらいの進歩だ。

藤村自身もおもしろくなてきたのだろう。いつしか強弱も手の振りで表現できるようになり、いっぱしのマエストロ気取りだ。長身の藤村が、より一層大きく見える。遥がこうやってみればとアイデアを出せば、藤村も負けてはいない。観客にアピールする方法をいろいろあみ出していく。

次々と意見を出し合っているうちに、いつのまにかテーブルにジュースとお菓子が並んでいた。柊の仕業に違いない。

「さあ、おやつにしよう。藤村、うまくなったね」

柊が、労いの言葉をかける。

「おっし！　俺やっぱ、指揮者やるよ。蔵城、がんばろうぜ！」

藤村の手と柊の手がパチンと重なる。……なぜにここでハイタッチ？　遥の目の前が一気に灰色に変わった。

番外編　初恋は永遠に　9

遥は、自分の部屋で数学の宿題に取り組みながら、ふと昨日の藤村の宣言を思い出し、シャーペンの頭を意味もなく何度もノックしていた。

――俺、文化祭終わったら彼女に告白するつもりだからよろしく。

藤村は指揮の練習が終わった後、遥と柊を前に、きっぱりとそう言いきったのだ。藤村が柊の親友でもある夢美のことを好きだというのは、遥も昔から知っている。まさかこのようなタイミングで藤村が告白宣言をするとは思ってもみなかった遥は、動揺を隠せなかった。柊に対して足踏み状態から抜け出せない自分が、ますます情けなく思えるのだ。

そのひと言で藤村が柊に気持ちが傾いているわけではないと証明されたのだが、依然、遥の心の中はもやもやしたままだった。どうも柊がショックを受けているように見えたからだ。柊が藤村を気にかけているとすれば尚更のこと、昨日の藤村の告白宣言は彼女にとって辛い出来事だった可能性がある。

そのことと関係があるのか、今日一日、柊の態度がどこか怪しげだった。何か隠し事でもしているように周囲をきょろきょろ見回し、落ち着きのないこと、この上ない。柊のおどおどした目が脳裏によみがえる。

遥が藤村と一緒に学校を出る時、柊は校舎一階ロビーの黒板式掲示板に書き込みをしていた。掲示委員会の当番の仕事だ。ところが柊がいつになくよそよそしい。意識的にこっちに目を合わさないようにして無視しているのがありありとわかるのだ。おまけに藤村までもが柊から不自然に目を逸らし、そそくさとそこから立ち去ろうとする。やっぱり普通じゃない。

遥は、どこか煮え切らない様子の藤村に疑念を抱きながらも、途中でじゃあまた明日な……と言って別れ、腑に落ちないまま今こうやって家の机に向かっているというわけだ。

遥は邪念を追い払うように頭をぐるぐる回して、深呼吸を繰り返す。そして手のひらでパンと頬を叩き、再び宿題に取り掛かった。コンパスで半径三センチの円を描き、接線を引く……そして……。

「やってらんねえよ、まったく……」

天井に向かって乱暴に捨て台詞を吐いた後、定規もシャーペンもノートの上にぽいっと投げ出した。そろそろ潮時か……。

これはきっと、自分も早く柊に気持ちを伝えろということなのかもしれない。遥は、藤村の勇気にあやかって、ここは男になる時ではないかと結論付けた。昨日、母親から朗報を聞かされたのだ。来年生まれてくる赤ん坊が男の子であると。

それはつまり、堂野家の跡取りがもう一人増えたということを意味する。遥は藤村だけでなく、まだ顔も見たことのない弟にも背中を押されたような気がしていた。

遥がいつの頃からか描いていた夢。それはこの村で、柊と一緒に暮らす夢だ。今も同じようなものだが、決定的に違うのは、遥が堂野ではなく蔵城を名乗っているところ。そして立派な大人になった自分の隣には、誰よりも美しい花嫁がいるのだ。よく知ったその女性の年齢は二十五歳くらい。あと十年もしたら、本当にそんな日々が待っているのだろうか……。

夢とも現実ともしれぬ白昼夢に浸っていると、何の前触れもなくガチャッと玄関の戸が開く音が遥の耳に届く。ちょうど遥の部屋の真下が玄関になっているので、人の出入りが振動を伴って伝わってくるのだ。こうやって入ってくるのは、家族と祖母、そして柊の家族しかいない。もしかして、柊？　遥は部屋の戸をすかし、階下の気配を伺う。

「綾子さ～ん。いる？」
遥はその瞬間、俄(にわ)かに落胆する。そんなにうまい話がそこかしこに転がっているはずがないとわかっていながらも、柊だと期待してしまう自分を不甲斐(ふがい)なく思ってしまう。良く考えてみればわかることだ。希美香が部活で帰りが遅いのを知りながら、彼女がここに来るわけがないのだから。
突如、柊の母親の素っ頓狂な声が聞こえる。いったい何事だと、遥は耳をそばだてた。
「……なのよ！　もうカッコいいったら、ありゃしない。もちろん、はるくんもいい線いってるんだけどね」
――何の話だ？　遥は眉間に皺を寄せたまま、息を潜め続けた。
「お姉さん、私も知ってるわよ。希美香が前にそんな人がいるって言ってたもの。ファン倶楽部まであるってね」
「へえ～～。そうだったの。なるほどね。あの子なら絶対ありえる。柊ったら照れちゃってね、カレシじゃないなんて言ってるけど、本当のところはどうなのか……」
――カレシ？　誰の？　聞き捨てならない会話に遥の眉がピクッと動いた。
「なんでもいいのよ。クッキーかチョコか。あったら分けて欲しいんだけど。うちのお茶菓子、全部切れちゃってて……」
「ちょっと待っててね、お姉さん。確か、頂き物のクッキーがあったはず。……それにしても素敵な話ね。えっと、彼、なんて名前だったかしら」
台所の方に移動したのだろうか。遥の母親の声が少し遠のいた。
「大河内くん」
「ええ？」
「オ、オ、コ、ウ、チ、くん」
柊の母親がおもいっきりかつぜつ良くオオコウチと名を唱えた。
遥の額に季節はずれの汗が滲む。大河内……。大河内といえばただ一人。昨日、踊り場で絶体絶命の危機を迎えていた時、皮肉なこと

に、遥を救う形で現れたあの男だ。

遥は気付いた時にはもう家を飛び出していた。目指すは柊のところ。そこしかない。以前から何もかもが気に食わない大河内に、今こそ遥は、最大の危機を感じていたのだ。藤村に抱いていた疑いなど、この際、取るに足らないことと思えるくらいに。

開けっ放しの玄関から中を覗き、そっと家に上がりこむ。長い廊下を縁側伝いに右に進み、一番奥の柊の部屋のひとつ手前で立ち止まった。ボソボソと声が聞こえる。間違いない。大河内の声だ。でも、なんで？　どうして大河内がここに？

大河内のどこか危うさを含む声に瞬時に反応した遥は、力任せに襖戸を空けて、中に踏み込んだ。

番外編　初恋は永遠に　１０

「大河内、悪いけど、こいつ付き合ってる奴いるから……。柊、おばあちゃんが呼んでるから早く来い」
遥は、自分でも何を言ってるのかわからないくらい、気が動転していた。祖母が呼んでいるだなんて、全くのでたらめだ。とにかく柊を大河内から遠ざけたかった。そして、大河内にだけは先を越されたくなかったのだ。
「そ、そんな急に！　わ、わかったから。今、行くから！」
遥を見るなり、飛び上がらんばかりに驚いている柊の腕を掴み、大河内を睨みつける。大河内が何か言いたげに口を開きかけたが、遥の気迫はそれすらも許さないほど、彼を威圧する。
ついに大河内もあきらめたのか、遥に不服そうな顔を見せたあと、黙って部屋を出て行った。

祖母の家に向かう途中で、遥の家からもどってきた柊の母親に出くわす。少し先を歩く大河内が　「おじゃましました……」　と言って頭を下げた。
「あら、大河内君。帰るの？　もう少しゆっくりしていっていいのよ。クッキーもあるのに」
母親が必死になって引き止めようとするのだが、努力も虚しく大河内は苦笑いを浮かべるだけでもう一度軽く会釈をしてそのまま立ち去って行った。
「おばちゃん、ちょっと柊借りるわ」
すれ違いざまに遥がそう言って、柊と共にドタドタと駆けて行く。何が起こったのか理解に苦しむ母親を尻目に、遥が強引に柊を祖母の家まで連れて行ったのだ。

祖母の家の中はシンと静まり返っていた。いつも祖母だけしかい

ないのだから、静かなのはあたりまえなのだが。事情を呑みこめていない柊は、室内をキョロキョロと見回した後、怪訝そうに遥を見る。

「おばあちゃん、いないみたいだね。ねえ遥、おばあちゃんが呼んでたって……うそ？」

「ばあちゃんは今夜、村の寄り合いだから……。家にはいないさ」

遥はそんなの当然だとでも言うように、できる限りしらっと答える。そしていつも祖母が使っている居間の灯りを点けてこたつに足をもぐりこませた。遥を見下ろすように突っ立っている柊に、斜め向かいの座布団をトントンと叩いて座るように促す。

柊は最初しぶっていたが、ふぅーっとため息をひとつついて、ゆっくりとそこに腰を下ろした。

「おまえの部屋に急に押しかけてごめん……。びっくりしただろ？」

柊を覗き込むようにしながら遥が言った。

「そりゃあもちろん。まさかあのタイミングで遥が来るなんて、思いもしないもの……」

柊がいかにも寒そうに両手をこたつ布団の中に入れて、瞬(まばた)きを繰り返しながら言った。

「俺も、おまえの部屋の前に着いたとたん、大河内の声が聞こえて驚いたさ……。さっきおまえんちのおばちゃんが、何か客に出せそうなお菓子はないかってうちにやって来たんだ。すっごいハンサムな元生徒会長が来てるって母さんと話してるのを聞いたとたん、俺の頭ん中に赤いランプがみごと点灯して……」

遥は言ってしまってから少し後悔した。これって、あからさますぎないだろうかと。でもこれで柊が自分の気持ちに気付いてくれるのなら、かえって手っ取り早いのではと思い直す。

「猛ダッシュでおまえのところに駆け込んだってわけさ……」

柊、気付け、と祈るような気持ちで、遥は続ける。

「そ、そうだったんだ。……ごめん。遥に知られたら怒られると思

って、大河内君が来るってこと、内緒にしてた……」
遥の顔から瞬時に血の気が失せる。
――怒られると思って内緒にしてた……だと？　ってことは何か？　知られたらまずい何かがあるということだよな。
遥は、徐々に心穏やかでいられなくなる。
「大河内がおまえを誘ったのか？　……それでおまえ、嬉しくて家に上げたのか？」
遥の鋭い眼光が柊を捉える。
「う、うん。断れば良かったんだけど、二年の時仲が良かったし、別にいいかなと思って……」
遥は何か鉄の塊のようなもので、脳天を叩き割られたような衝撃を受けた。それって……。大河内の誘いに、いや、交際の申し込みに同意するはずだったということなのだろうか。身体の奥の方から怒りがふつふつとわいてくる。
「おまえがいいのなら、俺、別に止めなくてもよかったんだな……。でもおまえ、本当にあいつのことが好きなのか？」
本当はこんなこと訊きたくなんかなかったのだ。でも、軽い気持ちで男の誘いに乗った柊をこのまま見過ごすわけにはいかない。遥は肝を据えて、柊の返答を待った。
「だからさあ。好きとか嫌いとかじゃなくて、同じ学校の元クラスメイトとして、困っている時はお互い助け合うのは当然かなって、そう思って……」
ますます我慢ならない。あまりにも矛盾点が多すぎる柊の恋愛論に、遥の怒りもついに沸点に達してしまう。
「じゃあおまえは、好きでもない奴と、元クラスメイトというだけで付き合ったりするのか？　おまえって奴は、そんな風に男をたぶらかすようないい加減な女だったのか？」
遥はコタツの天板をバンと叩いて怒りをあらわにする。おまえは絶対に間違っていると。
柊はそれを見て、口をポカンと開けたまま、キョトンとしていた。

それを見た遥は……。どこか空気が行き違っているような、かすかな違和感を覚える。
「遥？　あんた、なんか勘違いしてない？　わたし、大河内君と付き合ってないし、男をたぶらかしたりなんかもしてないよ！　大河内君に指揮のやり方教えてって、頼まれただけなんだけど！」
――今、なんて言った？　遥は柊の言葉を何度も脳内で繰り返すうちに、自分が大きく誤解していたことに気付く。
「はあ？　し、指揮ぃ？」
「そう。大河内君、二組の指揮者なんだって。藤村みたいに教えてって。でも、その……。結局練習なんて全くしなかったんだけど……。だから、遥があの時来てくれなかったら、今頃どうなっていたか、とは思う……」
遥は指揮の練習と聞いたとたん、ふにゃふにゃとこたつの天板にうなだれる。まるで、波打ち際に打ち上げられた、大きなクラゲのように。
「もう……。おまえホントに心配させすぎ。俺はてっきり……」
遥は、隠さずに初めからそう言ってくれればよかったのにと思いながらも、次第に気を取り直し始めていた。
「でもあいつ、さっきおまえに言い寄ってただろ？　たしか去年の今ごろだったかな。あいつの姿を家の周りでちょくちょく見かけたんだ。最初はチャリでどこかに出かけるのかと思ってたけど、道の途中の木の陰からおまえの家をじっと見てるんだ。俺、ピンと来たもんね」
「ピンと？」
「そう。おまえが二年の時、あいつと仲がいいのは希美香に聞いて知ってたから、もうこれは間違いないってな。あいつ、おまえに気があるんだよ」
遥が一番危惧していたのはこのことだった。柊は、本人こそ気付いていないかもしれないが、かなり人気がある。それも、真面目風なたぐいの人間に好かれる傾向があるのだ。自分を着飾らずそれで

いて清楚な感じが男心をくすぐるのかもしれない。そういう遥も、ちゃっかりそのうちの一人なのだが。

「う、うそーーっ！　そんなの、今初めて聞いたよ」

しばらく呆然としていた柊が、話の趣旨を解したとたん、こたつの上に開いた両手をバーンと載せて叫ぶ。普通一般の女子はここで口元に両手を添えて恥ずかしげにうっそーと言うのだろうけど、柊に限ってそんな生易しいリアクションは期待できない。いつだってストレートだ。

「そりゃそうさ。今日、初めておまえに言ったんだからな」

遥は、柊が大河内の気持ちに気付いていなかったことに満足していた。

「やめてよ。ありえないーー！」

柊は本当に嫌そうに大きく頭（かぶり）を振る。遥はそんな柊の様子を見て、ますます悦に入った。

番外編　初恋は永遠に　１１

「で、でもね、遥」
こたつに肘をついて手のひらに顎を乗せた柊が、目をくりくりさせながら言った。
「さっきの大河内君、いつもの大河内君じゃなかった。遥が言ったみたいに、ちょっとはそんなこともありかな？　なんて思った……。ほんとに、ちょっとだよ。でもあの大河内君だよ？　モテてモテてモテまくりの彼が、わたしなんかに興味持つのかな？　自慢じゃないけどわたし、今まで一度だって、誰からも告白なんてされたことないし、美人でもないし、愛想もそんなに良くないし……」
柊の声が自信なさげにだんだん小さくなっていく。
「確かにそうだよな」
遥は柊の言うとおりだとうんうんと頷く。ただし、口にこそ出さないが、ひとつだけ柊の意見と食い違うところがあった。少なくとも遥には、柊が誰よりもきれいに見える。表情豊かな愛らしい目と形のいい柔らかそうな唇。そのどれを取っても、遥の胸をときめかせるのには充分すぎるほど美しい。
遥がついそんなことを考えながら柊に見とれていると、何が気に入らないのか急に頬を膨らませ、反対側を向いてこたつの上に突っ伏してしまった。もしかして、柊は自分の言ったことを否定して欲しかったのだろうか。遥は、そんな子供っぽい柊が無性にいじらしくて、彼女には悪いが、愉快爽快な気分になる。
「あはははは……！　そんなに拗ねるなよ。おまえのいいところは俺が一番良く知ってるから、それでいいだろ？」
柊が、はっとしたような眼差しを浮かべながら、遥のいる側に顔を向けなおした。遥は柊と同じように背中を丸めてこたつの上に直接頭を乗せ手を伸ばし、柊の頭をそっと撫でる。ずっと触れてみたいと思っていた柊の髪に、手のひらが、指が……その感触を確かめ

るようにゆっくりと滑るように動く。

遥はこのまま時が止まればいいと思った。二人だけの世界で、こうやってまどろんでいたい……。でも長くは続かなかった。さっきの柊の部屋での出来事が遥の脳裏をかすめる。こいつだけは誰にも渡さない、大河内になんか取られてたまるかと、持ち前の負けん気がむくむくと湧き上がってくるのだ。

すると柊がもそもそと動き出した。触られるのが嫌だったのだろうか……。遥はふと我に返ったかのように、身を起こすと、その手を柊から離した。

少し遅れて上半身を起こした柊が、またさっきのように頬杖をつく。幾分頬が紅潮しているように見えるのは、気のせいだろうか。

「ねえねえ遥、わたしのいいところってどんなところ？　教えて……」

柊が遥を真っ直ぐに見ながらそんなことを訊く。遥は一瞬ためらったが、柊の一途な眼差しに誘われるように、思いつくままに語り始めた。

「そうだなあ。友達思いだろ？　それに力持ち。ピアノうまいし、よく食う。そこそこ勉強できて、そこそこかわいいところかな？」

力持ちによく食うというのはまずかったかな……。遥は言い終わると同時に後悔した。こういうことは女の子にとっては、あまり触れられたくない長所なのかもしれない。男同士では立派に褒め言葉のひとつなのだが。でも予想に反して、柊は機嫌がいい。遥はフォローの意味もこめて、とっておきの情報を告げることにした。そして、そのまま自分の気持ちも伝えられれば……などと策略するのだが。

「おまえな、誰にも告白されたことないって言ってるけど、かなり損してるよなあ……多分」

「なんで？　わたしの性格が悪いの？　それとも顔のせい？」

――柊、ナイスだ。
遥は、この目の前の幼なじみが、言いようの無いほど愛おしくなっていく。そして、とうとう堪えきれなくなり……。
「ぶはははは……！」
柊には悪いと思いながらも、込み上げてくるおかしさを抑えることなどできなくて。
「俺がいるから、誰も何も言ってこないんじゃない？　俺に言ってくる女子も必ずおまえのこと訊くぞ。そりゃー俺たち、恋人同士でもなんでもないけど、見た目付き合ってるみたいに見えるらしいからな……」

遥は徐々に自分の声が、他人の声のように感じていた。本当の自分がどこか遠くから自分を眺めている、そんな光景だ。遥は小さく息を吸った。そして、誰かが遥の背中をぐっと押したように感じたその時。
「なあ、柊。いっそのこと俺と付き合ってみる？」
遥の心臓が最高心拍数を記録した瞬間だった。
「どう？　ひいらぎちゃん……」
声が裏返る。とても平静ではいられない。遥は至って真面目だった。そして真剣だった。
――柊、聞いているのか？　どうなんだ。ダメなのか？　なんとか言えよ……。
遥は普段は信じたこともないテレパシーとやらを、ダメもとで駆使する。ＳＦ雑誌も読んでおくべきだったか……。
「じょ、じょ、冗談でしょ？」
強張っている表情を無理やり緩めたような、何とも言えない複雑な笑みを浮かべた柊が、最初に発した言葉だった。遥は脳天に、本日二度目の衝撃を食らった。なんで、これが冗談なんだ？　ヒトが、どれほどの想いを込めて言ったと思ってるんだと腹立たしさを覚える。そっちがそう出るなら、こっちにも考えがある。

遠くから眺めていたもう一人の遥が舞い降りて、柊を意地悪く見る。
「うそだよーーん。おまえ、本気にしたろ？　まあ、もしまた大河内に迫られたら、俺と付き合ってるとでも言って断ってくれていいから。それに俺達が付き合うったって、これ以上どうしようもないしな。だろ？」
ああ、またやってしまった……。遥はせっかくいいところまでいったにもかかわらず、振り出しに戻してしまった自分の言動に、げんなりする。
「ま、まあね」
柊も柊だ。遥がふざけているとわかった瞬間、いつものリラックスした表情にもどるのだから。遥は自分の独り相撲だったことに、ますます落胆を隠せない。この目の前のお嬢さんを落とせる日はまだまだ遠い。遥は、また一から策を練り直し、決意も新たに再び戦いに挑むことを密かに誓うのだった。

番外編　初恋は永遠に　１２

「では、三年生の結果を発表いたします。優勝は……」
遥は唇をぎゅっと引き結び、主任の先生の次の一声を待った。一組でありますように……と祈りながら。
今日の日のために、早朝、昼休み、放課後と時間を惜しんで練習に励んできたのだ。今朝の最後の練習の時、感極まって泣き出す女子もいたくらいで、充分にクラスのみんなの気持ちがひとつになっていたはずだと遥は自分を奮い立たせる。
藤村の指揮もしなやかで上々の仕上がりだった。柊のピアノ伴奏も完璧で、少し声量の足りないところを除けば、非のない合唱だったと思う。
遥の中学生活最後の合唱コンクールの結果が今まさに告げられようとしていた。
「優勝は……四組。二位、一組。三位……」
同時に湧き起こる四組の生徒達の悲鳴とも叫びともつかぬ歓声を存分に味わった後、最前列に座っている遥の背後で、クラスメイトのため息が聞こえる。二位だった。クラス委員長が前に呼ばれ、順位に沿ったトロフィーや楯が授与される。遥は、二位と記された楯をクラスのみんなに掲げ、仲間たちの功績を労った。

教室に戻ってからも、クラスの皆の表情は晴れ晴れとしていた。やることはやったという、満足感の表れなのかもしれない。遥にしてみれば、それは救いでもあった。委員長としての責務は全うしたのだから。
音楽の先生の講評に、一組のことが触れられていた。例年ならば充分に優勝できる実力を備えた出来栄えだったと。ところが、四組があまりにも当日の出来がよすぎたため、意外性が有利に働いたのと、ソプラノの響きと自由曲の選曲がぴったり合っていたのが勝因

だったと言われた。音楽の専門的なことはわからないが、選曲にも審査の結果が及ぶことを始めて知り、そういう理由なら二位も仕方ないなと、クラスの皆も納得したのだろう。

遥は歌い終わった時、最後に藤村の指揮を見るフリをしながらピアノを弾く柊をこっそり盗み見したことが敗因ではないとわかり、少しほっとした。

放課後になり遥は、四組に駆けて行く柊の後姿をぼんやりと眺めていた。今夜はおばあちゃんの部屋で勉強できないから……と昨夜彼女が言っていたのを思い出す。四組の夢美と約束があるらしい。ただそれだけのことなのに、遥は心にぽっかりと穴が開いたような、寂しい気持ちに苛(さいな)まれる。唯一のスキンシップであるこたつでの蹴り合いも、今夜はあきらめるしかないからだ。

そんな遥の気落ちした姿をひと目で見抜いた藤村が、遥の肩をポンと叩く。

「おまえ、元気出せよ。気にするな。誰もおまえのせいだなんて思ってないよ。二位でも充分じゃないか」

藤村の的外れな慰めに反論する気力など最初から持ち合わせていない遥は、ちらっと親友の顔を見て、帰り支度を続ける。それを言うなら、藤村。おまえこそ、落ち込めよ。指揮者はおまえだろ？と言いたいのをぐっと我慢して。

「で、堂野。さっきから廊下にいるかわいい奴らがおまえを見てるんだけど」

遥は藤村に言われるがまま、廊下に視線を向ける。あれは確か……。女子バスケの一年生部員だ。遥の眉がピクッと上がった。決してうぬぼれているわけではないが、直感でわかる。彼女たちが、これから何をしようとしているのか。

「藤村せんぱ～い！　ちょっと来てください」

部員の中で一番背の高い女の子が手を振りながら藤村を呼んだ。

藤村は遥に向かってにやりとしながら、後輩のところに行く。そして瞬く間に戻ってきて遥に耳打ちするのだ。
「あの真ん中の小さいのが、おまえに話があるんだと。きっちり断れよ。おまえの蔵城を……」　泣かすな、と最後まで言わせないうちに、遥は藤村の頭をぽかっと殴った。
「痛ってえ～。わ、悪かったよ。ぼ、暴力……反対」
頭を擦りながら謝る藤村が少し不憫になるが、そうも言ってられない。遥は、いつもの笑顔を貼り付けて後輩のところに向かった。

遥は、自分の部屋のベッドに寝転がりながら、天井で揺れる電気の紐をじっと見ていた。いっそのこと催眠術にでもかかって眠ってしまえたなら、どれだけ気が楽になるだろうなどと思いながら。
勉強机の上には、リボンのかかった包みが置いてある。中は、マフラーらしい。放課後にあの後輩がくれたものだ。
妹の希美香とも仲がいいと言っていたその後輩は、あどけない口元ではっきりと告白したのだ。堂野先輩が好きです……と。別に付き合ってくれと言われたわけではない。何も要求はなかった。プレゼントを受け取って欲しい、とそれだけだった。
最初は受け取れないと、断ったのだ。でも彼女は、今にも泣き出さんばかりに身体を震わせ、受け取ってくれと懇願する。
「じゃあ、これ。俺が預かっておくわ」
と話に入り込んで来た藤村がプレゼントを手にして、なんとかその場が収まった……はずだった。でもそのプレゼントを持て余した藤村が、結局遥にそれを押し付けて、今この部屋にその箱がある……というわけなのだ。どうしたものかと、遥の心は一向に落ち着かない。
今までにも、女子から数々のプレゼントをもらったことがある。もちろんマフラーもあるし、バスケ用のソックスや、シャーペン、ペアでつけたいからと、アクセサリーまでも……。どれも、その場

で返すようにしていたが、どうしてももらってくれとそのままになっているものもあるにはある。けれどそのたびに、何か悪いことをしているような気になるのだ。

世の中、どうしてこんなにもうまくいかないのだろう。どんなに想っても届かない気持ちがあるというのに、かたや、こうやって見知らぬ女性から想いを告げられ、理不尽さに苦悩する。遥はやりきれない気持ちでいっぱいになるのだった。

遥はその夜何度も寝返りを打ち、ようやくうとうとし始めると、部屋の中が真っ赤なリボンのかかった様々な形の箱で埋め尽くされる夢を見て、慌てて飛び起きた。どんなホラー映画よりも怖かった。制服に着替えると、真っ先に机の上の箱をカバンに入れた。今日、学校に行ったら誠意を尽くして後輩にこのプレゼントを返そうと、心に決めた。

もうすぐ十一月になる。朝晩は秋とは言えないほど、冷え込むようになった。遥は外に出て手を擦り合わせ、ぶるっと身震いをする。そして振り返ると、柊がこっちに向かって走って来るのが見えた。

「遥！　ちょっと待って」

遥は、その場に立ち止まる。

「遥……。今日、学校が終わったら話したいことがあるんだ。いつもの裏山で待ってるから来て欲しいんだけど」

「わかった。いつもの裏山って、アレだよな？」

「うん。そう。じゃあね！」

それだけ言って、また駆け出して行く。重そうなカバンのせいで少し身体を傾け、スカートの裾が跳ねてるのもお構いなしに。

遥は柊の話があまり期待する内容ではなさそうなのを、長年の付き合いからすでに感じ取っていた。でもこれはある意味チャンスではないのだろうかと思い直す。遥はますますカバンの中の箱ときっちり決別する必要があると再認識した。今日こそ運命の日なのだ。

遥は次第に気持ちが昂(たかぶ)るのを抑えられなかった。
それにしても。アレで分かり合えるなんて、まるで長年連れ添った夫婦みたいだ……と遥は裏山を見上げながら眩しそうに目を細めた。

番外編　初恋は永遠に　１３

遥は家に帰りつくとカバンだけ祖母の住む母屋の納戸に投げ込み、ネクタイを緩めて、裏山の獣道（けものみち）を駆け上がった。何としてでも柊より先に約束の場所に着きたかったのだ。今ごろ柊は彼女の家の西側にある農道から続く山道を登っているに違いない。遥は急な斜面も物ともせず、瞬く間に山の中腹の開けた場所に出た。

落ちている栗のイガを避けるようにして、ふかふかの落ち葉の上に身体を横たえる。太陽は傾きかけているけれど、朝の寒さが嘘のように、山の中腹の果樹園は暖かい陽だまりに包まれていた。遥は空を見上げながら、柊にどう話を切り出したものかと考え始める。

まずは柊の話とやらを聞いて、その後、どのようにして彼女を引き止めるのかが第一関門。そして、どうやって気持ちを伝えるのかが第二関門だ。引き止めることさえ出来れば、あとは野となれ山となれ、どうにでも出来る。おまえが好きだと単刀直入に言えばいい。

柊はどんな顔をするだろうか。また冗談でしょと言って笑うかもしれない。それでもいい。そうなったら、何も言わず……そっと抱きしめてやればいい。そして、そして……。遥はそこまで考えて、胸がぎゅっと締め付けられるような気持ちになる。そういうのは女子の特権だと思っていたが、どうもそうではないようだ。男であるはずの遥の胸は、ありえないほどの高鳴りに襲われ、もはや鎮めることなど不可能のように思えるほどだった。

目の前の栗の木についている葉がかさかさと音を立てる。遥は、心地よい風に吹かれながら、地面から伝わってくる足音を背中に感じていた。右手の方に目をやると、柊が走って来るのが見える。遥は、腕を頭の後ろに回して寝そべったまま、息を弾ませている柊に声をかけた。

「よおっ！　約束どおり来たけど……。何の用？」

柊は驚いたような顔をしながら、遥の横に腰を下ろす。まるで遥がそこにいるのが信じられないとでも言うように。
「は、遥。忙しいのに呼び出したりしてごめん」
少し恥ずかしそうに目を逸らす柊の横顔をじっと見る。
「実は藤村のことなんだけど……」
――ふ、藤村？
いきなり彼女の口からこぼれ出る親友の名前に遥は目を見張った。遥の心臓がショックのあまり、拍動をひとつ、すっとばした。
「へ？　藤村？」
遥はまさかとは思いながらも、柊の真意を探るように、その一言一句に集中する。
「うん……。わたしさあ。藤村の恋のお手伝い、もう辞めにしようと思って。だからあんたひとりで応援してあげてって、そのことを頼もうと思って……」
なんだ、そういうことか……と納得しながらも、嫌な予感が遥ににじり寄る。
――でも、急にどうして？　まさか、柊、おまえ、あいつのこと……。
再び、遥の脈拍が間隔を詰め大きな音をたててドクドクと刻み始める。
「えっ？　でもおまえがあいつの力になってやんないと、夢美との橋渡しできねえよ？」
遥は、枯葉が髪についたままなのも気にせず、ガバッとはね起きた。
「そ、それが問題なの……」
遥が問い詰めるように近寄れば、柊がずりずりと後ろに下がる。
「実はわたし、夢美の本当の好きな人のこと知ってて……。だから、藤村を無理やり押し付けるようで、申し訳なくて……」
遥の心に少しだけ陽が射す。なーんだ、そんなことなのか、それなら仕方ないなと。自信を取り戻した遥は、気持ちが沈んでいる柊

を救い上げるように明るく答えた。
「そうだったのか……。じゃあおまえは、その夢美の本当に好きな奴との間を取り持ってやりたいんだな。わかった。そういうことなら俺にまかせておけ。俺は藤村を応援する。おまえは夢美を応援する。後は、二人にまかせる。それでいいな？」
遥はこれですべて問題は片付いたとでも言うように、晴れ晴れとした態度でその場にすくっと立ち上がり、髪についた枯葉を振り落とすようにして、頭を二、三度振った。さーて、次はいよいよ……というところで、柊の手が遥のズボンの裾を引っ張る。
「あっ、遥。ちょっと待って」
別にどこかに逃げ出そうとするつもりはないのだが。遥は訝しげに柊を見下ろす。
「二人にまかせるって、そうもいかないんだ……。夢美を応援したいのはやまやまなんだけど、その相手ってのが……」
もうその話は終わったんじゃないのかと訊ねたいのを堪えて、遥はまだ冴えない表情の柊をじっと見る。夢美のその相手というのが何か問題でもあるのだろうか。遥はもう一度その場に屈(かが)みこみ、柊と目線を平行にする。
「その相手？　おまえが困るような相手って、そんな奴がいるのか」
柊の瞳が微かに揺れる。遥は自分で訊いておきながら、彼女の口から自分以外の名が語られることに恐怖を感じていた。たとえば、あいつだとしたら……。
「誰だよ。もしかして大河内？　……そうなのか？」
遥は、どうか違うと言ってくれと祈るような気持ちで、その名を口にした。すると柊の目がぴっと焦点を合せてくる。
「そんなわけないでしょ。もし夢ちゃんが大河内君が好きならこんなに悩まないよ。それに言っとくけど、わたしが大河内君と仲良くするのを邪魔するのはあんたなんだからね！　これ以上、進展のしようがないっていうの！」
遥は柊の剣幕に胸を撫で下ろす。夢美の相手が大河内じゃないと

わかって、随分と気が楽になった。そうだよな、大河内が柊に近付かないように最大限の注意を払っているのは自分だったと、遥は改めて我が身を振り返った。
「あ、あれは邪魔とかじゃなくて、おまえのためを思って、その……なんだな？　そうそう、おまえに特定の人が出来ると不便だから……あ、いや……」
遥は完全に舞い上がってしまった。柊が不信感を募らせた視線をよこす。
「不便？　……ということは、わたしは遥のために、一生特定の人を作れないってことだよね？　なんかおかしくない？　それにこの先誰からも相手にされなくて、おまけに数少ない出会いをあんたに阻止されて、わたしはずーーっと一人ぼっちで寂しく生きていかなくちゃならないってことだよね？」
ここで彼女を怒らせると後々の計画がうまくいかなくなる。遥は、あわてて弁解モードに入った。
「何もそんな大げさな意味で言ったんじゃないよ。おまえに本当に好きな人ができたら、それはそれできっと応援するから。なっ？……だけど大河内はだめだ！」
これだけは譲れなかった。大河内だけは遥のなかで最高にNGなのだ。もちろん他の誰が相手であっても、応援する気など、さらさらないのだが。すると、急に目の前の柊の顔がほわっと和(やわ)らいだ。
「それなら安心して。わたし好きな人いるから、大河内君には何があってもなびかないよ。どう？　これなら文句ないでしょ？」
遥は、柊の眩しい笑顔に気をとられて、うっかり聞き逃すところだったのだ。
「そうか……って、おい！　おまえ好きな人いるのか？　誰だ、誰なんだっ！」
もう黙ってはいられない。これは遥にとって、大ピンチだ。遥は半ばやけくそになって、柊に詰め寄っていた。
「なあ、教えろよ……。俺も教えるからさあ。ねえ、ひいらぎちゃ

ん、お、し、え、て！」
柊の顔色がさっと変わる。遥はちょっとやりすぎたかと反省するが、もう遅かった。
「あんたの好きな人なんて聞きたくもないし、わたしも教えない。いい？　わかった？」
敵のガードは鋼のように堅い。少々のことでは破れそうにない。遥は、今日もまた気持ちを伝えることなく、悶々とした寂しい夜を迎えるのかと落胆しかけた……その時だった。
「もうっ、なんでこんな話になるの。だから、今話してるのはそんなことじゃないでしょ？　夢ちゃんと藤村のことよね！　ほんとに、遥はのんきなんだから……。なんで夢ちゃんは、こんな人がいいのかなあ。はあ……っ」
柊がため息と共に発したその言葉。こんな人とはつまり、遥のこと。
――ってことは、夢美が好きなのは俺？　で、柊はそんな夢美を応援したくない……。それって、柊は俺のことが……。
遥は一瞬にして、柊の言葉のカラクリを理解した。

番外編　初恋は永遠に　１４

遥は柔らかくてしなやかなその手を離したくなかった。ずっとそのまま握っていたかった。でも、時は待ってはくれない。それは無情にも誰の前にも平等にそして瞬く間に過ぎ去ってしまう。

夕日が沈みきってしまう前に、柊を家に帰さなくてはいけない。いつまでも栗の木のところに踏みとどまっているわけにはいかないのだ。

「そろそろ帰るか」

遥が栗の木を見上げながら言った。

「うん。帰ろう」

遥を窺うように見ながら柊が答える。

隣にいるのはいつもの柊のはずなのに、心の中をさらけ出したとたんこんなにも意識してしまい、うまく話が続かない。いったいどうすればいいのだろう。教科書にも載っていないし、もちろん誰も教えてくれない。お互い、口をつぐんだまま、山を下り始めた。

帰りは柊が登って来た方の道を選び、ゆっくりと下っていく。柊も同じ気持ちなのだろうか？　このまま時が止まってしまえばいいと思ってくれているのだろうか？　遥はまだ尚湧き上がる不安に、我ながらあきれてしまうのだった。

山道を下りると軽トラック一台がやっと通れるくらいの狭い農道に差し掛かる。あと数百メートルも行けば、彼女の家が見えてくるはずだ。そうなる前にこの手を離さなければならない。こんなところを誰かに見られでもしたら、大変だ。ためらいがちに柊をそっと覗き見る。同じようにこちらを見た彼女が、一瞬だけ目を合わせたのち、頬を赤らめてそっぽを向く。

ついさっきまでは、ただの親戚の女の子でしかなかったのに、今はこうやって指を絡ませ手を繋ぎ、心を通わせているのだ。時折ぎ

ゅっと握り締めてくる彼女に応えるように遥もその手に力を入れる。もちろん痛くない程度に。彼女を包み込むように、ありったけの想いを込めながら。

まさかいきなりプロポーズまでしてしまうなんて、遥自身、予想外の出来事だった。ただひと言、おまえが好きだとだけ言うつもりだったのに、夢美のことを口走ってしまった柊に便乗するように、一気に結婚の約束まで取り付けてしまった。

遥はそれを全て受け入れてくれた柊に、ますます愛おしさを感じていた。直接言葉にすることこそなかったが、もしおまえの相手が俺ならば、その話乗ったと言った時、柊は真っ直ぐに遥を見て、何度も何度もコクコクと頷いたのだ。わたしが好きなのは遥だよと訴えかけるような目をして。

遥はもうこれ以上のものは何も必要なかった。柊の姿を見ればそれで充分だった。彼女の気持ちがわかった以上、もう怖いものなんて何もない。

大河内の毒牙にかかる前にしっかりと彼女を繋ぎ止めておくには、結婚の約束しかなかった。好きだなんて言葉はいつだって言える。でもプロポーズは遥にとって、それ以上の価値のある崇高なものだったのだ。

おまえは俺のものだという確固たる証明。彼女への忠誠のあかし。そして未来への展望。遥の柊への想いは、このプロポーズにすべて凝縮されていた。

とうとう柊の家の裏庭が見えてきた。遥は彼女の手を引き寄せるようにして立ち止まり、名残惜しそうに一本ずつ指を解き、その手を離した。彼女のぬくもりが次第に薄れていく。そして、いつしかまた指が氷のように冷えていくのだ。何も言わずに見詰め合っている彼女の目が、少し潤んでいるように見えるのは気のせいだろうか。瞳が微かに揺らぎ、吐息が漏れる。

こういう時こそ、何か気の利いた言葉でもかければいいのだが、今の遥にはこうやって彼女と見つめ合うのが精一杯で……。その時、急に伏目がちになった柊が、ぼそっとつぶやくように言った。

「遥……」　と。

「ん……？」と訊き返す。

「今日は、ありがと。わたしね、十五年間生きてきて、今日が一番嬉しかった」

遥の心が震えた。柊の何気ないひと言ひと言が、遥を天にも昇らせてしまうのだ。

「ああ……」

俺も……と言いかけて、黙り込む。プロポーズは出来ても、小さなひと言がその何百倍も恥ずかしく感じるのはなぜだろう。心の中で、柊、ごめんなと謝る。

「母さんが心配するから、帰るね。後で、おばあちゃんちに行くから……。じゃあね！」

そう言って少し首を傾げ、にっと笑う。そしてバイバイと手を振りながら、家まで走って行った。遥は立ち止まったまま遠ざかる彼女を見送る。本当は追いかけて、もう一度その手をつなぎたかった。いや、この腕で抱きしめたかった。出来ることなら、その唇も奪いたかった……。けれど、十五歳の遥には、それはエベレストに登るよりも難しいことのように思えて。当分はこのままでいいんだと自分に言い聞かせる。柊もきっとそんなことはまだ望んでいないはず……と都合のいいように解釈しながら。

遥はすっかり太陽が沈みきった西の空を眺め、いつしか鼻の奥がツンとするのを必死で堪える。そして、大きく息を吸いこんだあと、涙が一筋頬を伝ったのを知る。

嬉しさと愛おしさで胸がいっぱいになる。人を想って涙を流したのは初めてだった。自分の想いを伝え、そしてそれを返してもらうことがこんなにも幸せだとは今の今まで知らなかったから。

遥は制服の袖で涙を拭い、両手の拳を握り締めて、よっしゃあっ！　と叫んだ。そしてそのまま直接祖母の家に駆け込む。満面の笑顔と共に……。

番外編　初恋は永遠に　１４（後書き）

ようやく結婚の約束まで書き終えることができました。いかがでしたでしょうか？
この後、高校生になった遥も少しだけ追っていけたらいいなと思っています。

番外編　初恋は永遠に　１５

体育館でバスケットボールを手にしたのは何日ぶりだろうか。高校受験が終わった後、三月いっぱいは中学校で後輩達を相手に藤村と共に連日汗を流していたが、四月に入って高校の入学式までの間は、一切、ゲーム形式のバスケはやっていない。

ちょうど身体がうずうずしていたところだった。たとえわずかな時間でも、コートの中をところ狭しと動き回った後の爽快感は何ものにも代えがたい。藤村も自主トレをやっていたのだろう。遥に負けず劣らず、俊敏な動きは健在で、対戦相手の二年生を本気にさせるのに充分なボール捌きを見せていた。

バスケの体験入部を終えたばかりの遥は、さわやかな春の風を受けながら、家に続く坂道をゆっくりと上っていた。

それにしても夕べは……。遥は昨夜の出来事を学校で何度思い起こしたかしれない。同じ教室で机を並べる恋人でもある彼女が、大胆にも自分に抱きついたのだ。

遥自身、どれほどそうしたかったか。彼女が怯えるようなことだけはしたくない、まだ時期尚早だと彼女の顔色を窺ってばかりいた自分はいったい何だったのだろうと、情けなく思えるありさまだ。

今でもはっきりとその柔らかな感触を思い出す。首筋にかかる彼女の髪がむずがゆく、そして彼女の頬が当たった肩甲骨が、蕩けてしまうのではないかと感じるくらい甘やかな一瞬だった。

いったいあいつは何を考えているのか。遥はますます女心というものがわからなくなっていた。

確かに、去年の秋……。子どもの頃からの思い出がいっぱい詰まった栗の木の下で、将来を誓い合ったはずなのに、幼なじみの彼女は遥にずっと冷たかった。二人っきりになっても、甘えてくれるでなし、頼られるでもなし……。二人の距離は縮まるどころか、逆に

どんどん広がっていくようにさえ感じていたのだ。
もちろん、人前でベタベタするのは遥の本意ではない。ただ二人だけの時くらい、わがままを言って欲しかったし、悩みがあれば相談して欲しかった。手のかからないある意味優等生な彼女だからこそ、遥はさまざまな邪念を押しのけて、必死にバランスを保ってきたのだが、もう我慢も限界というところまで来ている。
でも……。体勢を変えて遥が抱きしめたとたん、彼女は身を翻し、逃げ帰ってしまった。これから先、彼女とはどうやって付き合っていけば良いのか、遥自身も方向性が見出せないでいるのだ。
同級生に自分たちが付き合っていることを知らせてもいいかと柊が相談に来たのだが、内容が内容なだけに、遥はなかなか首を縦に振ることができなかった。付き合って以来念願の彼女からの相談だったにも関わらず……。余計なことをして、火に油を注ぐような結果を招かなければいいがと、内心穏やかではなかったのだ。
もうすぐ家の門が見えてくるところまでたどり着いた時、遥の怖れていた事態が、すでに火蓋が切られていることに気付かされる。
遥を好きだという中学時代の同級生、白石史絵が、血相を変えてこっちに向かってくるのだ。遥と目を合わせたとたん、彼女が立ち止まる。
「ど、堂野君」
「白石？」
そこにいたのは、いつも正々堂々として真面目一本やりのオーラを振りまいていた遥の知っている白石ではなかった。彼女は遥を見たとたん、視線を彷徨わせ、落ち着きなく手を動かし、指を開いたり閉じたりする。緊張しているのだろうか。あの白石が？　遥はまるで別人のような彼女にびっくりしたが、白石の背後からパタパタとサンダルの音をたてながら走ってくる恋人の姿にもっと驚かされた。
「ひいらぎ……」
急激にスピードを落としたため、前につんのめりそうになりなが

ら立ち止まる。柊は息を弾ませながら、振り返った白石を気まずそうに見た後、すがるような視線を遥に向ける。
遥の方に向き直った白石は、勇気を振り絞るようにして、口を開いた。
「堂野……君。あ、あの……。今、ひいらから訊いたんだけど……あなたたちのこと」
やっぱりなと遥は思う。不器用な柊は、ストレートにすべてを言ってしまったのだろう。ならば、包み隠さず言った方がさっさとこの場を収拾できる。
「ああ……。悪いけど、多分柊の言ったとおりだ。じゃあ……」
こういう時、言い訳はしないほうが後腐れがない。頭のいい白石なら、これですべてを悟るだろうとふんだ遥は、その後、間髪いれずに家に向かう手段を選んだ。判断力の鈍っている柊の手を取り、家に連れ帰る。
その時、白石が柊に何か耳打ちしたようだが、そんなことはどうでもよかった。とにかく、目にいっぱい涙をためて震えている柊を、安心させてやりたかったのだ。
玄関に入り戸を閉めた瞬間、遥は柊を抱きしめていた。いつものようなためらいや葛藤はどこにも無かった。ただ目の前の彼女がいじらしくて、そうせずにはいられなかったのだ。
「ちゃんと、言ったんだろ？」
腕の中で震えている柊に訊ねると、こくっと頷く。
「おまえがあいつに俺達のこと言うって決めたんだろ？　だったらもう泣くな。あいつのことだから、明日になったらケロっとしてるさ。あんなやつ、放っておけばいい。あいつは俺のことより、おまえに対してライバル心があるだけだろ？　勉強も何もかも誰にも負けたくないんだよ。な？」
今、遥が柊に言えるのはこれだけ。もっと気の利いた甘い言葉を掛けてやれたらと思っても、こういう状況に慣れない遥は、これが精一杯の愛情表現だったのだ。

余程辛かったのだろう。自分と付き合ったがために、柊にこんな思いをさせてしまったことに、激しく自責の念に駆られる。遥は自分の胸に顔を押し当ててむせび泣く柊の背中を労わるように延々と撫で続けた。

どれくらいそうしていたのだろう。ようやく泣き止んだのか柊がごそごそと動き出し、顔を上げた。真っ赤になった目と鼻が、小さい頃の柊と重なる。よくけんかをして泣いていたあの頃の顔と一緒だった。柊がじっと遥の視線を捉える。すると、俄かに遥の心は乱れ始めるのだ。

――柊、そんな目で見るな。

遥の心音は、あたりに共鳴してるのではないかと思えるくらい激しく鳴り響く。このまま彼女と唇を合わせてみたい……。そんな衝動に駆られた時、もう一人の自分が、いまはまだ、やめておけ……と耳元でまるで天使の使いのようにささやくのだ。

「さっ、なんかうまいもんでも食って、病院に行くか」

抱きしめていた腕をほどいて、柊の肩にポンと手を載せる。

「おまえも赤ん坊、見に行くだろ？　着替えて来いよ。それにしても、おまえがそこまで制服好きだったとはな……」

遥は柊を離した直後に、もう後悔していた。なんで願ってもないせっかくのチャンスをフイにするんだと。自分の愚かさにガックリと肩を落とす。わざわざこんな時に、母親と生まれたばかりの弟の見舞いに行く必要がどこにあるというのだろう。

遥の高校生活は始まったばかり。どこまでもどこまでもスローな恋路も、まだ始まったばかりなのだ。前途多難な青春の日々はこれからも長く苦しくそして時々甘く続いていくのだった。

番外編　初恋は永遠に　１６

遥は窓を開け、夜空に冴え渡る星を眺めていた。いつだったか、ハッブル宇宙望遠鏡が捉えた何万光年もの彼方の星の映像をテレビで見たとき、あまりの感動に胸が震えたのを思い出す。人間の目に映る星なんて、ごくわずか。広大な宇宙にはそれこそ数え切れない程の星が存在するのだ。

ついさっきまであんなに激しい季節風が吹き荒れていたのに、今では嘘のように風が止み、あたりがしんと静まり返っている。気温はどんどん下がっていく。寒ければ寒いほど、星の輝きが増すように思えるのは気のせいだろうか。吸い込む空気はまるで凶器のように、遥の肺の奥に鋭い刃を突き立てる。それは氷よりも冷たく、そして痛みを伴うのだ。

フリースのジャケットのファスナーを首まで上げて、冷気の進入を食い止める。けれど、そんなことなど無駄な抵抗だとでも言うように遥の身体はどんどん冷えていく。それでもおかまいなしに、遥は窓から身を乗り出し、隣の民家を見る。ピンクのカーテンがかかっている部屋がお目当ての場所なのだが……。

夏場は閉めることのなかった雨戸が窓を覆い、あたりの暗闇にすっかり同化していた。でも、昔ながらの木製の雨戸は、いつしか老朽化が進み、隙間からかすかに灯かりが漏れ出ている。柊はまだ起きているのだろうか。勉強の最中なのかもしれない。遥の心は次第に柊の面影で埋め尽くされるのだ。

遥はふと何かを思いついたように室内に引き戻ると、急いで窓を閉める。そして冷え切った指先を擦り合わせるようにして温め、廊下にある電話の子機を手にした。自分の部屋のベッドに座り、唯一暗唱している番号を打ち込む。しばらくコールが続いた後、ようやく電話が繋がった。

『はい。蔵城でございます』
柊が直接電話に出る可能性はゼロに等しいと初めから予測していた遥は、彼女の母親の声にも動じることなく応える。
「こんばんは。遥です。あの……」
『まあ、はる君。何？　いったいどうしたの？　まさか、綾子さんに何かあったんじゃ……』
遥が用件を伝える前に、早とちりした隣の家の母親に言葉を遮られる。
「あっ、違います。明日のことで、柊に話があって」
『ああ、ああ！　そうだったわね』
電話口の向こうで両手をパンと叩いているのが目に見えるようだ。彼女は娘の柊に負けないくらいおもしろい。そのユニークさは他に類を見ないほどだ。遥はこの人が親戚中で一番自分と気が合うと常々そう思っている。
『はる君。いよいよ明日ね。大きな声では言えないけど……多分、あの子はダメだと思うのよ。でもまあ、こっちの女子大も受けてるし、たとえ結果が全敗でも、英語の専門学校に通うって方法もあるしね。はる君なら大丈夫よ、きっと。あの子の分も、がんばってきてね』
遥はあまりにもあけすけな柊の母親の予見に声を立てて笑いそうになったが、どうにか堪えた。明日は大学受験のために、柊と一緒に上京することになっているのだ。
「おばちゃん、それじゃあまりにも柊がかわいそうだよ。あいつ、この頃やる気出してるし、大丈夫だと思うけど」
『ふふ、ありがと。そう言ってもらえるだけで充分よ。だって高校受験だって、ある意味奇蹟だったわけだしね。あの時に運はすべて使い果たしちゃったんだもの。はる君、今まであの子の勉強の面倒を見てくれてありがとう。出来の悪い生徒で、ホント、申し訳なかったわ。あらいけない。こんなことしゃべってる場合じゃないわよね。ちょっと待ってね』

……柊っ！　はる君から電話よ！　という声に続いて、もしもし？　といかにも怪訝そうな声が遥の耳に届く。
『電話、こっちに切り替えたけど……。何？』
あくまでも柊の声はそっけない。やはり電話などするべきではなかったのだ。出端をくじかれた格好になった遥は、自分の勇み足を悔いる。
「……せっかく電話してやってるのに、もっと喜べよ」
遥は、隣の部屋の喜美香に感付かれないように声を潜めて話した。
『そんなこと言ったって……。こんなの初めてだもん。何かあったのかなって、フツー誰だってそう思うよ』
「じゃあな……」
全く持って、おもしろくない。いったい彼女に何を期待していたというのだろう。遥は自己嫌悪に陥りながら、すぐに電話を切ろうとした。
『は、遥。待ってよ。なんでそんなに早く切るの？　何か用事があったんじゃ……』
遥は外線を切ろうとボタンに手をかけた瞬間、受話器からこぼれ出る柊の声にその手を止める。
「ったく。何か用事でもなきゃ、かけちゃダメなのかよ。ただ、おまえの声が聞きたかったんだよ」
遥はそう言った後、自分のとんでもなくストレートな発言に、気恥ずかしさを覚えた。相手の顔を見ないからこそ言えるのだが、それでもどこか照れくさい。
『……』
それなのに。柊ときたら、黙り込んだまま何も言わない。ますます居たたまれなくなる。
――何か言えよ……。
遥の願いも空しく、二人の間にあるのは長い沈黙だけだった。
「なあ、柊……」
遥がやっとの想いでそれだけ言うと、柊がカチャカチャと受話器

を握り直したような音が聞こえた。そして……。
『あ、あの……。わたしも、同じこと、考えてた。遥の声が聞きたいって思ってた』
柊の声が、遥の心にじんわりと染み渡る。
「そうか……。明日、おまえの親父が駅まで送ってくれるんだったな」
『うん』
「あさっての大学入試、がんばろうな。じゃあ」
これ以上はもう無理だった。やっぱり、電話は苦手だ。遥は何事も直接顔を見て話すのが一番だとしみじみ実感する。
『電話、ありがと。嬉しかった。……でも』
「でも？　でもって何だよ」
『わたし、せっかく携帯持ってるんだし、なんでそっちに電話してくれないの？　こんなことしてたら母さんに怪しまれるよ』
遥はハッとなった。そうだった。彼女は年が明けてから、携帯電話を持つようになったのだ。でも遥はまだ持っていない。パソコンのメールがあれば十分な彼にとって、携帯電話は無用の産物でしかない。それに、携帯の番号は長すぎてどうも憶え辛い。それでついつい、慣れ親しんだ彼女の家の電話にかけてしまったというわけだ。でも柊の言うことにも一理ある。
「わかった。これからそうするよ。じゃあ、おやすみ」
『おやすみ……。好きだよ、遥……』
遥が子機を耳から離したとたんに、聞こえてくるとどめの一言。よくもぬけぬけとそんなことが言えるもんだと、半ば、あきれたように大仰にため息をつく。でも、本当は遥だって嬉しいのだ。顔が自然とにやけてしまうくらいに。
遥は電話を切った後、握り締めた子機に向かって、俺もおまえが好きだよ……とそっとつぶやいた。

番外編　初恋は永遠に　１６（後書き）

いつも読んでいただき、ありがとうございます。
次回、最終話になります。

番外編　初恋は永遠に　１７

次の日の早朝、遥は玄関先で柊が来るのを待っていた。
いよいよ明日は大学入試だ。今日から遥は柊と共に東京の祖父母宅に泊めてもらうことになっている。スポーツバックには着替えと参考書、筆記用具。そして、受験票も入れた。忘れ物はないはずだ。よし。遥はこの決戦に絶対に勝ってみせると、密かに意気込んだ。
車のエンジン音が家の前に近づき、止まった。柊の父親の車だ。駅まで二人を乗せて送ってくれることになっている。寒いから引っ込んでろというのに、ぞろぞろと見送りに出てくる家族に辟易としながらも、遥は「じゃあ、行ってくるわ……」と声をかけ、家を後にした。

いよいよ始まる、本命の大学入試。隣に座る柊は三日前に滑り止めに地元の女子大を受けている。しかし滑り止めと言っても、かなりの難関校だ。英語の配点のウエイトが大きいのを味方につける作戦で、大勝負に出たのだった。このところの柊の成績の上昇には目を見張る物があった。英語だけで言えば遥といい勝負で、一番最近の模試では、一点差で危うく負けるところだったのだ。
でも遥にはわかっていることがあった。それは、柊が自分と同じ大学を選んだ理由。その大学に行ってこれがやりたいという目標があるわけでもなく、ただ遥と一緒にいたいからというだけで決めたということを。遥はそれに気付いた時、素直に喜べなかった。自分の存在が、彼女の生き方の選択をも狭めてしまっているのではないかと危惧したからだ。
何度か本人に問いただしたが、意思は堅い。絶対に受けるんだと言って譲らない。彼女の親といえば、どうせ受かるわけないんだから、好きなようにしたらいい……とこれまたのん気に笑っているものだから、もうどうしようもなかったのだ。

もちろん、同じ大学に進学できるのであれば、それはこの上ない歓びには違いないのだが……。
親譲りののん気なお姫様は、遥の苦悩もそ知らぬ顔で、祖母にもらったおやつ入りの巾着袋を大事そうに抱きしめている。

彼女の父親に頑張って来いと言われて車を降りる。寒さにブルッと身震いをしながらコートの襟を立て、柊と連れ立って駅の改札をくぐった。プラットホームに射し込む朝日が、とても眩しい。遥は柊の手を引いて快速電車に乗り込み、新幹線の乗車駅に向かった。

平日の朝だというのに新幹線のホームでは利用客が行列を作っていた。ホームにすべるように入ってきた新幹線の車内はすでに乗客でいっぱいだ。自由席は新聞や雑誌を読みながら眠そうな目をしているサラリーマンでほぼ満席なのには驚かされる。柊の父親の助言で指定席を取っていたのは賢明だった。荷物を頭上の棚に上げ、空席が目立つ指定席の車両に柊と並んで腰を下ろす。座ったとたん、彼女がさっきの巾着袋をごそごそと物色し始めた。あきれた遥は、腕を組み、前方の電光掲示板式の時事ニュースに目をやる。すると、柊が指でつんつんと遥の腕を突付くのだ。
「食べる？」　と。
見ると、手のひらに彼女の大好物がいくつか載っている。
「ああ。またこれか。ばあちゃん、俺達のこと、いったいいくつだと思ってるんだろうな」
祖母の部屋にあるおやつの缶の中には、いつもこれが入っていた。
「ふふふ。子供の頃遥とけんかして泣いたら、すぐこれを口にポンと放り込んでくれたっけ。わたしはピンクが大好きで、遥は黄色が好きだったよね」
柊のこういう物覚えのよさだけは、遥も敵わない。脱帽だ。
「良く覚えてるな？　その記憶力を、是非とも勉強に応用して頂きたいものだけど」

「もうっ、遥ったら。そうできれば、今頃こんなに苦労してないよ。そうだ！　甘いもの食べて、頭の働き良くしておこうっと」
柊は手のひらのピンクと白のそれを指でつまんで口にポンと投げ入れた。そのとたん、口元をすぼめて、幸せそうな笑顔になる。遥も黄色を選んで口に入れた。やっぱり甘い。子どもの頃は大好きだったそれは、今ではもう甘すぎて、それ以上食べるのは無理だった。今の遥には柊がいれば……。それだけで充分だった。

あと二時間で東京だ。大学に入学したらどんな生活が待っているのだろう。自分の横に、こうやってずっと柊がいるのだろうか。遥は俄かに不安になる。果たして、柊と離れて生きていけるのだろうかと。
「なあ、柊？　大学に行ったら何がしたい？」
柊の耳元に顔を寄せて訊ねる。遥はなんとしてでも、彼女を繋ぎとめておきたかった。目標もなく大学を選んだなどと偉そうなことを言っておきながら、もし彼女が地元の大学に行くと初めから決めていたなら、遥は東京に出るのを辞めていたかもしれない。今はっきりと自覚する。
遥は首を傾げてあれこれ考えている柊を、今すぐにでも抱きしめたい衝動に駆られる。離れたくない。ずっとそばにいて欲しいと思った。
「ええ？　何って言われても……。そうだ、アルバイトがしたい！　高校の間は父さんが許してくれなかったからね。遥は？」
「俺か？　何か打ち込めるサークルとかやりてーな。別に何でもいいけど、バスケ以外のことをやってみたい」
「そっか。バスケ以外のサークルか。わたしもサークルとかあこがれちゃうよ」
「なあ柊、一緒のサークルに入ろっか？」
遥の心は柊でいっぱいだった。何が何でも、一緒に合格したいと思う。

「う、うん。そんなのもいいね。……でも、まずは合格しないと。あのね、遥。わたしさ、さっきまで、すっごく合格する気分が高まってたんだ。なんか、体の中から力がみなぎるって感じ？　でも、今は。ちょっと不安。落ちた時のこととか考えちゃう」

遥は彼女の頬にそのまま口づけたい気分になる。彼女に気付かれない程度に頬と頭に唇を寄せたことはあるが、それ以上は彼女が望んでいないような気がして、まだ未遂のままだ。案の定、柊がすっと身を引き、距離を保とうとする。

「柊、ちょっと目つぶってみろ」

不安を口にする柊に自信を取り戻させるには……。これしかない。遥も柊に負けないくらい不安になることがあった。いくら合格圏内にいるとしても、それはあくまでも可能性であって、絶対ではないのだから。他にどこも受けていない遥は、もし不合格だった場合のことを思うと、夜も眠れないことが最近頻繁にあったのだ。

柊には遥がいる。遥には柊がいる。お互いがそう思うことで自信が持てるのなら……。

「なんで？」

柊が真顔で訊ねる。遥は柊の真意を測りかねていた。この空気で、それを言うかと。これだけそばにいて目をつぶれと言えば、あれしかないはずだ。こうなったら強硬手段にでるしかない。

「いいから、黙って俺の言うこと聞け」

不服そうな顔をしながらしぶしぶ目を閉じた柊に、そっと近づく。そして……。

瞬間にそれを悟った彼女の身体がぴくっと反応し、強張る。遥は抱き寄せるように彼女の背中に手を回す。そして、何度も何度も……。唇を重ね合わせた。

どれくらいそうしていたのだろう。遥の肩の上で柊の手が震えている。でも決して嫌がってはいない。遥に応えるように、彼女の気持ちが重なった唇から伝わってくる。

なんて、甘いんだろう。遥が食べた物なのか、彼女が食べた物なのか。どっちのものかわからなかったが、それはとても甘かった。初めてのキスの味は、間違いなくこんぺいとうの味だった。

「柊。……あんまり、くよくよするな。これで大丈夫だ。きっと一緒に合格するよ」

真っ直ぐに向き直った遥は、ありえないほどに高鳴る心臓の鼓動を感じながらも、精一杯の平静を装ってそう言った。柊は顔を真っ赤にして、俯いている。

「柊、ありがとな。実を言うと……。俺も、明日が怖かったんだ。でも、今のでがんばれそうな気がしてきた。はああ、ドキドキしたよ、全く……」

遥は彼女の膝の上の手に自分の手を重ねた。はっとしたようにこっちを見る柊の頬にもう一度そっとキスをする。その時の苦々しい柊の顔といったら……。何も言わなくても、遥にはわかる。

――もうっ。ここ新幹線の中だよ。いい加減にしてよ、恥ずかしいよ。

そう言っている目だった。いや、きっと、そう思ってるに違いない。

祖母のくれたこんぺいとうは、他のどんなお守りよりも効き目がありそうだ。

遥は全ての迷いと不安を拭い去って、前だけを向いて東京駅に降り立った。柊の手をしっかりと握り締めて。

了

番外編　初恋は永遠に　１７（後書き）

読んでいただきありがとうございました。
なんとか最終話までたどり着くことができました。
番外編をきっかけに、新しい読者の皆様にも出会うことができて、とても嬉しかったです。
そして、去年から読み続けて下さっている方にも改めて感謝の気持ちをお伝えしたいと思います。
本当にありがとうございました。
尚、続きを読みたいと思われた方がいらっしゃいましたら、目次ページにリンクを貼っておりますので、そちらより、続こんぺいとうにお越し下さい。
お待ちしております。

特別編　借り物競争　～あの頃二人は……

「ねえねえ、ひいら。また来てるよ、堂野君」
夢美がわたしの耳元で、どこか楽しげにささやく。
「ええーー！　また？　んもうっ！　いったい何なのよ！」
さっきの休み時間も国語の辞書を借りに来たばかりだというのに。
今度は何だろう。
家に帰ったらただじゃおかないんだから。
わたしは不機嫌さをめいっぱい顔に出しながら、遥が立っている廊下に駆け寄った。
「で、何の用？」

実はわたしたち、中学生になってからはほとんど口を利いていないのだ。
希美香と一緒に遥の部屋におしかけても、いつも完全に無視されている。
というか、迷惑そうな顔をして、すぐにどこかにいなくなるのが常日頃のあいつの態度。
なのに遥ときたら、ほとんど毎日のように忘れ物をしたと言っては、あれ貸せこれ貸せと、隣のクラスからやって来るのだ。

「おい、シャーペンの芯！」
手にしたシルバーのシャープペンシルをかちゃかちゃと落ち着きなく動かしながら、投げつけるようにそれだけ言う。
ごめんね、とか、悪いけど、とか。
わたしを気遣う言葉はもちろん、前置きも何もない。
借りたいものの名前を最短の文章で唱える。

わたしはあきらめにも似たため息をつきながら自分の席にもどり、

筆箱から芯の入った小さなケースを取り出した。
おばあちゃんにもらったお小遣いで先月買ったものだ。

するとわたしの前の席に座っているクラスメイトが振り返った。
「蔵城、どうしたの？」
彼はいつもそうやってわたしを気にかけてくれる。なかなかいいやつなのだ。
でもまあ、それだけのこと。別に好きだとかそういった特別な感情は全くない。
「あっ、大河内君。なんでもないよ。ちょっとね。えへへへ」
わたしはこの生徒会長でもある大河内に、私生活を詮索されたくなかった。
ここは適当に笑ってごまかして、急いで遥のところに芯を届けに行くのが得策だ。
考えてもみてよ。あんな風に忘れ物ばかりする不真面目な人がわたしの親戚だなんて、クラスメイトである大河内には絶対に知られたくないからね。

はいこれ、と言って遥に芯の入ったケースを渡すと、その直後、まるで歴史の授業で習った仁王像のような怖い顔で睨まれた。
渡した芯が気に入らなかったのだろうか。
そりゃあ新品じゃないもの。あと数本しか入ってないのは仕方ない。
でも、家に帰ったら、遥の机の二段目の引き出しに新しいのがちゃんとあるんだってこと、知っているんだから。
学校ではそれだけあれば十分でしょ？
ったくもう。遥のわがままにはこれ以上付き合っていられない。
「ちょと遥。なんであんたに睨まれなくちゃならないの？　貸してあげたんだから、お礼ぐらい言いなさいよ」

こんな会話、他の人にはあまり聞かれたくない。できるだけ小さな声で、彼に催促してみる。
だって、事情を知らない人から、蔵城って意外と生意気なんだ、堂野をいじめてるって誤解されたらいやだもん。
実際、生意気でわがままなのは、この堂野遥の方なのにね。

「ねえ、ありがとうは？」
だんまりを決め込んだ遥にもう一度催促してみる。
なのに遥ときたら、冷ややかな目でわたしを見て、黙ったまま芯の入ったケースをズボンのポケットに仕舞いこむ。
なんて奴だろう。

「ねえ、遥。お礼の言葉は……」
周囲を気にしながら声をひそめ、半分息の混じったかすれた声で言う。
声は小さいけれどあくまでも口調は厳しく、まるで子犬をしつけるかのように、遥を見下ろして言い聞かせ……た。
が、本当に見下ろしていたのは去年まで。
遥の背がどんどん伸びてきて、今はほんの少しだけ見下ろしている。悔しいけどね。

「遥ったら。何とか言いなさいよ！」
「はあーー？　うっせえんだよ。おまえ、何様？」
ますます怖い顔になった遥が、低い声で唸る。
精一杯の威嚇。全くたちの悪い子犬だ。
ついにありがとうの言葉を聞くことなく、そんな捨て台詞だけを残して、教室の前から立ち去っていった。

な、なんなの？　こっちこそ、あんたは何様のつもりだと言いたい。

無性に腹立たしくなる。
わたしはその場で思いっきり、足を踏み鳴らしてやった。
頭のてっぺんからは湯気がもくもくと出ているに違いない。
この怒りが収まる方法があれば、すぐさま教えて欲しい。

夢美が心配そうな顔をしてこっちにやって来た。
「ひいら、どうしたの？　堂野君に何か言われたの？」
瞳を潤ませピンク色の頬をした夢美が遠慮がちに訊いてくる。けどわたしは容赦しない。
誰が何と言おうと許せない。あいつのせいで、はらわたが煮えくり返るほど悔しいのだから。
「んもうっ！　あいつったらひどいの。人に物を借りといて、ありがとうの一言も言わないんだよ。サイテー！　ありえない。家に帰ったら、おばあちゃんに言いつけてやるんだから！」
「ひ、ひいら。わかったから。だから、ちょっと落ち着いて」
夢美がわたしの手を取り、怒りを鎮めようとなだめる。
何の罪もない夢美にまで迷惑をかけて申し訳ないけど、でも、そんな簡単にあいつを許すことはできない。
ここが休み時間の教室であることも忘れて、頬をぷうっと膨らませ、夢美の手を振りほどいたわたしは、鼻息も荒く自分の席に戻った。
どさっと腰を下ろし、前を見ると。
生徒会長が特上の笑顔で出迎えて……くれた。
「蔵城、君は笑顔の方がいいよ。嫌なことがあっても、スマイルで。もしかして、君のシャーペンの芯、ケースごと堂野に持って行かれてしまったんだよね。よかったら、これ使って」
大河内がＨＢと書かれたブルーのケースをわたしの机の上に置いた。
そして前を向き、何もなかったかのように教科書を開いている。
これはいったい……。

「お、お、お……」
おおこうち……くん……。わたしは、感動のあまり声が出なくなってしまった。
遥とのこの違いはなんだろう。
片や子犬よりわがままで、片や中学生とは思えない大人な態度。
結局、大河内にありがとうと言えないまま、始業のチャイムが教室に鳴り響いた。

すぐさま、時間にうるさい英語の先生が教室に入ってきて、委員長の号令でみんなが一斉に立ち上がる。
三時間目の授業が始まってしまったのだ。
大河内に何も言えず、時間だけが過ぎていく。
大好きな英語の授業なのに、それすらもちっとも頭に入らなくて。
さっき、遥にありがとうと言えって、あれほど厳しく言ったのに。
やだ。このままだとわたし……。

あいつと一緒じゃない。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8773c/

こんぺいとう

2010年10月27日21時57分発行